

平成26年9月 関西大学審査学位論文

軍務経験が韓国の男子大学生の性役割観と
軍務に対する態度及びセクシズムに
及ぼす影響

沈 美恵

論文要旨

心理学においてはジェンダー研究が1つの領域としてあり、少なくない数の研究がなされてきたが、個々人の性役割観や親密関係相手認知やワーク・ライフバランスへの態度など純粋に私的空間の問題として取り上げる傾向が強い。そうした中で、論文提出者は母国韓国が男子徴兵制をとっていることに着目し、より大きな社会的視点を取り入れ心理学的実証研究によって、韓国のセクシズムの解明に挑戦しようとする研究をおこなった。

韓国は日本とともに、先進国の中でもとりわけセクシズムが強く女性の地位が低いとされ、改善の兆しは見られない。これは、韓国社会の中にセクシズムが固定化され維持されるメカニズムを求めねばならないことを示唆する。これまで、韓国のセクシズムを軍隊文化や儒教精神との関連で論じた研究があったものの、量的に豊富というわけではなく、またいずれも思弁的論考に限られていた。

韓国の男が徴兵制との関連で国を守る強き者であることを期待されそう扱われ、そして軍隊は男性を一人前の立派な社会人として完成させる社会化機関であるとみなす軍務態度が社会の中にある。この研究は韓国が分断国家であり、徴兵制を選択している数少ない国の一つであるという現状を踏まえ、それらと女性へのセクシズム的態度の関係を探る調査研究をおこなったものである。

本論文は6つの章から構成されている。第1章は研究の背景と目的について述べたものである。第2章は、両価的性差別主義(Ambivalent Sexism; Glick & Fiske, 1996)の内容と特徴、セクシズムを導く要因についての先行研究を概観した。両価的セクシズムは、伝統的な性役割に従わず男性権力を脅かす女性への否定的な感情・態度である敵対的セクシズム(HS: Hostile Sexism)と伝統的役割に忠実な女性への肯定的な感情・態度である温情的セクシズム(BS: Benevolent Sexism)の2つの次元から説明される。また韓国社会のセクシズムの歴史的背景と文化的風土についての先行研究を概観した。

第3章～第5章では実証研究を展開している。第3章の研究1では、韓国人の両価的セクシズムと特徴を分析し、韓国人の性役割固定観念と軍務態度や経験がどのような形で関連するのかを検討した。その結果、女性への敵対的セクシズムは若年層ほど低い傾向を示しているのに対して、温情的セクシズムはすべての年代でほぼ同じ水準であることが判明した。また性別や年代や軍務経験の有無に関係なく、男性が軍務経験を通じてよい(韓国男性)社会人となるという期待が高ければ高いほど、女性に対する温情的セクシズムも強くなることが明らかにされた。つまり軍務経験と軍務に対する肯定的態度がセクシズムとくに温情的セクシズムと関係していることが示唆された。

研究2では、徴兵制のない日本と徴兵制のある韓国の男子大学生の性役割観と性役割態度及びセクシズムの様相について検討した。結果は韓国の男子学生は日本の男子学生より、強い性役

割観と女性への温情的セクシズムを持っていることが判明した。また韓国の男子学生の性役割態度は、伝統的な性役割に従わない女性への否定的に評価につながっていた。韓国と日本はどちらも女性の地位が低く、儒教などの文化でも共通性があるとの仮定に立ち、性役割観とセクシズムにおいて韓国が日本より高く現れたことに対して、韓国の兵役との関連性の点から考察が加えられた。

第4章の研究3から研究5までは、韓国大学生を対象に調査を実施したものである。研究3では、軍隊を経験していない男女大学生の性役割観と家父長意識、軍務に対する態度、そしてセクシズムの違い、および性役割観と家父長意識、軍務に対する態度がセクシズムに及ぼす影響について検討した。結果は、男子の方が女子より家父長意識と敵対的セクシズム・温情的セクシズムのいずれにおいても高得点を示した。軍務を肯定する態度においては性差は認められなかったが、軍務否定的態度は男子の方が女子より強かった。つまり「男は軍隊に行ってこそ一人前」「国防の義務を果たしてこそ韓国の男」という意識があり、軍務生活を通じて家族への愛や責任感、自立心など多くのことを体得することができるという軍務を肯定的に捉える態度は性別を超えて見られ、広く浸透している態度であることが示された。しかし男子大学生の場合、軍務は自分が実際に経験しなければならないものであり必要とは考えつつも同時に負担とも感じている。それが軍務を負担しない女性へ、温情的セクシズムよりもまず、あからさまでネガティブな態度である敵対的セクシズムとしてあらわれている可能性が示唆された。

研究4では、軍務経験の有無による違いを明らかにするために、どちらも大学生でありながら既に軍務を経験した男子とこれから入隊する未経験男子に区分し、その2つの集団間の性役割観とセクシズムにおける違いと、軍務経験が性役割観と女性に対する敵対的セクシズムや温情的セクシズムに与える影響力について検討した。その結果、軍務経験者の方が未経験者より強い男性性を持っていることが明らかになった。しかし軍務経験者の敵対的セクシズムは、未経験者より有意に低かった。軍務経験後、女性を敵対対象と見るより、保護対象として認識するようになった可能性が示唆される。

研究5では、軍隊の何が軍務態度とりわけ「真の男」を養成するという意識を作り出すのかを明らかにするために、軍務の環境要因並び訓練要因の違いに着目して検討した。その結果、「真の男」意識に、軍務の環境要因や訓練要因が関連していることが明らかになった。厳しい環境と訓練という条件に耐えた前方の戦闘兵は、男性性が「真の男」意識を通して温情的セクシズムに影響を与えるが、軍務の条件が比較的緩やかな後方の非戦闘兵の場合は、軍務経験がない男子大学生と大きな差がなかった。肉体的精神的試練が大きいほど、「真の男」意識は温情的態度を肯定的に受容することを意味し、軍隊とくに前方のような厳しい経験をすることで、「真の男」としての自覚と責任意識が培われ、軍隊に関与しない存在すなわち女性・子どもを守ることを国防意識の一面として

意識するようになると考察した。

第5章では、軍務経験による個人内の変化に注目して、入隊前と約2年間経過の除隊後の2度にわたり縦断的調査を実施し、性役割観と軍務に対する態度及びセクシズムがどのように変化したかについて検討した。その結果、男子学生の性役割観は入隊前より除隊後で高くなり、軍務に対する態度も肯定的になっていた。入隊前の男性性は「真の男」意識と敵対的セクシズムに有意な影響を及ぼしていたが、除隊後にはその影響力が消え、入隊前の女性性は「真の男」意識に対し負の影響を及ぼしていたが、除隊後はその影響が消えた。また「真の男」意識は、敵対的セクシズムと温情的セクシズム両方に影響を及ぼしていた入隊前と違って、除隊後には敵対的セクシズムへの影響がなくなり、温情的セクシズムにだけ影響を及ぼしていたことが明らかになった。これらの結果は、軍務経験は男子学生の「男らしさ」を高め、女性を男性の保護対象と見なす温情的セクシズムの形成につながることを示唆している。

最後の第6章では、これまでの研究をまとめ総合考察をおこなった。本研究の意義は以下のものである。韓国のセクシズムに対して、それが固定化され維持されるメカニズムを徴兵制という社会的観点を切り口とした実証的調査研究によってその一端を明らかにした。その結果、韓国の男性が国防の任を負う強く立派な成人(男)と見なされ扱われ、それは軍務に就くことで仕上げられると考えられ、その裏返しとして女性を守られるべき存在とみなす温情的セクシズムがあること、そしてそれは兵役に行かない女への敵対的セクシズムを凌ぐほどであることを示した。調査時期、調査大学、調査人数などの統制が困難という現実的問題もあって、結果は必ずしも一貫していないことが弱点としてある。しかし、これまで思弁研究に限られていた現状を一步踏み出し、実証の俎上へのせ、軍務態度、性役割観、セクシズム、軍務経験の相互の関係を明らかにした点で学術的意義がある。

第2点目は、セクシズムは一般に言われるような女性に対する敵対視だけでなく、むしろ男性が女性に示す優しさや好意の中に潜んでいることを示した点である。この両価的セクシズムは、本研究が初めて提唱したものではないが、まだ実証的研究報告が極めて限られている中、またこの温情的セクシズムが軍務に対する肯定的な態度と関連していること、すなわち強い男への賞賛とつながっていることを調査によって明らかにした点において意義がある。

意義の3点目は、軍務経験が男性性にだけでなく、女性性の強化にも作用していることを明らかにした点である。軍務経験が男性の男性性と強め、女性性を弱めることは、これまで多くの研究者が指摘し常識的なレベルとしても受け入れられてきた内容であったが、結果は、軍務経験によって女性性を強化する可能性を示唆した。

最後に、「真の男」形成には、軍務の環境要因と訓練要因が作用していることを示唆している。こ

の調査は除隊後1年未満の者だけを対象とした極めて貴重なデータを収集したものである。データ収集困難性の裏面として他の要因を十分に考慮・統制できていない欠点があり、暫定的な示唆に留まるが、初めての試みとしての価値はある。

目次

第 I 部 序論

第1章 はじめに -----	8
第2章 理論的背景	
第1節 セクシズム(性差別主義, Sexism) -----	15
1-1 セクシズムとは	
1-2 セクシズムの両面性—両価的性差別主義(Ambivalent Sexism)	
1-3 セクシズムを導く社会・文化的要因	
第2節 徴兵制とセクシズム -----	25
2-1 韓国社会と徴兵制	
2-2 軍隊主義と兵役に対する両義的評価	

第 II 部 実証研究

第3章 韓国人のセクシズムと特徴	
第1節 研究1 韓国人の性役割固定観念とセクシズム及び軍務に対する態度 -----	33
第2節 研究2 日韓男子大学生の性役割観と家父長意識及びセクシズムに関する比較	43
第4章 韓国大学生の性役割観と軍務に対する態度及びセクシズム	
第1節 研究3 韓国大学生の性役割観と軍務に対する態度及びセクシズム :性別による比較 -----	49
第2節 研究4 韓国男子大学生の性役割観と軍務に対する態度及びセクシズム :軍隊経験の有無による比較 -----	58
第3節 研究5 韓国男子大学生の性役割観と軍務に対する態度及びセクシズム :軍部隊の特性と勤務形態による比較 -----	63
第5章 男子大学生の性役割観と軍務に対する態度及びセクシズムに関する縦断的検討 :入隊前と除隊後の変化に注目して -----	71

第Ⅲ部 総括

第6章 研究の全体的考察及び今後の課題	79
参考文献	88
付録	100

第 I 部 序論

第1章 はじめに

第2章 理論的背景

第1章 はじめに

家庭にだけとどまっていた女性たちが社会に進出し、自分たちの権利を主張するようになったのはわずか何十年前かのことに過ぎない。イギリスの経済専門誌エコノミスト(2010年1月号)は、“ここ50年間、世界で一番革命的变化は、女性の権利が強化されたことである”と、新しい歴史を刻み始めた女性の生き方について言及している。たしかに1960年代にアメリカで起きた第2波女性運動は、女性の家庭生活に大きな転換をもたらした。仕事や高等教育に関してだけではなく政治の分野をも含めて、以前なら関与できなかった領域にまで参加する機会を拡大させ、指導者の位置に立つことすらも可能にさせた(Klein, 1984)。

他方、女性であることを理由とする差別や人権侵害は、今も多くの国で続いている。国連未来報告書(2009)¹によれば、全世界で、学校教育を受けられる期間が4年間に満たない人々の2/3が女性であり、約6億300万の女性が家庭内暴力(Domestic Violence)が法的に禁じられていない所に暮らしている。アフリカの大部分の地域とアジアの一部地域、そして中東地域で行われている「割礼」(女性生殖器損傷)は、毎年300万人の女性にトラウマを負わせ、すでに1億3000万～1億4000万人の女性がその被害を受けた。

「男女雇用平等法」は117カ国で存在するが、多くの場合、同一職種・職務に就いていても、女性が受け取る賃金は男性より平均でおよそ30%少ない。すなわち、同じように働いても女性の賃金は男性の賃金の約70%にしかない。しかも、15億2000万人の女性勤労者の50.5%が法的・経済的に保護されていない劣悪な環境で働いている。また伝統的な家族システムが続いているため、多くの女性は経済的活動と家事の両方を担わなければならない。

貧困層の約70%は女性であり、その大半は農村に暮らしている。女性たちは全世界の農産物の半分以上の生産に従事するが、多くの国で女性は土地を相続し所有する権利を持たない。女性が男性より多く貧困の問題に直面するのは、先進国でも途上国でも同様の事実である。

女性の権利の革命的な変化の裏面には、このような不平等で理不尽な現実が広範に存在している。性別格差と女性の社会進出は、今日の大きな論点となっているにもかかわらず、それが低いレベルなら無視されることが多いとされている(Isaac & Siddhartha, 2010)。

¹ 「国連未来報告書」は、UN (United Nation) の傘下機関である‘グローバル未来研究’で行われている Millennium Project の一つである。10年後を予測しUNに報告する。

一般に豊かな国は、男女とも教育と保健サービスをうける機会に恵まれ、両性の平等を実現していると思われる。しかし、経済発展と男女格差の是正は並行して進展するとは限らない。世界経済フォーラム(World Economic Forum)が発表した「世界男女格差報告」(Gender Gap Index, 2013)によると、136ヶ国の中、韓国は111位に位置し、105位の日本とともに経済発展と男女格差是正が一致しない代表的な国の一つである(Table 1参照)。

韓国社会における女性の現状

表面的には韓国社会での女性に対する認識は徐々に両性平等の方向に向かっているように見える。2013年、韓国の歴史上はじめて女性が大統領に就任した。また、男女差別禁止法(1999年)や戸主権制度の廃止(2008年)など差別的な制度が改革され、男児が多かった出生性比の平衡化などからは意識の面でも改善がみられるという報告(2012年, 統計庁調査, <http://kosis.kr>)は確かに韓国社会の変化を実感させる。

しかし、韓国の労働市場では性別による職種の分離が構造化されている。問題は雇用の質で、報酬が高く権威ある職種は主に男性が担当し、女性は労働市場の下層に集中させられているということである。専門職・行政職では女性の割合が低く、多くの女性は低賃金の製造業・販売業・サービス業などの職場に集中させられている。その上、同じ産業の中でも女性は相対的に報酬が低い非正規職の分野に分布している。

2010年、韓国の正規雇用における男女の賃金格差は Organization for Economic Cooperation and Development(以下, OECD)加盟国中、39%と1位であった。数値が大きいほど男性に比べて賃金の少ない女性が多いことを意味しているが、韓国はOECD平均である15.8%の約2.5倍であり、2位の日本(28%)より10ポイント以上高い数値となる。しかも2000年の結果(40%)とほとんど変わっていない。韓国の男女賃金差が大きい理由としては、他の先進国に比べ育児を理由に退職する女性が多く、高賃金を受け取っている女性が男性より少ないためと分析された。

教育面では男女同等であるが(2012年の大学進学率: 男 68.6%, 女 74.3%, 統計庁調査)、女性の経済活動参加率(49.9%)は男性(73.3%)より低く、大卒女性の給与は高卒男性より低い。女性の地位向上を阻む「ガラスの天井」は依然として堅固で、国家上級公務員の内女性の割合は

Table 1. 男女格差ランキング

順位(2012年)	国
1(1)	アイスランド
2(2)	フィンランド
3(3)	ノルウェー
5(8)	フィリピン
9(10)	スイス
69(69)	中国
101(105)	インド
105(101)	日本
111(108)	韓国
136(135)	イエメン

7.3%、韓国の10大企業の役員における女性の割合はわずか1.5%に過ぎない。このような地位や待遇での男女差は「女性差別国家」としての韓国社会の実態を如実に反映している。

OECDの報告書(2010年)では、女性が労働市場で困難に直面する1つの要因として、ワークライフバランスの難しさを挙げている。韓国女性は出産後に退職することが多く、その後、職場復帰を希望しても現実には非常に厳しいのである。

なぜ韓国の女性は学歴では男性と遜色がなくなったのに、給与や地位で差別されているのか。そこには女性は副次的労働者で、家庭の仕事が本業であるという家父長的な家の存在を前提とした考え方がある。男性は生計を担う家長であるから高い給与も当然とし、簡単には解雇されない一方、女性は父や夫に守られているので低い給与でも生活でき、たとえ解雇しても大丈夫という差別的な基準が労働市場で通用しているのである。

実際に韓国の日常生活をのぞいて見ると、男性中心的な家父長文化の中で職に就いた場合でも家庭でも女性は多くの役割を要求され、その負担で悩んでいる者が少なくない。女性の任務は何より、子どもをよく育て家庭を守ることであり、また、女性はその面においても最も能力を発揮すると信じられているからである。

このような性別役割や性別特性に対する偏見と固定化は、男性の意識と態度だけの問題ではなく、女性の中にも存在しており、女性が社会に出て行く上で大きな障害になっている。

性差別文化の背景

これまで韓国社会の性差別文化の背景として儒教思想と軍事文化の影響が取り上げられてきた(Koo Ensuk, 2009; Moon Seungsuk, 2007; Kwon Hyeokbeom, 2003; Kim Myeonghye, 2003; Kim Hyunyoung, 2002; Oh Miyoung, 2002; Lee Migyeong, 2003; Kwon Insuk, 2000, 2001)。これらの研究では、歴史的及び政治的理由で軍事主義と徴兵制が韓国社会で特別な機能を果たすことになり、儒教的な家父長理念と結びついて男性中心的秩序が強化され、性別分業の基本的な枠組みが作られたとする。そしてこのような構造と枠組みが今に至るまで維持されているという点も指摘している。

朝鮮(朝鮮王朝; 1392~1910)は統治イデオロギーとして受け入れた儒教思想を基盤として、男女の役割を徹底的に区分し、公的領域で女性の権力と影響力を制限して男性支配の社会構造を作った。その後日本による植民地支配(1910~1945)からの解放と韓国戦争(朝鮮戦争; 1950.6~1953.7)、南北分断を経て、国家の安全保障が最優先の政策目標となり、国防を担当している男性がそうでない女性より優れた地位を占める男性中心的秩序が維持された。軍部出身者の武力による政治権力掌握と軍事文化的統治行為は、既存の家父長的権威主義をより一層強化さ

せた(Cho Seongsuk, 1997)。戦後30年間続いた軍事政権を経て、軍事文化的要素は韓国の政治と経済・社会文化全般にわたって広範囲な影響を及ぼした(Kwon Insuk, 2004)。

一方民主化運動(1960年4.19革命～1987年6月抗争)以後、最も排斥しなければならない文化コードであった軍事政権が残した軍隊文化の痕跡を洗い落とそうとする努力も続いた。1980年代初めに学校の兵営化という批判を受けた教練実技大会が、1993年には高校軍事訓練が、そして1997年には教練科目が廃止された。それにもかかわらず軍事文化は男性の支配と権力を反映しつつ再生産され続けている。軍隊のメカニズムは最も効率の高い生産原理として位置づけられ、軍隊を終えた男性が優遇されている(Moon Seungsuk, 2007)。

韓国社会で男子徴兵制が維持され軍事文化が存在する理由は、「韓国と北朝鮮の対峙」という極めて現実的な状況の中で国の安全保障のための軍事的な土台が必要だと考えられているからである。保守政権が続き、軍事文化に対する批判そのものが鈍ったという点と、引き続いている経済的危機が‘強い人間になって競争の中で生き残れ’という軍人精神の存在感を強めたという指摘も見逃すことはできない。Kwon Hyeokbeom(2010)は、“韓国の社会は危機を強調すれば皆が一致団結するという集団意識が働く。細心だったり柔弱だったり気難しかったりという男性像には敵対的な社会である今の韓国にあっては、このような男性に対しては「克己」という名目で鍛え直そうという力が働く”と指摘している。

韓国は、涙もろく感情的で柔弱な「女らしい男」が認められる社会ではない。「女らしい男」も軍隊にいかなければならないためである。「軍隊に行く男」として育てられ、「男だからこそ得られこと」「男だからこそ諦めること」について教えられ、子どもたちもその精神を習得し内在化していく。成人になるための最終段階として軍隊に入った若者は、そこで強圧的な社会化を経験しながら、社会が期待するような男らしさの本質、即ち、肉体と精神の強さを養うようになる。「兵役」という通過儀礼の場を通して初めて「真の男」になるのである。

国防の義務である兵役に対しては、神聖で名誉ある愛国心の発露と考える肯定的な受け止め方と、もっぱら拒否感を惹起し「義務」という一語によって耐えるしかないものという否定的な受け止め方の二者が存在する(Yoon Jaeson, 2004)。その中で多くの韓国男性は「できるなら行きたくない」軍隊ではあるが、同時に「しかたのないもの」と考えて兵役に就く。韓国の男性にとって、軍務は両義的で二律背反の内容を合わせもっているものなのである。しかし兵役義務を無事果たした人は、初めて一人前の大人として扱われ、社会の主流に属することができたという意識を暗黙のうちに抱くようになる。

一方、男性が共通して経験した軍隊とそこで内面化した軍事文化に対し批判的な研究は、軍の服務(以下、軍務)経験が、韓国の男性をさらに保守的にし、家父長的な考え方を強める上で影響

を与え(Lee Myeongsil, 2004 ; Cho Yongbeom, 2005 ; Lee Youngja, 2005), 上命下服を内面化し(Cho Seongsuk, 1998; Yu Hyejeong, 2006), 男と女を切り離して区別し, 性別分業の正当性を維持させるとする(Cho Seongsuk, 1998 ; Kwon Ohbun, 2000 ; Kim Myunghye, 2003 ; Moon Seungsuk, 2007 ; Kwon Insuk, 2005, 2009)。また, 女性の依存性を当然として受け入れ, 男性が女性を守るという基本観念を形成するとも指摘している(Kim Myeonghye, 2003; Kwon Insuk, Na Yungyeong, Moon Hyuna, 2010)。

これらの研究は軍事主義と軍事文化が韓国社会に及ぼす否定的な影響に注目し, ジェンダーが軍事主義の作動に燃料として働く側面を取り上げて論述しているが, 理念的なイデオロギーやフェミニズムの立場からの演繹的な推論が多く, 実証的な解明が少ないという限界がある。

しかし軍事文化に対する肯定的な評価の基底にセクシズムがあることは避けて通れない問題である。韓国人の意識の中には“男は軍隊に行ってこそ真の男になる”という考え方が一般的で普遍的なイデオロギーとして存在しており, 「軍隊に行く」という条件と「真の男になる」という結果が不可分の関係で捉えられている。つまり韓国社会では, 軍務経験の有無を判断基準とする差別化が存在し, 軍務を通して期待されるようになる「真の男」が持つ意味を極めて大きなものにしていくことであり, 相対的に女性の地位を低く見なすことにつながっている。

それゆえ, 韓国社会のセクシズムの実態を把握し, 解決の手がかりを求めるためには, まず, 男性中心のイデオロギーを具現している徴兵制と軍隊文化を理解しなければならない。さらに軍隊と男性がどのように出会うのか, 軍隊のどのような環境・内容がどのような「男らしさ」を作るのか, 彼らの経験を詳細に分析する必要がある。

その上に立って, 軍務に対する否定的な評価と肯定的な評価の両面をともに, 近年セクシズム研究が着眼している両価的性差別主義(Ambivalent Sexism)理論を通して検討することで, 韓国社会のセクシズムの問題を新しい視点で解析することができると考えている。

本研究の目的

軍務経験と軍務に対する態度が大学生の性役割観(ジェンダー・パーソナリティ)と女性に対する態度に与える影響を検討し, 韓国社会のセクシズムの問題点について論じたい。これまでのジェンダー研究は, 柏木(2008)が指摘したように, 不平等に扱われてきた女性の生き方を女性の視点から光を当て, 女性をいかに救うかを論じることに焦点を置いていた。しかし, ジェンダー問題の根本的な解決方法を探すためには, 男性中心の社会制度とシステムを理解しなければならない。

本研究では, 「軍隊」というプリズムを通して, 韓国社会のセクシズム問題を考える。その舞台として大学に注目した。大学は「共同体」という集団アイデンティティが付与される空間であるが, 軍隊

文化を経験した集団とそうではない集団とが共存し、除隊した復学生を通して軍隊文化が再生産されている場でもあるからである(Nah Yoonkyeung, 2005a; Park Jinhwan, 2006)。男子学生は在学中に軍隊に行き除隊後大学に復学し、軍務に就いたことのない学生と交流する。彼らによって軍隊での生活方式が大学に持ち込まれ、軍務経験のない学生にはそれを「大人のやり方」として学ぶ機会となる。大学内で軍隊経験が意味を持ち、軍務経験者が権力を持つようになるのは、軍隊経験が軍務経験者と未経験者の間に位階(上下関係)と差異を作り出すメカニズムとして働くからである(Kwon Ohbun, 2000; Nah Yoonkyeung, 2005b; Nah Yoonkyeung, 2007)。大学という空間はこのように軍務経験の意味が増幅されて現われる場であり、軍務経験とセクシズムの関わりがを考えるにあたって一般の職場に比べ変化を検出しやすいと考える。

本論文の構成

本論文は6章から構成される。まず第1章つまり、この章では研究の背景と目的について述べた。

第2章では、セクシズムとは何かを述べ、セクシズムの発達に関する要因と仕組みを明らかにする。セクシズムが韓国社会において続いている(なくなるしない、強力である)歴史的背景と文化的風土について説明する。

第3章～第5章までは実証研究について紹介する。研究の概要は Figure 1に提示した。女性への敵対的セクシズムと温情的セクシズムとからなるセクシズムを従属変数として設定し、性役割固定観念・性役割観・家父長意識そして男子大学生の軍務経験と軍務に対する態度それぞれの変数がセクシズムに及ぼす影響について検討する。

第3章の研究1と研究2では、韓国人のセクシズムと特徴を分析し、そこに軍隊文化とイデオロギーが絡んでいることを明らかにする。研究1では、20代～50代の一般成人男女を対象に男性の軍務経験と「男は軍隊に行つてこそ真の男となる」という軍務に対する態度がセクシズムとどのように関連しており、軍務を通して期待されるようになる「男らしさ」が性役割観の形成にどのように反映されているかを、性別と年代によって分析する。

研究2では、日本と韓国の男子大学生の性役割観と性役割態度及びセクシズムの様相を検討する。日本も韓国と同じようにセクシズムが強い国であるが、両国の状況を比較することによって実態として軍事文化が性別役割分業の考え

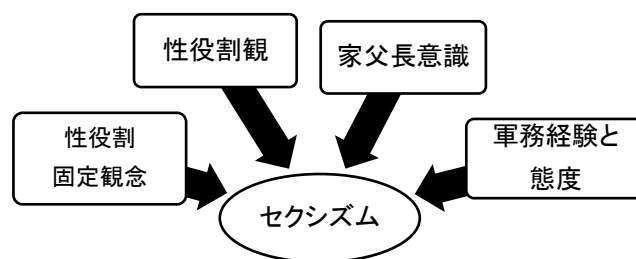


Figure 1. 研究の概要

とセクシズムを助長もしくは醸成する大きな源になっているという韓国社会特有の問題点を明らかにしたい。

第Ⅱ部第4章の研究3から研究5まで大学生を中心に、実証的検討加える。研究3では、軍隊文化を経験していない大学生を男女に分け、この2つのグループの性役割観と家父長意識、軍務に対する態度、そしてセクシズムの違いを分析し、また、性役割観と家父長意識、軍務に対する態度がセクシズムに及ぼす影響について検討する。

研究4では、男子大学生を軍務経験者と未経験者に分け、グループ別の相違点とセクシズムの要因について検討する。

研究5では、軍務経験者のセクシズムに、前方勤務であったのか後方勤務であったのかという環境要因並びに戦闘員であったのか非戦闘員であったのかという訓練要因が作用しているかどうかを検討する。このことを通じて軍隊の何が「真の男」を作り出すのかを明らかにする。

第5章では、軍務経験による「個人の変化」に注目する。入隊前と除隊後の縦断的調査を通して、軍務を経験することで、男子大学生の性役割観と軍務に対する態度及びセクシズムがどのように変化するかを検討する。さらに性役割観と軍務に対する態度がセクシズムに及ぼす影響がどのように変わるのかについても検討し、軍務経験とセクシズムの問題について論じる。

最後の第Ⅲ部第6章では、これまでの6つの研究のまとめを行い、これらの研究を通して韓国人男性の軍務経験と軍務に対する肯定的な態度が、「男らしさ」を強化し「真の男」を作り出して、性別分業を正当化し維持させるセクシズムを生んでいること、そして徴兵制度がそのメカニズムとして働いていることについて考察し、なぜ韓国社会にセクシズムが存在し続け、セクシズムがなくならないのかについて徴兵制との関連性を中心に論じる。

第2章 理論的背景

第1節 セクシズム(Sexism, 性差別主義)

1-1 セクシズムとは

誰もが人間と生まれたからには、その持てる力のすべてを出し尽くして生ききたいと願っている。しかし現実には、社会的・経済的・文化的な束縛の中で、こうした「本源的」な願望は果たせないままに生き続けている。人間の「本源的」な願望の充足へと向かうためには、今までに歴史や文化のなかで規範化されてきたそれぞれの「社会的役割」やその「役割意識」について問い返して見なければならぬ。そのことが最も端的に提起されているのが「セクシズム」ではないだろうか。

セクシズム(Sexism, 性差別主義)とは、一般的に“女性と男性の間の不平等な地位を支える態度や信念や行動”(Swim & Campbell, 2000)と定義される。セクシズムは権力の問題である。握っている権力を維持しようとするところに、セクシズムは発生する。ほとんどすべての文化を通して、権力を手にしているのは男性集団であり、女性はあきらかに不利な立場におかれた集団である(Harris, 1991; Sidanius, Pratto & Bobo, 1996; Pratto, Stallworth, Sidanius & Siers, 1997; Eagly, 1983; Eagly & Wood, 1999)。

また、Spencer, Jeffrey & Leis(2005)はセクシズムについて、“性別を理由にしてある人がなんらかのネガティブな特性を持っているとする偏見でもある”と定義している。そしてこうしたネガティブな特性からして、ある人はある種の職業につく資格がないとか、仕事を始めとして何らかの社会的状況の中でその人は十分うまくやることができないと想定してしまうことであると。

セクシズムによって、私たちは同じ振るまいでも、男性によって行われるときと、女性によって行われるときとでは違う見方をする。好意的・肯定的に受け止めたり、反感や嫌悪感を持って否定的な視線を送ったりする。

このような偏見の標準モデルとして想定されてきた女性への態度は、圧倒的に敵対的で競争的なものであるはずだというものだったが、近年の研究では女性への態度はむしろ全体的に好意的であることが明らかにされている(Ford, 2000 ; Greenwood & Isbell, 2002; Spencer, Jeffrey & Leis, 2005)。そして偏見を敵意の次元だけで見るのは、肯定的な形態に変形・歪曲されて現れる偏見とセクシズムを幅広く理解する上で障害になると主張している(Jackman, 1994; Gutek & O'Connor, 1995; Fiske, Xu, Cuddy, & Glick, 1999)。初期のセクシズム研究が、伝統的な性役割やステレオタイプ性の性役割観への支持という顕わな形のセクシズムを理解することに焦点を当てたとすれば

(Spencer & Helmreich, 1972; Dreyer et al., 1981; Burt, 1980; Beere et al., 1984; Swim, Aiken, Hall & Hunter, 1995), 近年のセクシズム研究は、巧妙で目に見えにくい複雑な形を取るジェンダー・バイアスに着目してきた (Modern Sexism, Swim et al., 1995; Neo-Sexism, Tougas, Brown, Beaton & Joly, 1995; Campbell, Schellenberg, & Senn, 1997; McHugh, M. C. & Frieze, I. H., 1997; Ambivalent Sexism, Glick & Fiske, 1996)。

1-2 セクシズムの両面性: 両価的性差別主義 (Ambivalent Sexism)

Glick & Fiske (2001a, 2001b) は、男女関係に固有の相互依存性が、敵対的と温情的という2つの形式のセクシズムを生じさせると論じている。つまり男性は、経済や政治に関連する構造的権力を掌握しているが、女性は、関係性や生殖に関連する権力を多く持っている (Secord, 1983)。男性にとって、少なくとも子どもを生んでもらうためには女性が必要であるし、対人的な親密性を満足させるためには母や妻に依存しなければならない (Berscheid, Snyder & Omoto, 1989)。

Glick & Fiske (1996, 1997) はこのような考えに基づいて、女性に対する偏見と差別には両価的な感情 (antipathy・favorable) が共存すると仮定し、敵対的セクシズム (HS: Hostile Sexism) と温情的セクシズム (BS: Benevolent Sexism) の二つの次元からセクシズムを説明した。

敵対的セクシズムは、女性に対する対立的で支配的な偏見と結びついた伝統的な嫌悪が具体化されたものである。つまり、伝統的な性役割に従わず男性権力を脅かす女性への否定的な感情・態度である (例、「男が世の中をリードして行くのはあたりまえだ」「男と女は違うのに女はただ平等だけを主張する」「女は困った時、または頼みがある時だけ男を求める」、韓国版 Ambivalent Sexism Inventory; An Sangsu, Back Yeongju, Kim Insuk & Kim Hyesuk, 2007)。敵対的性差別主義者は、男性は女性より権力を持つ資格と能力があるが、家庭に向いている能力を持つ女性がフェミニズムや性的な魅力を利用して男性の地位と権威を脅かすと考える。

反面、伝統的役割に忠実な女性への肯定的な感情・態度である温情的セクシズムは、実行者にとって女性を、守るべき、保護すべき、愛すべきものとして好意的に特徴づける差別の一形態である (例、「危険が大きい仕事は女より男がすべきだ」「女は男に比べて家庭の世話をよくする細やかさを持っている」「愛する女を持たない男は、自分の人生を幸せだとは思わない」)。このように女性をあがめることは、女性が弱く、伝統的な性役割に最も適しているということを意味している (Glick & Fiske, 2001a)。

温情的セクシズムは、男性とは異なる女性の特徴に注目して女性を美化し理想化するが、このような形で女性をあがめることは、女性を伝統的な性役割に最も適したかよわい存在として男性が作り上げた女性像の枠内に困り込むことを意味している。主観的にはポジティブに女性の立場を尊

重しているつもりであろうが、そこには「伝統的な性役割に従う限りにおいて」という大前提がある。

両価的性差別主義の構成概念

敵対的セクシズムと温情的セクシズムは、男女間において男性が女性に依存している3つの重要な要素を具現化したものである。それは父性主義・性役割の分化・異性愛の3つである。これら3つの要素のそれぞれは、男性支配を維持しようとする信念と両面的価値観によって特徴づけられる(Glick & Fiske, 1996, 1997; Goodwin & Fiske, 2004)。

1) 父性主義 (Paternalism)

父性主義は支配的な形式と保護的な形式の2つの形態をとって現れる。支配的父性主義 (Dominative Paternalism) は男性を女性よりも高い位置に置く階層構造(上下関係)を支えるものである。女性には組織を率いたり複雑な判断を下すなどの能力に欠けると見なすことによって、支配的な父性主義は正当化される。それゆえに、女性は全ての領域において、男性の優れた能力を認めその権威に従うべきだとされる。

他方、保護的父性主義 (Protective Paternalism) は、女性を弱い存在と見なすことによって、女性を守るという義務を男性に負わせる。一見好意的な見方にも見えるが、男性は優秀であるがゆえに家族を養う者となる義務を担うのだという主張が含まれている。つまり男性は女性より権威・権力・身体的な力において勝っているので、弱い存在である女性を支援し守るべきであるというのが保護的父性主義の考え方である。

2) 性役割分化 (Gender Differentiation)

性役割分化は、社会的イデオロギー(例えば、男は仕事、女は家庭)を媒介とすることによって、男性の地位を正当化する。現在に見られる性役割は、ステレオタイプにより説明される。つまり、女性は女性性(communal)の特性を、男性は男性性(agentive)の特性を持っている。競争的性役割分化(Competitive Gender Differentiation)は、女性には男性にある能力がないと見なすことを通して、男性の構造的権力を正当化する。女性は身体的・精神的に男性より劣っているし、男性と女性は特性も違うために、男性の方が高い地位と権力を持つ立場に適していると思なす。それに対し、補完的性役割分化(Complementary Gender Differentiation)は、女性、特に母親や妻や恋人としての女性に対する男性の依存(また、女性の男性に対する依存)と、それに伴うそれらの女性に対するポジティブな見方から生じるものである。女性が家庭内の役割を担うことにより男性は家庭外の役割を担うことができるなどとして女性に伝統的な性役割を付与し、男性と女性の特性は違うが互いに補完できると見なすのである。

3) 異性愛 (Heterosexuality)

他の社会集団とは違って、男性と女性は親密な関係を持つ (Fiske & Stevens, 1993)。異性愛に基づいた女性との接触は、男性にとってポジティブなものとも、ネガティブなものともなり、彼らが女性に対して両面的な態度を持つようになる一因となる。異性愛者の男性は、親密性や幸せを得るために、女性との性的に親密な関係を求める (Berscheid et al., 1989)。親密な異性愛 (Heterosexual Intimacy) は男性と女性がロマンチックな関係で親密に過ごす時、本当の幸せを得ることができると思う。しかし、このような幸せのために下位にある女性に依存することは、いつも上位にある男性にとって、いつもとは違う非典型的な状況を作り出す。それは女性はセックスの門番としてふるまうことにより、男性をコントロールする権力を手にすることができるということである。このような状況は女性に対する敵意を促進し、彼女たちを支配しようとする動機付けになると考えられる。これが敵対的異性愛 (Heterosexual Hostility) の考え方である。

敵対的セクシズムと温情的セクシズムは、集団間の不平等を正当化し維持することに役立つ信念であり、性差別にあっても男性の権力維持を正当化するイデオロギーとして働いている (Glick, Deibold, Bailey-Werner & Zhu, 1997)。

敵対的セクシズムと温情的セクシズムの相互関連性

両価的性差別主義について検討した研究 (Glick & Fiske, 1996, 2000, 2001, 2011; Masser & Abrahams, 1999; An Sangsoo et al., 2005; Kim Hyesuk et al., 2005; Eastwick et al., 2006; Kristine, Debar & Brenda, 2007; Herzog et al., 2008; Chen, Fiske & Lee, 2009; Nah Yoonkyeung & Choi Yoonjin, 2011; Chisango & Javang, 2012) は一貫して、男性の方が女性より敵対的・温情的セクシズムの得点が高く、女性の敵対的・温情的セクシズムが正の相関を示していると論述している。男性の場合、敵対的セクシズムと温情的セクシズムの間での相関がなくなる傾向も見られ (特に敵対的セクシズム・温情的セクシズムの高得点者)、一般的に女性に比べて両者間の相関の度合いが低いとされる。これは男性のセクシズムが、敵対的・温情的な形態のそれぞれが独立して作用しているということを意味する。Glick & Fiske (1996) の説明では、男性は、年齢の上昇とともに女性に対する態度が明確になり相関が低くなるが、女性の場合は、社会や文化で規定される女性のあるべき理想の姿に順応して、敵対的セクシズムまたは温情的セクシズムに全面的に同調したり、それを拒否して全く同調しない傾向があるためである。

男性の敵対的・温情的セクシズムの得点が女性より高いということは、Swim (2000) が指摘したように、権力の中心が男性にあるためであろう。敵対的セクシズムについては、男性が女性よりも得点が高いことは明らかであるが (Beere et al., 1984; Spence et al., 1975; Spence & Hahn, 1997; Swim

et al., 1995, Sakalli-Ugurlu & Beydogan, 2002; Glick et al., 2004), 温情的セクシズムについては、女性も男性と同じように、温情的セクシズムの考え方を受け入れていると言われている(Sakalli-Ugurlu & Glick, 2003; Russell & Trigg, 2004; Chen, Fiske & Lee, 2009; Glick et al., 2002)。敵対的セクシズムにおける得点間の性差は、男性の敵対的セクシズム・温情的セクシズムの得点にポジティブに相関していた。つまり、男性のセクシズムが強いほど、女性の敵対的セクシズムの受け入れは男性への反発によって低下される。

また、温情的セクシズムの得点間の性差は男性の敵対的セクシズム得点と温情的セクシズム得点にネガティブに相関していた。男性のセクシズムが強いほど、女性は温情的セクシズムを受け入れやすいということである。なぜなら、温情的セクシズムは差別として見えにくく、女性にとってもそれは報酬的意味合いが強いためである(Smuts, 1996)。もしくは、温情的セクシズムに内包されている性役割に対する固定観念や偏見を、セクシズムの概念として認識していないからである。

両価的性差別主義はその国の文化状況を通して見ることができ、ジェンダーの不平等な国の不平等さのレベルを推定する場合に調査されるイデオロギーであり、両価的性差別主義を観察することでその国のセクシズムの状況を予測することができる。また両価的性差別主義はシステムティックなものである(Glick et al, 2000, 2001b, 2004; Glick & Fiske, 2011)。

Glick et al.(2000)は、韓国を含む 19 カ国を対象とする国際比較調査を行い、GEM(Gender Empowerment Measure)とASI(Ambivalent sexism Inventory)の関連を調べた。その結果、男性の敵対的セクシズム得点は有意に不平等を予測していた。男性の敵対的セクシズムの平均点が高い国ほど、GEM において、男女平等が達成されていないことがあきらかにされた。温情的セクシズム得点においても男女ともその傾向がみられた。つまり、男性が強くセクシズムを承認している国は女性はそれに従い、同様にそのイデオロギーを認めているということである。

温情的セクシズムはセクシズムではないのか

Swim et al.(2005)は、性役割態度の尺度である「女性に対する態度尺度」(Spence et al., 1972; Spence, Helmreich & Stapp, 1974)と、「両価的性差別主義」(ASI:Glick & Fiske, 1996)と「現代的性差別主義尺度」(Modern Sexism Inventory: Swim et al., 1995)を用いて、調査対象者に各尺度の項目内容が、どの程度性差別的であると考えられるのかについての回答を求めた。その結果男性は、各尺度に含まれる信念・態度・行動をセクシズムだと捉える割合が女性より低かった。また、温情的セクシズムや現代的セクシズムの尺度に含まれる信念・態度・行動を、敵対的セクシズムや女性に対する態度尺度に含まれるものよりも、性差別的ではないと捉えていた。

また、Barreto & Ellemers(2005)も、ASIを用いた調査で、敵対的セクシズムに含まれる信念・態

度・行動と比べて、温情的セクシズムに含まれる信念・態度・行動はセクシズムではないと男女とも考えていること、さらに、敵対的セクシズムに比べて温情的セクシズムに含まれる信念・態度・行動を好ましいものと評価していることを明らかにした。これらの結果は、セクシズムであると考えられる信念・態度・行動をについて、個人によって捉え方が異なっており、現代社会の中で合意が得られていないことを示唆している(Ui, M., & Matsui, Y., 2008)。

Barreto & Ellemers(2005)は、温情的セクシズムは敵対的セクシズムとは違って肯定的な色合いで語られているので、人々は特別な拒否感なく受け入れる。そこに潜在的な危険があると指摘している。女性はあからさまな表現である敵対的なイデオロギーは拒否するが、好意の衣に隠された温情的なイデオロギーは認める傾向がある(Glick et al. 2000, 2004; Dumont, Woods & James, 2012; Connelly & Heesacker, 2012)。Fischer(2006)は特に、女性に対しネガティブな態度を有する男性に囲まれている女性に、温情的セクシズムを受け入れる傾向が強いと報告している。

Viki et al. (2002, 2003)は、男女ともに温情的セクシズムの考えを有する者ほど、男女のデート場面において「父性主義的騎士道(paternalistic chivalry)」の考えを持つことをあきらかにしている。父性主義的騎士道は、男性が女性を保護し世話を焼くことを義務として重んじる考え方を指す。すなわち、温情的セクシズムの考え方を持つ者は、女性に対して礼儀正しく丁寧な対応をする一方、女性の行動を制限しようとする考えを持つことが示されている。

セクシズムを通して維持される権力関係

両価的性差別主義は、少なくとも3つの方法で男性の権力維持に貢献している(Glick & Fiske, 2001b; Goodwin & Fiske, 2004)。

1つ目は、男性が自らの権力を正当化するために、温情的セクシズムを用いるという方法である。男性は、女性は身体的・精神的に劣っているというステレオタイプを信じるほど、男性自身による支配を二者間レベルでも社会的レベルでも正当化することができる(Jost & Banaji, 1994; Jost & Kay, 2005)からである。

2つ目は、女性もまた、男性と良好な関係を維持する手段として温情的セクシズムを取り入れ、自分たちを自らステレオタイプ的に見なすという方法である。女性が、経済的・政治的に男性に依存している社会において、男性と円滑な関係を保つことは女性にとって有利だからである。女性の敵対的・温情的セクシズムの得点を見ると全体的に男性より低い、温情的セクシズムの得点は敵対的セクシズムに比べ男女の差が小さい。これは、女性が温情的イデオロギーを拒否することに対し消極的であることを示唆している(Glick & Fiske, 1996; Glick et al., 2000; Masser & Abrams, 1999)。温情的セクシズムを是認する女性は、性差別主義者の動機が保護であると解釈可能などき

はセクシズム的行動に対しても挑むというよりはむしろ寛容な態度を示す。働いていない女性の温情的セクシズムは、働いている女性より高得点であった(Cikara & Fiske, 2007)。女性がどの程度、経済面での提供者であり保護者としての男性に依存しているのかに応じて男性の権力への抗議あるいは自立した地位への要求は低減する。恋愛の対象である男性の親切的イメージと男性の実態とを暗黙の内に重ね合わせている女性は野心的なキャリア目標よりも男性の経済的サポートの方を期待しているからである(Rudman & Heppen, 2003)。

3つ目は、敵対的性差別主義者が、伝統的な性役割に異論を唱え従わない女性に対し制裁を加えるという方法である。敵対的セクシズムを有している者ほど、性役割に反した行動をしているフェミニストやキャリア・ウーマンのような女性に対してネガティブな評価を行い、温情的セクシズムを有している者ほど、性役割に沿った行動をしている女性(例えば、専業主婦)に対してはポジティブな評価を行うことが明らかになっている(Glick & Fiske, 1997, 2000; Fiske, Cuddy, Glick & Xu, 2002; Kim & Ahn, 2007; Fiske, 2012)。

両価的性差別主義は、男女間の相互依存的関係における役割分化と力の差を強調することで成り立っている。その女性に対する敵対的・温情的なイデオロギーは、社会システムのレベルでは「アメ」と「ムチ」のように機能して因習的な性別間関係や役割を正当化し、男性中心的な社会システムの存続に貢献すると指摘した(Glick & Fiske, 2001a,b)。

敵対的セクシズムが男性の権力と伝統的な性役割を強調し、女性を搾取の対象とすることを正当化するイデオロギーであるなら、温情的セクシズムは、女性を保護し支えることを男性の性役割としながら、それと表裏の関係で男性の支配を正当化するイデオロギーである。これらの2つのセクシズムは、形の上では別のイデオロギーのように見えるが、これらのどちらもが男性支配を正当化し、維持することに役立つ信念である。多くの人は温情的セクシズムに内包されている性役割に対する固定観念や偏見を、セクシズム的な概念として認識していない。しかし、温情的セクシズムは女性の社会的役割を制限し、女性を男性の助けと保護がなければ自立できない存在として認識している点において、根本的にセクシズムの思考・態度である。敵対的・温情的セクシズムは、ともに伝統的な性役割を強調し、女性の弱さを前提として家父長的な男性中心社会を維持する機能を果たしている。

1-3 セクシズムを導く社会・文化的要因

1) 性役割固定観念(ジェンダー・ステレオタイプ, Gender Stereotype)

ジェンダー・ステレオタイプとは、“性別により当てはまると人々に信じられている特性”のことであり(William & Best, 1982)、“女性や男性がどのように行動するのか、また行動すべきかについての

信念”である (Deaux & Snyder, 2012)。

ジェンダー・ステレオタイプには、身体的な外見・態度・興味・心理的な特性・社会的な関係・職業などに関する情報が含まれている (Ashmore, Del Boca & Wahlers, 1986 ; O'Brien & Huston, 1985; Kite et al., 2008)。これらの色々な次元は相互に関連しあって、ある個人が女性であることを単に知ることだけで、その人がいくつかの身体的な特性といくつかの心理的な特性を持っており、特定の活動に従事するということを意味することになるのである (Deaux & Lewis, 1984)。

女性の労働市場への参加が高まっているのにもかかわらず、家事や育児のような家庭内の責任が女性にあるのはステレオタイプにより説明できる。つまり、女性に主婦が多いのは、女性が女性性 (Communion) の特性を持っていると考えられているからであり、男性が家父長の地位に値するのは、男性性 (Agency) の特性があると考えられているからである。女性に帰属される好意的な共同的特性 (例えば、協力的・暖かい・優しい) は家庭的役割に彼女たちに適し、男性に帰属される能力や作動的な特性 (例えば、責任感・決断力・リーダーシップ) は社会にあって高い地位での役割をこなす家庭にあっては家父長の役割を務めるのに適していると考えられている。男性と女性は社会的役割や期待される特性の観点から差異化される (Eagly & Wood, 1999; Williams & Best, 1982; Spence & Buckner, 2000)。

ジェンダー・ステレオタイプは文化を超えてある程度の一貫性が見られる (Williams & Best, 1990; Williams et al., 1998)。男性は作動的であり、独立的であり、攻撃的であるとステレオタイプ化されるが、女性は、共同的で、母性的で、情緒表出的で、他者に対する応答性がよいとステレオタイプ化される。一方、女性には受動的で、従属的で弱いものというステレオタイプもなされる。これらの男性性と女性性についてのアンビバレントな期待が、伝統的性役割と対応しているのである (Eagle & Steffen, 1984)。文化的に規定されているステレオタイプが維持されるのは、このような男女の特性が社会的に望ましいと考えられているからである (Eagle, 1995; Eagle & Wood, 1999; Spencer et al. 2005)。

男性は女性よりジェンダーについて一層ステレオタイプ化された考えを持ち続けやすく、教育レベルが高い人の方が、そうではない人に比べジェンダーについての考えがステレオタイプ化される傾向が低く、男性と結びついている特性は女性と結びついている特性よりも高く評価される傾向がある (Ashmore et al., 1986)。

しかし、ジェンダー・ステレオタイプは他者について理解する1つの次元に過ぎない。人種的・民族的・経済的なステレオタイプも重要な役割を演じており、それらのステレオタイプは、ジェンダーステレオタイプと結合して行動や特性についての複雑な見方を生み出すことも多い。ジェンダーステレオタイプの知識を持っているほどその知識を個人の考えとしても認識する傾向がある (有泉,

2007)。

両価的性差別主義においてジェンダー・ステレオタイプに不一致な女性，すなわち作動的な女性には敵意的偏見を，ジェンダー・ステレオタイプに一致した女性，すなわち共同的女性には好意的偏見を向けることにより，性役割システムは維持されていると主張されており，その主張は実証的にも支持されていることが明らかとなった (Jost & Kay, 2005)。

セクシズムは，性による役割を定めるステレオタイプと密接な関係を持っており，男らしさ・女らしさは生まれつき備わっているもので，女性は男性より能力が低く劣等という否定的なステレオタイプを作り上げることから起こる (Glick, Diebold, Bailey-Werner & Zhu, 1997)。また男女には身体的性差があり，男性の方が女性より生物学的に優れているとして，男性を女性よりも重要な存在として認めようとする。

2) 家父長制 (patriarchy)

家父長制は，男性による女性の支配形態であり，性別による権力関係を指すフェミニズムの中心概念である。一般的には，父系の家族制度において，家長が絶対的な家長権によって家族員を支配・統率する家族形態であり，このような原理に基づく社会の支配形態と定義されているが (デジタル大辞泉, 2013)，女性学では，家族内だけではなく，社会の領域全般に渡って女性の性・出産・労働をコントロールする男性の支配形態という意味で使われる (金井, 1997)。

性別分業体系は家父長制社会を動かす大きな軸であり，(家父長制社会では) 男性は強いほど男らしく，女性は弱いほど女らしいと考える。家父長制社会で女性に与えられる二重のメッセージは，セクシーながらも同時に純潔なことを要求して主婦の役割を忠実に果たすことを求め，そのため労働市場では良い労働力ではないと見なし，また容貌にだけ気を遣う無知な女だと非難しながらもどうせなら魅力的な性的対象であることを望んでいる (Fiske, Cuddy, Glick & Xu, 2002; Fiske, 2010)。このような考え方は，両価的性差別主義の考え方と一致している。

家父長制は，男性優越的な価値観と伝統的な女性像を否認する女性に対しネガティブな感情を惹起させ，セクシズムを助長・維持する最も強力な要因の一つであると考えられる。

3) 軍事主義 (Militarism)

軍事主義とは，軍事力の強化が国民生活の中で最優先の地位を占め，政治・経済・文化・教育などすべての生活領域をこれに従属させようとする思想や社会体制であり (デジタル大辞泉, 2013)，暴力の連鎖を生む構造をつくりだす原因のひとつである (Mann, 1988)。

女性を媒介としない軍事主義は存在しない (Enloe, 1993, 2000; Kwon Ohbun, 2000; Kim Hyunyoung, 2002; Kwon Insuk, 2004)。性別は軍事主義を作動させる社会的仕組みであり，軍事主義は，男性性・女性性のような概念と文化に依存するそれ自体で性別化された (gendered) 社会

現象であると同時に、性別構造の核心を成す制度である(Jung Huijin, 2013)と説明される。

軍事主義が作動するためには、戦わなければならない敵と守る主体と保護の対象がなければならないが、家父長社会の‘保護者＝男性、被保護者＝女性’という典型的な性役割はこの三つの要素のモデルになる。軍隊の存在が説得力を持つためには、男性が軍務につかなければ自分たちの男らしさを検証できないと感じるようにさせなければならず、彼らの経験は女性に対する支配と保護、それに対する女性たちの感謝によって証明されなければならない(Arkin & Dobrofsky, 1978; Enloe, 1988)。

軍隊では服務中にある男性たちの不満を解消するために、女性を性的対象として認識させるようにする(Galtung, 1990; Alonso, 1993)。常に売春宿は軍事基地近くに造られ、女性を売買する不法な行為が黙認されている。男同士の連帯を強化するという名目の下に、女性たちを見下す用語の使用や行為が規制されない(Chang Pilhwa, Cho Hyeong, 1991)。軍服務は女性を性的対象として見下し辛い軍務と訓練をやり遂げるために‘男’というプライドを鼓吹する。紛争時の強姦は、女性たちの恐怖を煽り、屈辱を与える戦術として用いられてきた(Enloe, 1983, 1988; Ross, 1987)。戦争が起きていないときでも、軍事主義の影響の下で、ドメスティックバイオレンスや、軍内部における性暴力被害などが起きている(Kim Seoungkyung, 1997; Kwon Insuk, 2000, 2001)。

軍隊で絶えず注入される男性優越主義と、軍隊に行かない女性に対する被害意識が結びついて、女性を低く見る意識を産んでいる。軍事主義は、男性の家父長的支配力の強化と女性の役割の低い評価あるいは非可視化を通じて性差別的な社会構造を維持させる役割を果たしている。

第2節 徴兵制とセクシズム

2-1 徴兵制と韓国社会

韓国は、世界で唯一の分断国家であり、徴兵制を選択している数少ない国の一つである²。兵役法第3条1項に依ってすべての韓国の成人男性には、例外的理由がない限り、一定期間軍隊に所属し国防の義務を遂行する「兵役」が課せられている。北朝鮮との軍事的対峙という状況は現在も徴兵制が維持されている理由であり、軍隊に対する批判的問題提起を難しくしている(Kwon Insuk, 2009)。この厳しい政治状況は韓国人の意識と文化に大きな影響を及ぼしている。

韓国ではほとんど誰もが、自分の兄弟や息子や友人や恋人を軍隊に送った経験を持つ。これはすべての国民が直接あるいは間接的に戦争準備に動員されていることを意味し、このような動員過程を通じて韓国人としての共通した集団意識が形成されていく(Kim Elri, 2002)。

韓国社会で兵役が持つ影響力は、良心的兵役拒否者や兵役忌避者や兵役免除者など故意に兵役から逃げる男性たちに対する大衆の怒りを通して確認することができる。唯一の徴兵補償制度であった軍加算点制³を違憲とする判決(1999年)に対する男性集団の反応は、社会の不平等な制度を是正しようとする判決に対する共感とはならず、違憲判決を擁護する女性集団への非難につながった(Kim Hyunyoung, 2000)。男性の怒りは、既得権を剥奪した男性内部の特権層に対してではなく、もう一つの社会的弱者である女性に向けられた。兵役の問題は本来安全保障を含めた国の政策全体の中で解決が図られるべき課題であるのに、兵役を過重な負担と感じている男性たちと試験での不公平を解消したい女性たちのジェンダー間の対立として歪曲・矮小化された。Bae Eunkgyeong(2000)はこのことについて、「生まれが良くて気楽な高学歴の女たちが、お金もなくコネもないため軍隊に行かざるを得ない男性たちの生活の糧すらも奪おうとする」という構図で定着し、「憲法裁判所の判決が社会的弱者に対する不平等問題に焦点を合わせているにもかかわらず

² 国防白書(2012)によると、大韓民国国軍は常備軍として総員63万6千人余りの兵力を保有している。一般兵士の服務期間は陸軍と海兵隊21ヶ月、海軍23ヶ月、空軍24ヶ月で平均的に2年に少し満たない期間、現役で服務することになり、現行の徴兵制国家のうち現役兵服務比率が2012年基準で70%に達し、世界で最も高い国である。

³ 軍加算点制度は1961年から始まった。除隊した男性たちに国家および地方公務員、教育公務員、国営企業体や国家支援を受ける法人に対して試験満点の5%を加算する制度だったが、軍隊に行くことはできない障害者や女性に不公平で、除隊した男性たちにさえ不合理な制度という理由で1999年12月廃止された。

ならず、‘軍隊に行かなければならない男’と‘軍隊に行かなくてもよい女’という二分法だけが登場した」と分析した。軍加算点論争は、徴兵制に関連して女性たちが声を上げた唯一のケースである。今でも持続している(違法かつ特権的な力による)兵役非理の問題と軍加算点論争は、兵役制度が韓国社会の不平等問題の中核にあり、女性差別的な制度や文化に及ぼす影響が決して小さくないことを物語っている(Cho Joohyun, 2003; An Sangsu, 2007)。

徴兵制の歴史的・政治的背景

韓国の徴兵制は1949年8月、兵役法が施行されたことに始まった。その後、徴兵制は1950年3月に一旦停止されたが、朝鮮戦争を契機に翌年復活した。国軍の定員は増え続け、1954年には65万人に達した。これは現在の定員である64万を超えた数字である。その後、服務期間や兵役忌避に対する処罰内容が若干変わったものの、ほぼそのままの形で維持されている。

韓国は、大国の間であって歴史の波に翻弄されてきた。植民地経験と日本帝国主義による強制的な戦争参加。米国の日本への攻撃とその圧倒的な軍事力による植民地支配からの解放。その後の強大国による国土の分割。朝鮮戦争。強大国の介入とそれによって得られた休戦等々である。そのため経済的・軍事的にも強力な国家建設への渴望が強かった(Kwon Insuk, 2005; Lee Bokju, 2011)。強い国だけが自国民の運命の決定権を持っているという論理が形成された。このような韓国の特殊な状況は軍事政権の統治を招き、軍事主義と軍事文化が根付く背景となった(Kim Hyunok, 2002; Kim Elri, 2004)。

またこのような韓国の特殊な状況が、軍事的・経済的に強い国を作らなければならないという切迫感につながり、これを実現するために男性は義務兵役と産業経済建設に、女性はその副次的な労働力として動員され、この過程で男性と女性は、生計扶養者と被扶養者(主婦)に分離され近代的性別階級秩序が確立されたとMoon Seungsuk (2007)は分析した。

KwonKim Hyunyoung (2007)と Lee Mikyung (2003)も、分断が軍事主義と軍事文化を生み、性差別的な儒教的家父長制理念と結びついて男性中心的な国民アイデンティティを構成する核心になったと論じている。さらに、家父長制による女性の抑圧は表に簡単に現れるが、徴兵制によって培われた家父長的イデオロギーは国を守る男性の英雄的な姿や犠牲的な働きの陰に隠れており、内的に社会の全般的な意識を支配し、直接的には男性を抑圧するが、それと同時に女性を抑圧する間接的な仕組みとしても作用していると指摘した。

韓国の軍事化は1960年代以後、政治や社会・経済・教育などすべての分野にわたって、また社会構成員の理念からアイデンティティ・役割規定・日常文化に至るまで影響を及ぼした(Kim Dongchun, 1998; Kim Ensil. 1999; Kim Hyunok2002; Kwon Insuk, 2005)。「国家安保」がどんな価

値よりも重要視された時代だったので、軍事化が進められた間に徴兵制は再整備され、軍事独裁に反対した民主化運動が活発だった時期でさえその必要性を誰も疑問に思わなかったほど普遍的な制度として定着した。兵役は「軍事化された近代性」の要であり、国家構成員になるための男女の性別を重視する政治の核心であった。

韓国は個人の次元でも集団の次元でも軍事文化と軍隊文化が日常化されている社会である(力武, 2007)。軍隊文化とは、軍隊という組織が持っている特殊な文化を規定する概念とされるのに対し、軍事文化というのは、民間文化と区別するための概念で、軍隊文化の影響を受け一般社会で見られるようになった否定的文化現象を内包する概念である(Lee Sanghyun, 2001)。また、単純性・画一性・効率性などを特徴とする軍隊文化が社会に広がって生成した文化とも定義される(Hong Duseoung, 1996)。

韓国社会の軍事文化的な性格は、「軍隊」という組織だけではなく、教育現場や職場などで、個人の意識や日常生活にまで浸透している(Byun Hwasun, 1995; Oh Miyoung, 2001; Park Jinhwan, 2004)。韓国社会では、未だに男性組織の基本的な枠組みとして作用している軍事文化を大事にし、そこに意味を与え、その集団主義を通して個々人には犠牲を負わせつつも男性中心社会を認めさせようとするディスコースが働いている(Chang Yongseon, 1991; Park Jinhwan, 2004; Kim Youghwa, 2009)。

2-2 軍隊主義と兵役に対する両義的評価

今までの韓国社会にあっては、男性たちが受け持っている国防義務の社会的な意義が厳格で精細なフィルターを通さず、そのまま受容されてきた(Kwon Insuk, 2009)。

兵役に対しては、神聖で名誉ある愛国心の発露と考える肯定的な受け止め方と、もっぱら拒否感を惹起し「義務」という一語によって耐えるしかないものという否定的な受け止め方の二者が存在する(Yoon Jaeseon, 2004)。

男は必ず軍隊に行かなければならないという圧迫感。これまで韓国社会で露顕した徴集過程と兵務行政での各種不正(兵役非理)。軍務中に体験する非人格的かつ辛い兵営生活(人権問題)とそれによる学業能力低下。就職遅延。除隊後の社会復帰時に感じる進路不安と社会不適応。軍務を終えた者に対してそれにふさわしい保障や礼遇がないこと。これらが合わさった総体的損失に対する否定的情緒が複合したものが下敷きになって拒否感を生じさせる(Bae Eunkgyeong, 2000; Lee Sangdo, 2007)。このような否定的感情は、軍への入隊を前にした多くの若者たちにとって悩みのタネであり、青春を奪われたという被害意識とこれから体験するであろう軍務への恐れを抱かせる。

しかし、兵役義務を無事果たした者は、それによって初めて一人前の大人として扱われ、社会の主流に属する市民権を獲得したという意識を暗黙のうちに抱くようになる。軍務を終えた男性たちを健康な男性の標準と認定したり、配偶者の選択や対人関係でこれらを肯定的に評価しようとする社会的通念が残っていることからそのことは伺える。一般企業でも社員選抜と面接・昇進などの人事決定過程で軍務を終わった男性に有形無形の恩恵を与える慣行が相変わらず行われているが、それは辛い軍隊生活を通じて鍛えられ培われた‘忍耐力’や‘組織適応力’や‘円満な対人関係能力’等に期待するところから始まったのだろう(An Sangsu, 2007)。

軍務に対する一般的で肯定的な評価

様々な否定的な感情を内に抱きつつも多くの韓国人は兵役に肯定的な態度を取っている。軍務が‘損’より‘得’が大きいと思っているからである(An Sangsoo, 2007)。軍務に対する肯定的な評価は、軍隊を体験した男性たちの話を通して社会に定着する(Park Yanggen, 2014; Um Honggil, 2013; Yeo Intaek, 2013; Kong Byeongho, 2013; Park Suwang, Jung Ukjin, Choi Jaemin, 2010; Kim Jeoungpil, 2010)。実際に軍隊に行ってきた人々は異口同音に“実際に社会で生きていく上で必要なことを多く学んだ”と考えている。近年、韓国軍は‘軍隊’(군대)ではなく‘軍大’(군대)と呼ばれる(軍隊と軍大は韓国語では同じ発音)ようになったのはこのことを端的に表している(Yoon Jaeseon, 2004)。

1. 人生を学ぶ, 成長の機会になる。

軍務経験は、“10代の彷徨と社会秩序に対する抵抗を終え、人生を学ぶどころ”として意味を付与される。兵士達は、年齢層も様々で成育の背景や学歴も様々な者達である。そのような人間が同じ共同目標に向かって汗を流し、力を合わせて訓練を受ける。多様な性格と行為がぶつかり合うなかで、人間性に対するより深い理解を持つようになる(Chang Yongseon, 1991)。

“大体の兵士は入隊するまで、親が用意してくれたご飯を食べ、親が行かせる学校に行き、そして親からお金をもらって生活してきた。軍隊に入って初めて自分で決めて自分でやらなきゃならぬ場面に出会う。そこでやっと一人前になったことを自覚し、子供ではなく大人の世界に入った自分を見つける。” -ある大学生の経験談から-

“青春の情熱を燃やし、山野を駆け巡りながら受けた訓練。勤務中に互いに未来の夢を話したあの頃。社会生活は我々のあのときとは違うだろうか。外から見ればドライで競争的で空しく見える社会生活ではあるけれど、ここも軍隊のように温かい感情の人間たちが住むところだと考えれば、今の我々の生活も少しは美しくなるのではないだろうか。” (Yoon Jaeseon, 2004)。

軍務は、個人的側面でも色々な徳性、例えば忍耐力や克己心や物事の成就を強く願う気持ち

や積極的考え方などを育てる。もちろんこのような克己と忍耐に失敗した時、軍務離脱や自殺などの不適応を起こすこともあるが、この生活を成功裏に終えた軍務終了者は目に見えない無形の徳性を育てたとみなされるようになる。

2. 軍隊に行ってこそ「真の男」になる。

韓国のように植民地経験があり戦争の可能性に対する不安が大きい国での平和維持努力は国家主義的論理を強める(Kwon Insuk, 2005)。韓国では徴兵制を通して国家のための男性の自己犠牲が一般的常識として位置づけられ、男性性の基準になる経験として理解されてきた。即ち兵役制は、男性性を獲得する主要な通路となり、(自分の家族を養う)責任ある男になったと認定される確認書のような意味を持つ。

ここでの「真の男」とは、守る者としての役割と責任を意味する。軍隊生活は日々の生活が国家の安全と国民の生命と財産に責任を負っているという意識を直接間接に感じさせ持たせるので、国家とその共同体の中での自分というものを意識するようになる(Chang Yongseon, 1991)。国と家庭を守っているという自覚とプライドは兵士たちを動かす原動力になる。

3. 社会生活に役に立つ有形無形のスキルを学ぶ。

軍隊生活では、厳しい各種訓練や体力鍛錬・運動競技などを通して身体的に鍛えられるだけでなく、劣悪な環境の中で過酷な作業を行うことで一般の社会生活では得られない忍耐力や自信を身につける。その一方、複雑な人間関係や自由のない組織生活・激しい体罰など、入隊前の生活とは全く違う世界を経験することにもなる(Yoon Jaeseon, 2004)。

階級的秩序が厳格で、厳しい訓練が課される軍務の経験によって身につけることを期待される「リーダーシップ」「組織生活」「忍耐力」「献身性」などが、就職の時に社会側が兵役済みの男性を好む理由になる(Son Sutaе, 1998; Park Hongju, 2000)。

軍内務班生活、集団生活を通じて社会化を経験する。軍隊は徹底した組織生活である。このような生活を通じて軍服務者は責任の重要性を痛感するようになる。また組織の階級秩序と命令・指示の重要性などを理解し体得することにより、立派な組織人・社会構成員として成長すると考えられている。

軍隊の男性文化に対する批判的研究

ジェンダーの視点で書かれた研究の多くは、軍務に対する否定的な側面、つまり軍務が韓国男性と女性に及ぼす弊害に焦点を合わせて論究している。主に女性の研究者たちによって行われた軍事主義に対する批判的な研究は、軍務経験が、韓国の男性をさらに保守的にし、上命下服を内面化して家父長的な考え方を強め、男と女を切り離してそれぞれの特性を固定化し性別分業の正

当性を維持させたとする。また、女性の依存性を当然として受け入れ男性が女性を守るという基本観念を形成させたとも指摘している。

具体的に次のような研究がなされている。

1. ゲモノー的「男らしさ」を獲得するメカニズムとして、強い男に生まれる所(例, Cho Seongsuk, 1997; Oh Miyoung, 2002, 2003; Kwon Ohbun, 2000)。
2. 男性と女性を区別させる独特な経験をさせる(例, Kim Myunghye, 2003; Lee Youngja, 2005)。
3. 男の権威文化, 家父長文化が最終的に作り上げられる(例, Lee Minju, 1995; Kim Hyunok, 2002; Cho Yongbeom, 2005; Lee Myeongsil, 2004)。
4. 権力志向的社会的形成; 儒教文化の核心といえる上位下達の従属的人間関係の影響, 大学内で権力を持つようになる(例, Kwon Ohbun, 2000; Kwom Hyeokbeom, 2003)。
5. 女性に対するゆがんだ視点を持たせる, 女性の卑下(例, Cho Seongsuk, 1997; Yu Hyejeong, 2006)。
6. 根本的に女性の依存性を当然として受け入れ, 男性が女性を守るという基本観念を形成し支持する制度でありながら, 性別役割を固定化する(例, Kim Myunghye, 2003; Kwon Insuk, 2009)。
7. 暴力を内面化する軍隊内の性暴力(例, Yoon Minjae, 2008; Kim Shinhyun, 2010)。
8. 女性に対する差別意識を持たせる(例, Lee Youngja, 2005; Koo Eunsuk, 2009, Kwon Insuk et al. 2010)。

これらの研究は軍務経験が男性と女性の生き方に影響を与え、ジェンダーが軍事主義の作動に燃料となる側面を強調する観点から軍事文化を批判するものである。その背景には男だけから成る軍隊という環境や軍隊の特殊性や軍隊文化の属性などがある。つまり軍隊は、男性にだけ求める社会的役割を規定し、男性がそれを果たすことによって成立する特殊な環境である。そしてそれは階級的位階秩序が強く、男らしさが強調される空間であり、その空間を満たす軍隊文化は序列主義・集団主義・男性中心主義・権威主義・形式主義などの特徴を持っている(Yoon Minjae, 2011)。

軍務経験と両価的性差別主義との関係

セクシズムは対象に対するネガティブな感情・態度に基づいている。軍隊とセクシズムとの関連性を論じる時も、常に軍務に対するネガティブな態度の裏返しとしての女性への敵対的セクシズムを取りあげた研究がなされてきた。しかし、このような傾向だけでは、表面的にはポジティブで好意的な態度で現れる温情的セクシズムを十分に説明できない。前述したとおり、韓国では軍務に対する両義的な見方が存在する。軍務を経験した男性は軍務を経験できない(行かない)女性や軍

務未経験男性や兵役忌避者に対して優越意識や被害意識や敵対意識を持っている。これは両価的性差別主義理論で説明できるだろう。つまり、強要された犠牲としての兵役義務を遂行した男性たちの被害意識または優越意識は、男女平等を主張する女性に対し敵対的な感情を抱かせるが、軍事訓練を通じて注入された強い男性性は、女性を保護しなければならないか弱い存在として認識する温情的な感情を持たせるようになると予想されるからである。

第Ⅱ部 実証研究

第3章 韓国人のセクシズムと特徴

第1節 研究1 韓国人の性役割固定観念とセクシズム及び軍務に対する態度

第2節 研究2 日韓男子大学生の性役割観と家父長意識及びセクシズムに関する比較

第4章 韓国大学生の性役割観と軍務に対する態度及びセクシズム

第1節 研究3 韓国大学生の性役割観と軍務に対する態度及びセクシズム
:性別による比較

第2節 研究4 韓国男子大学生の性役割観と軍務に対する態度及びセクシズム
:軍隊経験の有無による比較

第3節 研究5 韓国男子大学生の性役割観と軍務に対する態度及びセクシズム
:部隊の特性と主特技による比較

第5章 男子大学生の性役割観と軍務に対する態度及びセクシズムに関する縦断的検討—入隊前と除隊後の変化に注目して—

第3章 韓国人のセクシズムと特徴

研究1 韓国人の性役割固定観念とセクシズム及び 軍務に対する態度

目的

既存の多くの研究はセクシズムの問題を扱う時、制度の改革とともに意識の変化の必要性を主張してきた。韓国では、90年代に女性運動が始まって以来、男女差別禁止法(1999年)や戸主権制度の廃止(2008年)など差別的な制度が改革され、高学歴の女性の社会進出が増加し各界で目覚ましい躍進を遂げている。

しかし、そのことによって韓国社会で女性の生き方が実質的に改善されたとはいえない。大韓民国の憲法は男女平等を明記しているが、実際の社会生活では男の役割と女の役割は明確に線が引かれており、男性を社会にあって活動する公的な存在とする一方で、女性は私的な存在として家を維持・管理する役割を担わされている。社会に進出した女性たちもこの性別役割の有形無形の壁に直面する。結婚・妊娠・出産・育児・介護など人生の様々な場面で家庭への回帰を求める周囲の声を聞き、また無言の圧力を感じるようになる。セクシズムの問題は、法的・制度的には改善されつつあるが人々の意識の面では未だ残された大きな問題であるといえる。

韓国は、北朝鮮と軍事的に対峙しており徴兵制を維持していかなければならないという状況下にある。この厳しい政治状況は韓国人の意識と文化に大きな影響を及ぼしている。両性平等を主張する女性と、兵役問題を持ち出して「差別されているのは男の方だ」と唱える男性との葛藤が社会問題になっているが、この事例にも見られるように徴兵制度と性役割意識は切り離せない関係にある。徴兵制度のもと軍務を経験する中で形成された価値観や社会意識を軍事文化と呼ぶとすれば(Lee Donghoon, 1995), その軍事文化と性役割観の固定化との関連はセクシズム問題を考える上で避けて通れない課題である。

本研究の目的は、韓国人の性役割固定観念とセクシズムの背景にある軍事文化の影響が具体的にどのような形で役割固定観念とセクシズムに影を落としているのかを明らかにすることである。

このため本研究では、韓国男性の軍務経験と「男は軍隊に行ってこそ真の男になる」という軍務に対する態度(評価や認識)がセクシズムとどのように関連しているのか、軍務を通して形作られると期待される「男らしさ」が性役割固定観念にどのように反映しているのかを検討する。

その方法として性役割固定観念と軍務に対する態度そして女性へのセクシズムが「性別」や「世

代」や「軍務経験の有無」によってどう違ってくるのか、各集団間での差異と関連性・影響力を分析する。

方法

調査時期 2010年8月から2011年2月。

対象者 韓国京畿地方のB市と忠南地方のN市に居住する20代から50代の一般成人男女を対象にした。対象者の選定は、地域福祉センターやコミュニティーセンターでの行事を活用し、宗教団体(教会)の集まりでも協力を求めた。調査の趣旨を説明し、参加に同意を得た方に限り質問紙を配り、調査が終わった後、その場で回収した。参加者は総数615人である。性別、年代及び軍務経験の有無に関する情報は(Table 1)で提示した。

Table 1. 調査対象者

	全体	20代	30代	40代	50代	軍務無	軍務有
男	296(48%)	74(25%)	81(27%)	73(25%)	67(23%)	56(19%)	239(81%)
女	320(52%)	81(25%)	71(22%)	86(27%)	82(26%)		
全体	615(100%)	155(25%)	152(25%)	159(26%)	149(24%)	全体	296(100%)

※軍務経験無 男性(20代 = 20人, 30代 = 15人, 40代 = 12人, 50代 = 9人)

調査内容

性役割固定観念 「男らしさ」と「女らしさ」に関する特性を把握するために用いたのは、伊藤(1978)の M-H-F scale である。M-H-F 尺度は、Masculinity (男性性), Femininity (女性性) および Humanity (人間性) が、社会・自己・女性・男性にとってどれほど重要であると考えているか、個人の性役割に関する価値観を測定するものである。

そのM-H-F尺度の30項目の中から、韓国で使われている性役割観尺度(Jung Jinkyong, 1990)と内容が重なる20項目を選んで、“男らしい男と女らしい女とはどんな人だと思うのか”それぞれ3つずつ選ばせた: 1. 責任感が強い 2. 他人に対する配慮がある 3. 誠実だ 4. 献身的だ 5. 身体的に健康だ 6. リーダーシップがある 7. 従順だ 8. 正直だ 9. 意志が強い 10. 容貌が良い 11. 我慢強い 12. 義理堅い 13. 温かい 14. 心が広い 15. 頼りがいがある 16. 愛嬌がある 17. 人生の目標がある 18. 決断力がある 19. やさしい 20. 自立心がある。

M-H-F尺度では、「男らしさ」と「女らしさ」に対し、社会・自己・女性・男性の立場でそれぞれ答え

らなっているが、本研究では、社会や自分の価値観を調べることを目的としていないこと、また多数の対象者に限られた時間で回答してもらうことを考慮し、簡便な回答方法を用いることにした。

セクシズム セクシズムを測定するため、An Sangsu, Back Yeongju, Kim Insuk, Kim Hyesuk & Kim Jinsil(2007)が開発した韓国のセクシズム尺度である韓国型多面性別意識検査(M-KSI)を使った。この尺度は敵対的性差別意識(例、「女は感情的だから重大な事を任せるのが難しい」「女は困った時、または頼みがある時だけ男を求める」「男が世の中をリードして行くのはあたりまえだ」など)と温情的性差別意識(例、「危険が大きい仕事は女より男がするべきだ」「女は男に比べて家庭の世話をよくする細やかさを持っている」「男は女なしでは完全とは言えない」など)それぞれ12質問項目で構成されている。各項目に対して、「全くそうは思わない」「あまりそうは思わない」「まあそう思う」「非常にそう思う」までの4段階評定を求めた。得点は合計され、点数が高いほどセクシズムが強いと解釈される。

軍務に対する態度 軍務に対する態度は、先行研究(沈・遠藤, 2011)で使われた項目の中、韓国社会で通用している軍務に対する態度2項目「男は軍隊に行つてこそ一人前になる」「軍隊に行つてこそ真の男になる」、それに「軍隊での厳しい訓練は社会経験に役に立つ」の1項目を追加して、合計3項目を用いた。先行研究では、責任感や忍耐力・生活力・自信感などについて調査したが(例、軍務経験を通して男としての責任感が生じる)、本研究ではこれらの項目を「社会経験に役に立つ資質」というカテゴリーにまとめた。リッカート法による5段階評定で回答するように求めた。得点が高いほど、男性の軍務経験に対しポジティブな態度を持っていると評価した。

結果

1. 男らしさと女らしさに対する性差

まず、「男らしい男」に関する特性について人々がどのように考えているかを把握するために尋ねた項目では、「責任感」と「他人に対する配慮」「人生の目標」がすべての年代の男女が共通して選択された。その他に、「決断力」(28.5%)と「義理堅い」(18.6%)は男性回答者が、「誠実さ」(29.4%)と「頼りがいのある」(17.8%)は女性回答者が選択した「男らしさ」だった(Figure 1)。

「女らしさ」においては、「他人に対する配慮」と「温かさ」「広い心」「愛嬌」がすべての年代の男女から共通して選ばれた。さらに、男性は「美しい容貌」(29.5%)と、「献身」(27.8%)「従順さ」(25.1%)を、女性は「人生の目標」(20.3%)を女らしさの重要な特性として考えていた(Figure 2)。女性自身は生きがいを求め、広く社会で活動することを女らしい特性と考えているのである。「男らしさ」と「女らしさ」に共通して要求される「他人に対する配慮」を除くと、基本的に男性には「人生の

目標が明確で、誠実で信頼できる、責任感が強い’リーダーとしての資質が、女性には‘温かくて、広い心を持ち、従順で愛嬌がある’という、リーダーの情緒的助力者としての資質がそれぞれの性に特徴的なものとして選択された。

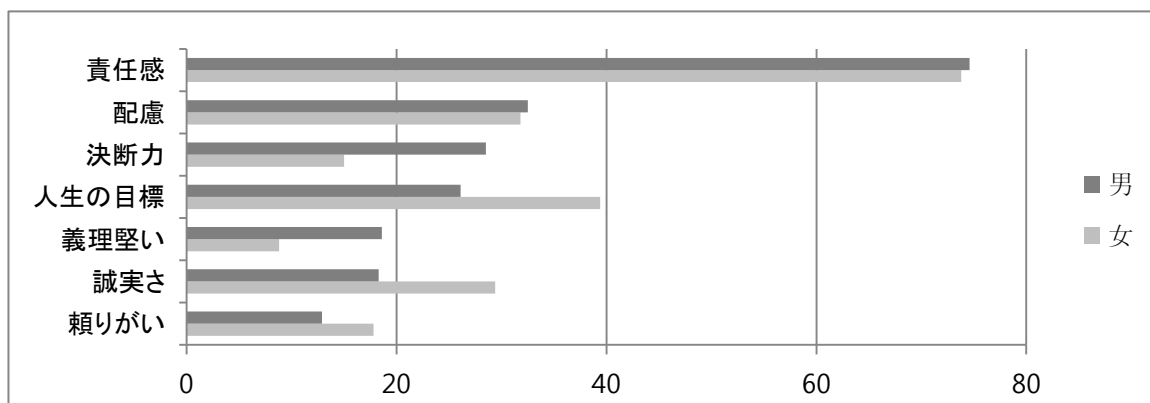


Figure 1. 「男らしさ」に関する特性

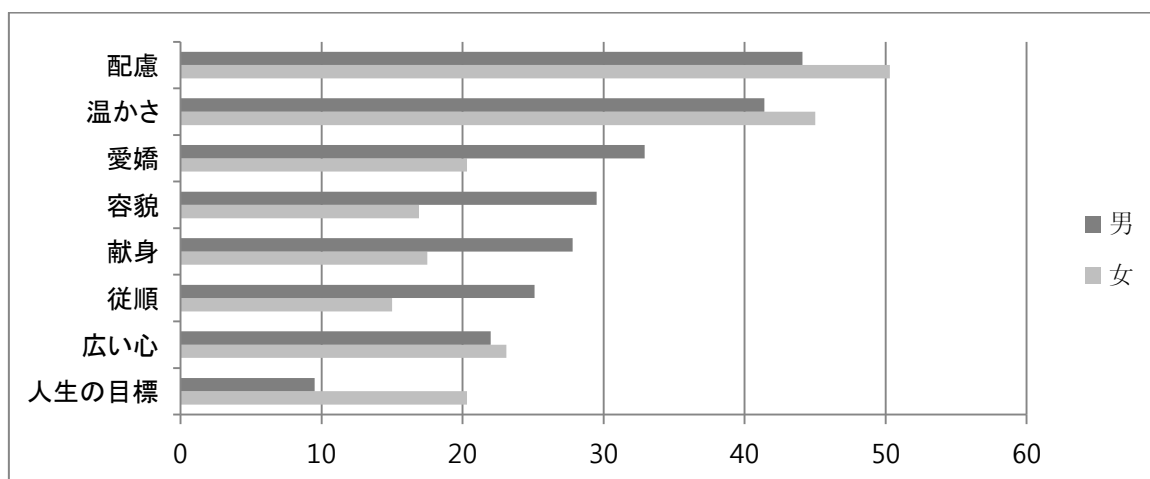


Figure 2. 「女らしさ」に関する特性

2. 性別及び年代におけるセクシズムと軍務に対する態度の集団間差

性別・年代別によるセクシズムと軍務態度の差を明らかにするために、性別と年代別、2要因分散分析した。まず、敵対的性差別意識(以下、敵対的セクシズム)の結果、性別と年代別の単純主効果が無意味であった($F(1,607) = 169.73, p < .001$; $F(3,607) = 6.72, p < .001$)。男性の敵対的セクシズムの得点が女性のそれより高かった。年齢が低くなるにつれ減少する傾向が見られた。年代

別比較では、20代の敵対的セクシズムの得点が他の年代群(30, 40, 50代)より低いことが明らかになった。敵対的セクシズムに対する性別・年代別の平均値と標準偏差は Table 2 に示した。

温情的性差別意識(以下、温情的セクシズム)では性別の単純主効果だけが有意であった($F(1,607) = 65.12, p < .001$)。敵対的セクシズムの結果と同じように、男性の方が女性より高い温情的セクシズムを持っていた。しかし、年代別においては集団間での有意差が見られず、すべての年代群に共通して温情的セクシズムが強いことがわかる。Table 3 に温情的セクシズムに対する性別・年代別分析の結果を示した。

「男は軍隊に行ってこそ一人前になる」「軍隊に行ってこそ真の男になる」「軍隊での厳しい訓練は社会経験に役に立つ」の3項目で構成されている軍務に対する態度の分析の結果では、性別・年代別主効果と相互作用は見られなかった。軍務に対する態度に性別・年代別の違いがなく、平均得点を見ると、調査に参加したすべての集団が、男性の軍務経験に対し肯定的な態度を持っていることが見て取られる。軍務態度に対する集団別の差は Table 4 に提示した。

軍務経験による差では、敵対的セクシズムと温情的セクシズムそして軍務に対する態度に、軍務経験の有無による違いはなかった。

Table 2. 敵対的セクシズムに対する性別・年代別の平均値と標準偏差

性別	年代	全体	20代	30代	40代	50代	主効果		相互作用
							性別	年代別	性×年代
男	M	27.72	26.89	28.01	27.74	28.25	169.73***	6.72***	1.97
	SD	5.02	5.57	5.15	4.22	4.50			
女	M	22.83	21.01	22.18	23.78	24.17			
	SD	4.52	4.75	4.33	4.09	4.22			

*** $p < .001$

Table 3. 温情的セクシズムに対する性別・年代別の平均値と標準偏差

性別	年代	全体	20代	30代	40代	50代	主効果		相互作用
							性別	年代別	性×年代
男	M	35.19	35.97	34.33	35.27	35.25	65.12***	2.67	1.42
	SD	4.51	4.89	3.94	5.14	3.87			
女	M	32.25	31.80	31.32	32.51	33.22			
	SD	4.70	4.91	4.90	5.07	3.70			

* $p < .05$, *** $p < .001$

Table 4. 軍務態度に対する性別・年代別の平均値と標準偏差

性別	年齢	全体	20代	30代	40代	50代	主効果		相互作用
							性別	年代別	性×年代
男	M	10.67	10.86	10.17	10.78	10.94	.08	2.52	.86
	SD	2.62	2.84	2.48	2.44	2.66			
女	M	10.64	10.42	10.42	10.49	11.21			
	SD	2.29	2.45	2.09	2.33	2.20			

3. 性別及び年代別におけるセクシズムと軍務に対する態度の相互関係

次に、性別や年代別及び軍務経験の有無による変数間の関係を検討するため、相関分析を行った。まず、敵対的セクシズムと温情的セクシズムの分析の結果、男性集団では、30代から50代までの3つの年代群ではほとんどゼロに近い相関であった (Table 6)。これらとは異なるのが、 $r = .25$ の正の相関を示した20代男性であった。軍務経験の有無ごとの相関では、軍隊を経験した群 ($n = 239$) が敵対的セクシズムと温情的セクシズムに有意な相関がなかったのに対し ($r = .03, n.s.$)、軍隊の経験がない集団 ($n = 56$) では、弱いながら有意な相関があった ($r = .25, p < .05$)。一方、女性の方では、50代を除く、すべての年代群で、変数間相関が有意であった。

敵対的セクシズムと軍務に対する態度の相関では、ほとんどの集団で有意ではなかったが、50代の男性と軍隊を経験しなかった男性では敵対的セクシズムと軍務態度に有意な正の相関があった ($r = .24, p < .05$; $r = .33, p < .01$)。つまり、すべての女性群と20代から40代の男性群では、敵対意識と軍務態度との間に相関がないが、50代の男性と軍隊を経験しなかった男性の場合、女性に対する敵対的な意識が強いほど、軍務に対する態度が肯定的だった。Table 7に結果を示した。

同じように、敵対的セクシズムがコントロールされた温情的セクシズムと軍務態度の相関では、20代の男性を除外したすべての集団に、温情的セクシズムと軍務態度に有意な相関が見られた。特に、男性集団では、年齢が高くなるほど、相関も高くなった。軍務経験の有無による相関の違いはなかった。

4. 性別と年代、軍務経験の有無及び軍務に対する態度がセクシズムに与える影響

最後に、性別と年代、軍務経験の有無及び軍務に対する態度がセクシズムに与える影響を検討するため、重多回帰分析を行った。性別と軍務経験の有無はダミー変数にした。結果はTable 9に示した。分析の結果、敵対的セクシズムでは、性別 ($\beta = .50, p < .001$) と年代 ($\beta = .17, p < .001$) が、温情的セクシズムでは、性別 ($\beta = .32, p < .001$) と軍務態度 ($\beta = .32, p < .001$) が有意な影響を与

え、これらの変数は敵対的セクシズムと温情的セクシズムをそれぞれ24%と20%と説明している。性別は敵対的・温情的セクシズムに影響力ある変数であり、年代は敵対的セクシズムに、軍務に対する態度は温情的セクシズムに影響を与える重要な変数であることが確認された。

Table 6. 敵対的セクシズムと温情的セクシズムとの相関

	全体	20代	30代	40代	50代	軍経験無	軍経験有
男	.08	.25*	.03	-.04	.08		
女	.39***	.45***	.44***	.44***	.14		
男						.25*	.03

* $p < .05$, *** $p < .001$

Table 7. 敵対的セクシズムと軍務に対する態度との偏相関(温情的セクシズムコントロール)

	全体	20代	30代	40代	50代	軍経験無	軍経験有
男	.07	.02	.17	-.13	.24*		
女	-.03	-.10	-.03	.04	-.08		
男						.33*	-.01

* $p < .05$, ** $p < .01$

Table 8. 温情的セクシズムと軍務に対する態度との偏相関(敵対的セクシズムコントロール)

	全体	20代	30代	40代	50代	軍経験無	軍経験有
男	.39***	.18	.30**	.50***	.63***		
女	.28***	.32**	.20*	.23*	.33**		
男						.23*	.42***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table 9. 性別, 年代別, 軍務経験の有無, 軍務態度がセクシズムに及ぼす影響

従属変数	独立変数	B	SE B	β	t	R^2	Adjusted R^2
敵対的セクシズム	性別	5.37	.68	.50***	7.89	.24***	.24
	年代別	.75	.17	.16***	4.41		
	軍経験有無	-.53	.70	-.05	-.75		
	軍務態度	.15	.08	.07	1.92		
温情的セクシズム	性別	3.09	.63	.32***	4.89	.20***	.19
	年代別	.13	.16	.03	.81		
	軍経験有無	-.20	.65	-.02	-.31		
	軍務態度	.63	.07	.32***	8.82		

*** $p < .001$

考察

本研究では、20代～50代の一般成人男女を対象に男性の軍務経験と軍務に対する態度が女性へのセクシズムとどのように関連しており、軍務を通して期待されるようになる「男らしさ」が性役割固定観念の形成にどのように反映されているかを、性別と年代別によって分析した。

まず、「責任感」と「他人に対する配慮」「人生の目標」はすべての年代の男女が共通して考える「男らしさ」として選択された。「女らしさ」においては、「他人に対する配慮」と「温かさ」「広い心」「愛嬌」がすべての年代の男女が共通して考える「女らしさ」だったが、これと共に男性は「美しい容姿」「献身」「従順さ」のような項目を、女性は「人生の目標」を「女らしさ」の重要な基準の一つとして考えている。

「人生の目標」には「子供をりっぱに育て上げること」とか「夫とともに幸せな家庭をつくる」などのような性役割観の枠内での目標も含まれているかもしれないが、むしろ家庭の枠を越え、家族の目標とは違う自分自身の「人生」の目標、自分を生かす多様な目標を想定していると考えられるべきであろう。つまり、女性は生きがいを求め、広く社会で活動することを希望しているということである。

男らしさと女らしさに共通して要求される「他人に対する配慮」を除いて、基本的に男性には「人生の目標が明確で、誠実で信頼できる、責任感が強い」リーダーとしての資質が、女性には「温かくて、広い心を持ち、従順で愛嬌がある」という、リーダーの情緒的助力者としての資質が要求された。

「女らしさ」に対する男女の見解の差、そして男女の「らしさ」に対する相反した基準からは、性役割に対する伝統的な固定観念とセクシズムが依然として維持されていることを示していると同時に、性役割観に対する女性内部での葛藤とそこから一歩踏み出そうとする変化の兆しを伺うことができる。

セクシズムでは男性の敵対的セクシズムと温情的セクシズムが女性のそれより高く、20代男女の敵対的セクシズムが他の年代に比べて低かったが、温情的セクシズムには年代に伴う差がないことがわかった。これは女性に対する敵対的セクシズムが世代が若くなるにつれすなわち時代の変化に伴い次第に減少している傾向を示している。これに対して、温情的セクシズムはすべての年代で同じ水準を維持しており、広い世代の人達が温情的セクシズムに内包されている性役割に対する固定観念や偏見を、性差別的な概念として認識していないということを示す結果だといえる。

軍務に対する態度には、性別・年代別による違いが見られなく、おしなべて軍務は男性の成長にとって有効なものと考えられていた。

敵対的セクシズムと温情的セクシズムの相関は、女性集団では2つの変数の間に有意な相関が

存在したのに反して、男性の20代で弱い正の相関が見られたのを除けば、他の年代では2つの変数に関係がないことが明らかになった。これは男性たちのセクシズムが、敵対的・温情的な形態でそれぞれ独立的に作用しているということを意味する。Glick et al.(1996)は、男性の場合、年齢の上昇とともに女性に対する態度が明確になり相関が低くなるのだと仮定したが、20代の男性だけで有意な正の相関を見せたことは、これらの主張のとおり、女性に接する経験が他の年代に比べて少ないためではないかと推測できる。

また、Glick et al.(2000)は19ヶ国の国際比較研究を通じて、敵対的セクシズムが高い国ほど男性の敵対的セクシズムと温情的セクシズムの相関が低い傾向を見せ、女性における両意識の相関は男性のそれより有意に高いという結果を得た。この研究で韓国の男性は $r = .16$ 、韓国の女性は $r = .32$ の相関だと報告されている。これに対してGlick et al.(2000)は、男性が動機的志向により女性に対する態度が敵対的になったり温情的な側に分化するようになる反面、女性の場合は社会や文化で規定される女性のあるべき理想の姿に順応して、敵対的・温情的セクシズムに全面的に同調したり、それを拒否して全く同調しない可能性があるためだと説明している。ここにシステム正当化理論(System Justification Theory: Jost, Blount et al., 2003; Kay et al., 2008)を適用し考えてみるならば、男性のセクシズムが高いほど女性たちは男性の体制を受け入れる可能性が高くなることになる。社会的弱者である女性は温情的セクシズムを正当化する社会的強者である男性たちの論理を受け入れるためだと見ることができる。システム正当化理論では、人間は基本的に現行社会システムを維持して肯定しようとする動機を有していて、現行社会システムで不利益を受ける弱者であるほど不利益に対する苦痛を合理化して自身の心理的安寧のために支配体制を認めようとする主張する(Jost, Blount et al., 2003)。セクシズムに対する本研究の結果は、男性が女性より敵対的セクシズムと温情的セクシズムの尺度の得点が全て高く、男性の敵対的セクシズムと温情的セクシズムの相関が女性より低いという先行研究と軌を一にしている。

一方、軍務経験の有無にともなう2つの変数の相関結果には2つの集団間に差が表れた。2つの集団のセクシズム得点には差がなかったのに、軍隊を経験した男性の敵対的・温情的セクシズムが分化したこととは違って、軍隊を経験しなかった男性では2つの意識が分化せず、弱いながら女性と同じ正の相関という結果につながった。このような結果は軍隊を経験していない男性の中に20代が多数含まれているためでもあり、システム正当化理論に注意深く照らしてみるならば、彼らもまた、軍務を遂行した大多数の男性に比べて女性と同じ弱者の集団であるためでもありと考えられる。ただし軍隊を経験していない集団の標本数が軍隊を経験した群に比べて相対的に少数であるため、追加的な検討が必要である。

敵対的セクシズムと軍務に対する態度において、軍務経験の有無による相関の違いが見出され

た。女性と軍隊を経験した群では、軍務態度と温情的セクシズムの間にのみ有意な相関が見られたが、軍隊を経験していない男性では、敵対的セクシズムと温情的セクシズムが全て軍務態度と有意の正の関係を見せた。これは軍隊を経験していない男性たちが女性に対して敵対的であると同時に温情的な意識を持っており、敵対的セクシズムもまた、軍務態度と正の関係に結びつくのではないだろうかと推測できる。

注目しなければならないもう一つの結果は、性別や年代、軍務経験の有無と関係なく現れた軍務に対する態度と温情的セクシズムとの有意の相関である。これは男性が軍務経験を通じて分別がつき、「真の男」として生まれ変わるという期待が高く、軍務が男性たちの社会生活に有益な経験だと強く感じるほど女性に対する温情的セクシズムも強くなるということである。さらに言うならば、韓国人のセクシズムが軍務に対する態度と関連していることを証明する結果といえることができる。軍務に対する態度が温情的セクシズムに影響を及ぼしているという回帰分析結果も又、これを後押しする。本調査の参加者は大部分、男性の軍務経験を肯定的に評価した。

温情的セクシズムは兵役イデオロギーの属性と非常に密接な関係にあり、男性たちの軍務に対して肯定的な態度を持つ人は温情的セクシズムを差別の概念で認識せず、むしろ、より肯定的に受け入れるようになる。人生の目標が明確な、誠実で信頼に値する責任感が強い“本物の男”という期待の中には男女の役割と地位の差を支持するという意味が含まれ、温情的セクシズムはこのような態度を肯定的に評価するようにする。

セクシズムに影響を及ぼす要因にはさまざまなものがあるが、軍務経験と軍務に対する認識は韓国人の性役割に対する固定観念を維持させ、更にはセクシズムに影響を及ぼす重要な変数であることが示唆される。

研究2 日韓男子大学生の性役割観と性役割態度 及びセクシズムに関する比較

目的

日本と韓国は「女性差別国家」として世界でも最低のレベルに属している⁴。両国は漢字・儒教文化圏に含まれる国として多くの共通項をもち、女性たちの置かれてきた状況やジェンダーの構造にもかなり似た側面がある。

日本の内閣府が2012年に実施した男女共同参画社会に関する世論調査の結果では、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだ」という考え方について、賛成は51.6%、反対は45.1%であった。この調査が始まった1992年から2009年の調査までは一貫して賛成は減り、反対が増える傾向が続いていたが、09年の調査以降その傾向が反転したという。

韓国社会にあっても女性の権利や地位に対する認識は徐々に両性平等の方向に向かっているように見えるが、女性に対する伝統的な考え方はまだ大きく変化したとまではいえない。両国とも社会状況として表向きは「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだ」には賛成しないが、自分の配偶者には家にいて家事をしてほしいと考える男性は未だに少なくない。そして夫婦共に仕事を持っている家庭であっても家事・育児にかかわる時間は圧倒的に女性が多いというのが現状である(永瀬, 2012)。

本研究では日本と韓国の男子大学生の性役割観と性役割に対する態度及びセクシズムの様相を検討する。今回の比較研究では韓国の大学生に重点を置いて考察する。両国の状況を分析することによって、実態として軍事文化が性別役割分業の考えとセクシズムを助長もしくは醸成する大きな源になっているという韓国社会特有の問題点を明らかにしたい。

方法

対象者及び調査期間 2013年10月～12月にかけて、関西圏のK大学に在籍する日本の男子大学生82人(平均年齢19.93歳, 標準偏差1.23)と、韓国ソウル市のS大学に在籍している男子大学生83人(平均年齢19.29歳, 標準偏差0.66)を対象に調査を行った。質問紙は担当教員の許可を得て、講義が終わった後に教室で実施した。今回の調査では、軍隊を経験したことによる影響を排除す

⁴ 世界経済フォーラム(World Economic Forum)が2013年、136ヶ国を対象に発表した男女平等指数によれば、日本は105位、韓国は111位を記録している。また、韓国と日本はOECD会員国中、男女間の給与格差がワースト1、2位である。

るため、韓国大学生は軍務未経験者のみを対象とした。

調査内容

性役割観 性役割パーソナルティを測定する尺度は、日本で使われている BSRI (Bem Sex Role Inventory ; Bem, 1974) の日本語版 (東, 1991) と Kim Hyerae (2006) が作成した韓国型性役割観尺度を使った。それぞれの尺度から、2

つの尺度のどちらにも登場する 40 個の項目を選んで、参加者に (1) 「全く当てはまらない」～(7) 「非常に当てはまる」までの 7 段階で評定するように求めた。性役割観については各項目の得点を合計して、点数が高いほど性役割観が高くなるようにした。

性役割態度 性役割態度を測定する尺度は、儘田・中山 (2006) の性役割態度の項目の中、8項目、坂本 (2011) の性役割規範尺度の5項目を使った。尺度は「男は外で働き、女は家庭を守る」という内容が中心である。(1) 「全くそう思わない」～(5) 「非常にそう思う」までの5段階で評定するように求めた。性役割態度については各項目の得点を合計して、点数が高いほど、保守的な性役割態度を持つと解釈することができる。

セクシズム セクシズム尺度は、An Sa ngsu et al. (2007) が開発した韓国型多面性別意識検査 (K-MSI) を用いた。各項目に対して、(1) 「まったくそう思わない」～(4) 「とてもそう思う」までの4段階評定を求めた。得点は合計され、点数が高いほどセクシズム (敵対的・温情的セクシズム) が強いと解釈される。

Table 1 性役割観の因子分析結果

項目	男性性	女性性
gr9 自己主張的な	.77	-.24
gr31 積極的な	.74	.11
gr17 リーダーとしての能力を備えている	.72	.19
gr33 リーダーとして行動する	.70	.09
gr29 はっきりした態度が取れる	.68	-.10
gr5 独立心がある	.66	-.06
gr13 自分の意思を押し通す力がある	.64	.01
gr21 意思決定が速やかにできる	.60	-.15
gr39 野心的な	.58	.05
gr11 個性が強い	.53	.02
gr1 自分の判断や能力を信じている	.52	-.06
gr27 男性的な	.51	-.01
gr25 支配的な	.49	-.13
gr4 明るい	.49	.29
gr3 自分の信念を曲げない	.44	-.05
gr19 危険を犯すことをいとわない	.40	.07
gr37 負けず嫌い	.38	.06
gr26 やさしい	-.01	.76
gr22 話し方がやさしくて穏やかな	-.28	.70
gr24 心が暖かい	.04	.70
gr38 温和な	-.14	.69
gr18 あわれみ深い	.13	.56
gr8 情愛細やかな	.22	.55
gr16 人の気持ちを汲んで理解する	.22	.51
gr32 愛嬌がある	.07	.51
gr2 従順な	-.33	.47
gr28 子供のように純真な	.22	.41
gr12 しとやかな	-.22	.36
因子相関	.28	

結果及び考察

1. 項目の選定

性役割観 項目を選定するために、性役割パーソナリティ40項目に対して、2因子モデルを仮定し最尤法・Promax 回転による因子分析を行った。性役割観の因子分析結果はTable 1 に示した。3回の回転の中、因子負荷量が3.5に満たない11項目を除去し、最終的に男性性17項目、女性性11項目を分析に用いた。

男性性とは、一人の人間として目指すべきあり方に関するもので、自己主張をすることなどに関わる特性である。女性性とは、他者との関係の持ち方に関するもので、他者との協調や親密さなどに関わる特性である。尺度に対する内的一致度は、男性性 $\alpha = .90$, 女性性 $\alpha = .83$ の水準を見せた。

Table 2 性役割態度の因子分析結果(Promax 回転後の因子パターン)

性役割態度項目	I	II
	仕事	家庭
a5 女は男に比べて、仕事における責任感が弱い場合が多い	.83	-.20
a4 政治家や経営者といった権限の大きな仕事は、どちらがと言えば男のほうが向いている	.76	.07
a6 共働きの夫婦は、妻が専業主婦の夫婦に比べて夫婦仲が悪くなりやすいと思う	.56	-.20
a1 男性社員が女性の上司を望まないのは仕方がない	.52	.03
a2 仕事中心の女は、失うものが多すぎる	.49	-.07
a12 家族の生計は夫の責任だ	-.15	.89
a11 夫の収入が十分であれば、あえて妻が仕事する必要はない	-.15	.66
a13 男は外で働き、女は家庭を守る方がよい	.30	.57
a7 経済力がない男性は、男として魅力がない	-.21	.54
a10 女の子は女らしく、男の子は男らしくする育てる方がよい	.28	.42
a8 子供が小さいうちは、母親は育児にのみ専念しなければならない	.33	.39
a9 子どもは母親が育てるべきだ	.34	.39
因子間相関	.69	

性役割態度 性役割態度13項目に対して最尤法・Promax 回転による因子分析を行った。固有値の減衰状況から2因子を採用し、再度最尤法・Promax 回転による因子分析を行った。その結果、因子負荷量が3.5に満たない1項目(結婚している女が仕事を持つ場合は、常勤よりパートが望ましい)を除去し、最終的12項目を分析に用いた。回転後の因子分析結果はTable2に示す。尺度に対

する内的-一致度は、仕事関連保守 $\alpha = .73$ 、家庭関連保守 $\alpha = .82$ の水準を見せた。

第1因子は、仕事に関する保守的な性役割態度の項目で構成されていることから、「仕事関連保守態度」と命名した。第2因子は、家庭に関する保守的な性役割態度の項目で構成されていることから、「家庭関連保守態度」と命名した。

セクシズム セクシズム尺度については、研究全体の一貫性のため因子分析をせず、24項目をそのまま用いたが、今回の場合、敵対的セクシズムの項目の中、「女は国防の義務など責任を果たさないで自分たちの権利だけを主張する」の1項目だけは、両国の事情に当てはまらないため除外した。尺度に対する内的-一致度は、敵対的セクシズム $\alpha = .85$ 、温情的セクシズム $\alpha = .80$ で十分高く、信頼度も確認された。

2. 性役割観、性役割態度およびセクシズムにおける日韓の比較

国別の違いを検討するために、性役割観、性役割態度及びセクシズム得点について t 検定を行った。結果は Table 3 に示した。

まず、性役割観の男性性では、韓国の平均値は 79.60、標準偏差は 15.35 であった。他方の日本の平均値は 69.93、標準偏差は 12.97 となり、韓国との有意な違いが認められた ($t = 4.37$, $df = 163$, $p < .001$, $d = .68$)。女性性においては、韓国の平均値が 51.66、標準偏差 8.33 であった。日本の平均値は 46.57、標準偏差 9.16 となり、韓国の方が日本に比べて有意に高かった ($t = 3.73$, $p < .001$, $d = .58$)。性役割観においては韓国の男子学生が日本の男子学生より高いと言う結果になった。

Table 3. 国別の性役割観、性役割態度およびセクシズムの差

	韓国(83)		日本(82)		t	d
	M	SD	M	SD		
男性性	79.60	15.35	69.93	12.97	4.37***	0.68
女性性	51.66	8.33	46.57	9.16	3.73***	0.58
仕事保守	11.83	3.77	11.95	4.20	-.19	
家庭保守	20.98	6.17	20.73	5.75	.26	
HS	23.37	6.15	22.77	4.40	.73	
BS	32.36	4.96	29.83	6.05	2.94**	0.46

** $p < .01$, *** $p < .001$ HS: 敵対的セクシズム, BS: 温情的セクシズム

徴兵制がある韓国では、特別な理由がない限り、男なら誰でも軍隊に行かねばならない。子どもの頃から男としての役割と責任を意識しながら、「軍隊に行く男」として育てられる傾向が強い。徴兵制が男のありように影響を及ぼしている点を考えると、まだ軍務経験がなくても、徴兵制がない日本の男子大学生より韓国の男子大学生の方がはっきりした性役割観を持ったのではないかと推測できる。

次に性役割に対する態度である。仕事関連保守的な態度においては、韓国の平均値が11.83、標準偏差3.77であった。日本ではそれぞれ11.95、4.20であり、この点について日本と韓国の違いがあるとは言えない($t = -.19, n.s.$)。他方、家庭関連保守的な態度では、韓国の平均値は20.98、標準偏差が6.17であり、日本のそれは20.73、5.75であった。そこにも有意な違いは認められなかった($t = .26, n.s.$)。性役割態度については両国の間で違いがなかった。両国の若者は仕事と家庭について保守的な性役割態度を持っていることがわかる。さらに敵対的セクシズムにおいては、韓国の平均値は22.00、標準偏差は7.64である。他方、日本は16.16、7.71であり、その差は有意ではなかった($t = .26, n.s.$)。それに対して、平均値41.31、標準偏差12.40だった韓国の学生の温情的セクシズムは、平均値29.82、標準偏差7.71の日本の学生より有意な違いを示した($t = 2.94, p < .01, d = .46$)。韓国の男子学生は日本男子学生より、「女を守るべき、保護すべき、愛するべき」という温情的な考えを持っていることが明らかである。

3. 性役割観と性役割態度がセクシズムに与える影響

性役割観と性役割態度が敵対的セクシズムと温情的セクシズムに与える影響を検討するために、国別に重回帰分析を行った。結果をTable 4 に示した。

両国とも仕事関連保守的な性役割態度は女性への敵対的セクシズムに有意な影響を及ぼす変数(標準偏回帰係数 β)であり、家庭関連保守的な性役割態度は温情的セクシズムに影響を及ぼしていることが判明した。しかし、韓国の男子大学生の場合、家庭関連態度(男は外で働き、女は家庭を守る)が温情的セクシズムだけではなく、敵対的セクシズムにも有意な影響を及ぼしている($\beta = .25, p < .01$)。敵対的セクシズムは、伝統的な性役割に従わず、男性権力を脅かすと考えられる女性に対する否定的な感情である。日本の男子学生は伝統的な性役割に従わない女性を否定的に評価しないのに対し、韓国の男子学生の伝統的な性役割態度は、敵対的な意識に影響を与え、伝統的な性役割に従わない女性を非難し、否定的に評価していた。

また、他者との協調や親密さなどに関わる特性である女性性が温情的セクシズムに影響を及ぼしていたという結果も日本の男子大学生と異なる点である。そのような特徴は、同性に対してだけではなく異性に対しても示され、その結果女性を守り慈しむ温情的セクシズムへの影響が見られたの

ではないかと考えられる。

Glick et al. (2000)は高いセクシズムの文化を持つ国では、女性に対する敵対的セクシズムと温情的セクシズムの得点の差が大きく、さらに敵対的・温情的な形態でそれぞれ独立的に作用していると指摘した。彼らの考察と伝統的な性役割態度が敵対的セクシズムにも影響を与えている今回の結果に照らしてみるならば、対象者が青年男子、軍隊未経験者に限っているが、セクシズムにおいて韓国は日本より高い社会ではないかと考えられる。

Table 4. 国別の重回帰分析結果

従属変数	韓国		日本		従属変数	韓国		日本	
	β		β			β		β	
HS					BS				
男性性					男性性				
女性性					女性性				
仕事関連保守					仕事関連保守				
家庭関連保守					家庭関連保守				
R^2					R^2				

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$ HS:敵対的セクシズム, BS:温情的セクシズム

<まとめ>

研究2では、日本と韓国の男子大学生の性役割観と性役割態度及びセクシズムの様相について検討した。主な結果は次の4点にまとめられる。1. 韓国の男子学生は日本の男子学生より、強い性役割観と温情的セクシズムを持っていた。2. 保守的な性役割態度と女性への敵対的セクシズムについては両国の間で違いはなかった。3. 両国とも仕事関連保守的な性役割態度は敵対的セクシズムに、家庭関連保守的な性役割態度は温情的セクシズムに影響を及ぼしていた。4. 韓国の男子学生の場合、家庭関連態度が温情的セクシズムだけではなく、敵対的セクシズムにも有意な影響を及ぼし、女性性が温情的セクシズムに影響を及ぼした。これらのことを総合して考えると、韓国の男子学生の性役割観とセクシズムの形成に兵役の存在が作用している可能性を想定できる。

第4章 韓国大学生の性役割観と軍務に対する態度 及びセクシズム

研究3 韓国大学生の性役割観と軍務に対する態度 及びセクシズム:性別による比較

目的

本研究は、軍隊を経験していない男女大学生の性役割観と家父長意識、軍務に対する態度、そしてセクシズムの違いを分析することによって性役割観と家父長意識、軍務に対する態度がセクシズムに及ぼす影響について検討することを目的とする。

性別はセクシズムにおいて最も強力な要因である。多くの人は性別の視点から人を見、「男とはこういうもの」「女だからこうだろう」と決めつける。そして「弱いものをかばう積極的な行動力と責任感を持った強い男」と「やさしく穏やかで従順な女」を期待し、その期待から外れた者を非難し差別する。一般的に女性が男性に求めるのは女性にない「男性的」なものであり、男性が女性に求めるのは男性にはない「女性的」なものである。韓国社会では、男に期待するその「男らしさ」が軍隊という場を通して強化され、再生産されてきた(Kwon Insuk, 2005; Koo Ensuk, 2009)。

本研究では、軍務を通じて養成されることが期待される「男らしさ」が、軍隊の文化を経験していない大学生のセクシズムにどのように関わっているのかを、性別という要因に焦点を当て検討する。

方法

調査対象・調査期間 韓国ソウル市と天安市内の3つの大学で、軍務未経験大学生 1,2年生253名に対して調査を行った。対象者の中、欠損値を含んだ6名を除いた247名分の回答(男子86名、女子161名)を分析に用いた。平均年齢は男子20.0歳、女子20.68歳であった。調査は2009年11月の1ヶ月間、講義時間を利用して行われた。

調査内容

性役割観;ジェンダー・パーソナルティを測定する尺度は、Kim Hyerae の韓国型性役割尺度(KSRI, 2006)を用いた。この尺度はそれぞれ 18 個の男性性(男性性)と女性性(女性性)の特性、そして 14 個の中立的性格特性で成り立った 50 項目で構成されている。本研究では性役割観を、男性性と女性性の 2 つの要因(36 項目)だけを用いて、「全く当てはまらない」から「非常に当ては

まる」までの 7 段階で測定した。性役割観については各項目の得点を合計して、点数が高いほど性役割観が高くなるようにした。

家父長意識 家父長意識を測る尺度は、家庭内権力の中心が夫にあることを表す次の項目を新たに作成した。「家庭の大事なことは夫が責任を持って決める方がよい」「すべてのことで夫が妻をリードする方がよい」「妻は自分の実家より夫の実家をもっと大事に考えるべきだ」「経済的余裕があれば妻は働かない方がよい」「夫に愛されるのが妻にとって一番幸せなことだ」「妻に生活の苦勞をさせないのが夫の義務だ」の 6 つである。回答は「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」までの 7 段階評定で求められ、得点が高いほど家父長的意識が強くなるように得点化した。

軍務に対する態度 軍務に対する態度は、先行研究で使われた尺度(Chang Yongseon, 1991)を参考にしながら、軍務に対する態度 20 項目を今回新たに作成した。それぞれの項目についての程度当てはまるかを尋ね、「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」までの 7 段階で求めた。

セクシズム セクシズム尺度は、An Sangsu et al. (2007) の韓国型多面性別意識検査 24 項目(敵対的セクシズム 12 項目・温情的セクシズム 12 項目)を使った。各項目に対して、他の尺度の測定と同じように「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」までの 7 段階で求めた。

Table 1 性役割観の因子分析結果

項目	男性性	女性性
c35 自信がある	.78	-.02
c10 大胆だ	.73	-.02
c16 勇敢だ	.72	-.15
c22 たくましい	.68	-.24
c33 意志が強い	.67	-.04
c25 積極的だ	.65	.10
c28 迫力がある	.63	-.03
c31 冒険心がある	.61	.03
c37 進取的だ	.58	.17
c39 瞬発力がある	.56	.14
c48 主導的だ	.55	.25
c45 野望がある	.53	.04
c19 運動するのが大好きだ	.45	-.12
c38 愛情への欲求が強い	-.05	.77
c43 感情を重視する	.02	.70
c32 守られたい意識が強い	-.19	.64
c5 感受性が豊かだ	.00	.62
c29 涙もろい	-.14	.59
c36 他人に共感しやすい	.02	.54
c14 美を追求する	.19	.50
c26 愛嬌がある	.19	.47
因子間相関	.25	

結果及び考察

1. 項目の選定

性役割観 性役割観36項目に対して、最尤法・Promax 回転による因子分析を行った。男性性と女性性2因子を仮定した確認的因子分析である。3回の回転の中、因子負荷量が3.5に満たない15

項目を除去し、最終的に男性性13項目、女性性8項目を分析に用いた。因子分析結果はTable 1に示した。内的整合性を検討するために α 係数を算出したところ、「男性性」13項目で $\alpha = .89$ 、「女性性」8項目で $\alpha = .81$ と十分な値が得られた。

軍務に対する態度 軍務態度20項目に対し、最尤法・Promax 回転による因子分析を行った。固有値の減衰と因子の解釈可能性から2因子を採用し、再び最尤法・Promax 回転による因子分析を行った。その結果をTable 2 に示す。

Table 2 軍務態度の因子分析結果 (Promax 回転後の因子パターン)

軍務経験を通して、	軍務肯定 態度	軍務否定 態度
m11 自分の将来について深く考えるようになる	.81	.01
m16 強い心身を持つ男になる	.81	.03
m17 親と友達の大切さがわかる	.80	.16
m12 忍耐力と自立心が強くなる	.78	.16
m9 軍隊での厳しい訓練は社会経験に役に立つ	.77	-.02
m10 自分自身について省察する機会になる	.77	.01
m14 家族や友達などの別れを経験することを通して、精神的に成熟する	.76	-.08
m18 健康の大切さがわかってくる	.75	.14
m13 自信が出てくる	.71	.02
m19 多様な人との出会いができ、人間関係に関するスキルが身につく	.63	-.08
m8 国を守ることを通して、韓国人としての責任感を果たしている	.62	-.07
m20 軍隊に行ってこそ真の男になる	.61	-.19
m2 軍隊に行かない(行けない)人は未熟で、何かが欠けている	.57	-.18
m7 軍務経験を通して社会生活に必要な色々なことを学ぶことができる	.53	-.01
m15 異性に対する価値観・態度が変わる	.51	-.21
m1 軍隊に行ってこそ一人前になる	.49	-.06
*m4 若い時、2年という時間を軍隊で過ごすのは個人にとって大きな損害だ	.14	.88
*m6 軍隊での2年は無為に歳月を送ることだ	-.01	.84
*m3 軍隊を行かないですめば、行かないほうがいい	-.01	.70
*m5 軍隊に行ってきたらバカ者になる	-.19	.44
因子間相関		-.37
*逆転項目		

第 1 因子は軍務に対する肯定的な項目で構成されていることから、「軍務肯定態度」と命名した。

第 2 因子は軍務に対する否定的な項目で構成されていることから、「軍務否定態度」因子と命名し

た。尺度に対する内的整合性は「軍務肯定態度」と「軍務否定態度」それぞれ $\alpha = .93$, $\alpha = .82$ であった。

家父長意識 家父長意識6項目に対して最尤法・Promax 回転による因子分析を行った。分析の結果、1つの因子にまとめられたので、6項目そのまま使うようにした。尺度に対する内的整合性は、 $\alpha = .88$ を示した。

セクシズム セクシズム尺度については、研究全体の一貫性のため、因子分析をせず、24項目をそのまま用いた。尺度に対する内的整合性は、敵対的性別意識12項目 ($\alpha = .91$)、温情的性別意識12項目 ($\alpha = .81$)で十分高く、信頼度も確認された。

Table 3 家父長意識の因子分析結果

家父長意識項目	
s28 家庭の大事なことは夫が責任を持って決める方がよい	.81
s30 すべてのことで夫が妻をリードする方がよい	.79
s29 妻は自分の実家より夫の実家をもっと大事に考えるべきだ	.74
s25 経済的余裕があれば妻は働かない方がよい	.73
s27 夫に愛されるのが妻にとって一番幸せなことだ	.72
s26 妻に生活の苦勞をさせないのが夫の義務だ	.67

2. 性役割観, 家父長意識, 軍務に対する態度及びセクシズムにおける男女の比較

まず、男女別に性役割観, 家父長意識, 軍務に対する態度及びセクシズムの平均点と標準偏差を求めた (Table 4)。性役割観の男性性では、男子の平均値は59.01, 標準偏差は12.04であった。他方女子の平均値は56.48, 標準偏差は10.29となり、男子との有意な違いは認められなかった ($t = 1.73$, *n.s.*)。性役割観の女性性においては、男子の平均値が37.73, 標準偏差7.16であった。他方女子の平均値は41.02, 標準偏差7.28となり、男子に比べて有意に高かった ($t = 3.41$, $p < .01$, $d = -.45$)。すなわち、性役割観では女性性においてのみ、女子学生が男子学生より高いと言う結果になった。

次に軍務に対する態度である。軍務を肯定する態度においては、男子の平均値が67.78, 標準偏差18.20であった。女子ではそれぞれ70.33, 17.27であり、この点について男女間には違いがあるとは言えない。他方、軍務に対する否定的態度においては、男子の平均値は21.71, 標準偏差が5.52であり、女子のそれは18.38, 5.03であった。そこには有意な違いが認められ ($t = 4.79$, $p < .001$, $d = .64$)、男子の方が女子に比べて軍務に対して否定的態度が相対的に強いことが明らか

になった。この研究では軍務経験のない者を参加者としている。ここでの男子の回答者は、近い将来いずれ軍務に着くことを現実的に考え、そこに自分の人生の時間を軍務という形で費やすことに積極的な意味をみいだせずにいることを示している。他方、女子は自分が軍務に就くことを考えず、あくまで異性の役割としての軍務であり、男子に比べて否定的な態度が相対的に低いのだと考えられる。

家父長意識では、男子の平均値が22.00、標準偏差が7.64であった。これに対して女子は16.16、7.71と男子に比べ低く、その差は有意であった($t = 5.70, p < .001, d = .76$)。

さらにセクシズムにおいて、平均値41.31、標準偏差12.40だった男子の敵対的セクシズムは、平均値29.82、標準偏差7.71の女子より高かった($t = 7.53, p < .001, d = 1.00$)。温情的セクシズムも男子は平均値54.77、標準偏差11.06であったが、女子は46.89、12.83を示し、男子に比べて低く、その差も有意であった($t = 4.82, p < .001, d = .64$)。

「軍務経験なし」という条件でも男子の方が女子より高い性役割態度を持っており、特に女性への敵対的セクシズムについては男女の差が大きかった($d = 1.00$)。

男女とも「軍務＝有益な経験」とは認めるが($t = -1.09, df = 245, n.s.$)、男子大学生は「軍務＝不利、損失」「できるなら行きたくない」という認識も持っている。入隊に対する心的負担や時間的被害意識が未経験男子に影響を及ぼしたと考えられる。

Table 4. 性役割観、家父長意識、軍務態度及びセクシズムにおける男女別平均値と標準偏差

	男子 (n = 86)		女子 (n = 161)		t	d
	M	SD	M	SD		
男性性	59.01	12.04	56.48	10.29	1.73	
女性性	37.73	7.16	41.02	7.28	-3.41**	-0.45
軍務肯定態度	67.78	18.20	70.33	17.27	-1.09	
軍務否定態度	21.71	5.52	18.38	5.03	4.79***	0.64
家父長意識	22.00	7.64	16.16	7.71	5.70***	0.76
HS	41.31	12.40	29.82	10.88	7.53***	1.00
BS	54.77	11.06	46.89	12.83	4.82***	0.64

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$ HS: 敵対的セクシズム, BS: 温情的セクシズム

3. 男女別各尺度間の関連

続いて「性役割観、軍務に対する態度、家父長意識及びセクシズム」の関係を検討するために相関分析を行った。Table 5 に男女別の尺度間相関係数を示した。

まず、男女共通して、軍務に対する肯定的な態度と家父長意識の間にやや強い相関が見られた($r = .56, p < .001$; $r = .41, p < .001$)。また、軍務に対する肯定的な態度と敵対的セクシズム($r = .48, p < .001$; $r = .25, p < .01$)、軍務に対する肯定的な態度と温情的セクシズムの間にも有意な正の相関が見られた($r = .44, p < .001$; $r = .60, p < .001$)。男女とも軍務に対する肯定的な態度が伝統的な性役割態度と関わっているということである。

一方、男子は男性性と温情的セクシズムとの間に弱いながら有意な正の相関が見られた($r = .28, p < .01$)。それに対し女子は、女性性と温情的セクシズムの間に有意な正の相関が見られた($r = .36, p < .001$)。つまり、男子はたくましくて大胆で自信が強いほど、女子は愛情への欲求と守られたい意識が強いほど温情的セクシズムも強い傾向がある。

Table 5. 男女別の相関結果

男子	女性性	軍務肯定態度	軍務否定態度	家父長意識	HS	BS
男性性	.30**	.14	.21*	.10	.18	.28**
女性性		-.11	.27*	-.16	-.25*	.09
軍務肯定態度			-.34***	.56***	.48***	.44***
軍務否定態度				-.17	-.18	.12
家父長意識					.69***	.65***
HS						.53***
女子	女性性	軍務肯定態度	軍務否定態度	家父長意識	HS	BS
男性性	.23**	.24**	-.11	-.06	-.10	.19*
女性性		.30***	.04	.12	.02	.36***
軍務肯定態度			-.38***	.41***	.25**	.60***
軍務否定態度				-.34***	-.19*	-.28***
家父長意識					.69***	.67***
BS						.49***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$ HS: 敵対的セクシズム, BS: 温情的セクシズム

そして女子は、性役割観と軍務肯定態度との間に正の相関を示したのに対し($r = .24, p < .01$; $r = .30, p < .001$)、男子の場合は、性役割観と軍務否定態度との間に正の相関を示していた($r = .21, p < .05$; $r = .27, p < .05$)。軍務に対する態度においては性役割観が男女それぞれ異なる関わりを

持っていることである。

また、軍務に対する否定的な態度が家父長意識とセクシズムに無相関だった男子と違って、女子の方は、軍務に対する否定的な態度が家父長意識 ($r = -.34, p < .001$)とセクシズムとの間に負の相関を示した ($r = -.19, p < .05$; $r = -.28, p < .001$)。女子の軍務に対する態度が男子より、セクシズムに深く関わっていることがわかる。

しかし、敵対的セクシズムと温情的セクシズムとの相関では、男女の差はなかった ($r = .53, p < .001$; $r = .49, p < .001$)。男子学生だけではなく、女子学生もやや強いセクシズムを持っている。Glick and Fiske (1996, 2001)によれば、敵対的セクシズムと温情的セクシズムの間には正の相関があり、敵対的セクシズムを有している人であるほど温情的セクシズムを持っている。男性のセクシズムが高い社会であるほど、女性たちは男性中心的社会システムを受け入れる可能性が高く、また自分を守る手段として敵対的セクシズムよりは男性の保護と愛情が約束された温情的セクシズムを受け入れる。Fischer (2006)も、特に女性に対しネガティブな態度を有する男性に囲まれている女性に、温情的セクシズムを受け入れる傾向が強いと報告している。この結果は、韓国社会のセクシズムが男性だけの問題でなく、女性の問題でもあることを示唆している。

4. 性役割観、家父長意識及び軍務に対する態度がセクシズムに与える影響

性役割観、家父長意識、軍務に対する態度がセクシズムに与える影響を検討するために、男女別に重回帰分析を行った (Table 6)。

まず、家父長意識は男女とも、敵対的セクシズム ($\beta = .57, p < .001$; $\beta = .71, p < .001$)と温情的セクシズム ($\beta = .61, p < .001$; $\beta = .54, p < .001$)に強い影響力を持つ変数であることがわかる。

男は一家を代表し、家族を養う責任がある一方、女性は家族の日常生活 (家事・育児など)に責任を持つという家父長意識は、セクシズムを支持する強力なイデオロギーの一つである。

女子の軍務に対する肯定的態度は温情的セクシズムに影響を与えるのに対し ($\beta = .32, p < .001$)、男子の方は軍務に対する否定的態度が温情的セクシズムに影響を与えている ($\beta = .22, p < .05$)。そして女子の女性性は温情的セクシズムに影響を与えるが ($\beta = .17, p < .01$)、男子の女性性は敵対的セクシズムに負の影響を与えた ($\beta = -.19, p < .05$)。

性別を問わず、「男は軍隊に行ってこそ一人前」「国防の義務を果たしてこそ韓国の男」という意識があり、軍務生活を通じて家族への愛や責任感、自立心など多くのことを体得することができるという考え方を持っている。このような軍務に対する肯定的態度は、軍隊を経験できない女子大学生の温情的セクシズムにだけ反映している。男子大学生の場合、軍務は自分が実際に経験しなければならぬものであり必要とは考えつつも同時に負担とも感じている。そのようなきわめて現実的な

立場から軍務を否定的に受け止めざるを得ないという面がある。それが軍務を負担としない女性へ、温情的セクシズムよりもまず、あからさまでネガティブな態度である敵対的セクシズムの形をとって現れたと考えられる。

しかし、男子大学生は軍務を経験することによって態度が変化することが予想され、軍務の実体験がどのように影響するか注目する必要がある。

Table 6. 男女別の重回帰分析結果

従属変数 HS	男		女		従属変数 BS	男		女	
	β		β			β		β	
男性性	.17*		-.03		男性性	.12		.10	
女性性	-.19*		-.07		女性性	.12		.17**	
家父長意識	.57***		.71***		家父長意識	.61***		.54***	
軍務肯定態度	.08		.01		軍務肯定態度	.18		.32***	
軍務否定態度	-.04		.05		軍務否定態度	.22*		.02	
R^2	.57***		.50***		R^2	.57***		.64***	

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$ HS: 敵対的セクシズム, BS: 温情的セクシズム

<まとめ>

この研究3では、性別による違いを明らかにするために、軍隊を経験していない男女大学生の性役割観と家父長意識、軍務に対する態度、そしてセクシズムを分析することによって性役割観と家父長意識、軍務に対する態度がセクシズムに及ぼす影響について検討した。その結果、まず、性役割観では女性性においてのみ、女子学生が男子学生より高かった。2. 男子の方が女子より高い家父長意識と敵対的・温情的セクシズムを持っていた。3. 軍務を肯定する態度においては男女の違いがなかったが、否定的態度には男子の方が女子より強かった。4. 男女共通して、軍務に対する肯定的な態度と敵対的セクシズム、軍務に対する肯定的な態度と温情的セクシズムの間にも有意な正の相関が見られた。5. 男子は男性性と温情的セクシズムとの間に、女子は女性性と温情的セクシズムの間に有意な正の相関が見られた。6. 女子は性役割観と軍務肯定態度との間に、男子は性役割観と軍務否定態度との間に正の相関を示していた。7. 家父長意識は男女とも、敵対的セクシズムと温情的セクシズムに強い影響力を持つ変数である。8. 女子の軍務に対する肯定的態度は温情的セクシズムに影響を与えるのに対し、男子の方は軍務に対する否定的態度が温情的セクシズムに影響を与えていた。9. 女子の女性性は温情的セクシズムに正の影響を、男子の女

性は敵対的セクシズムに負の影響を与えた。このことから、男女とも「軍務は有益な経験」とは認めているが、男子大学生は軍務に対し否定的な認識もっており、それがセクシズムに影響を与えていることがわかる。また韓国社会のセクシズムが男性だけの問題ではなく、女性自身の意識が問われる問題でもあることを示唆している。

研究4 韓国大学生の性役割観と軍務に対する態度 及びセクシズム: 軍隊経験の有無による比較

目的

韓国の大学は軍隊文化を経験した集団とそうではない集団が共存し、除隊した復学生を通して軍隊文化が再生産されている。彼らが身につけた軍隊文化は、軍務の経験者と未経験者の間に上下関係を作りだし、軍務の経験者が大学内で力を持つようになる (Kwon Ohbun, 2000; Nah Yoonkyeung, 2007)。男が権力を握っている社会では、女性は対等な者と見されていない。女性を低い地位にある弱者とみなし、パトロン的行動によって女性を守ろうとし、そのことによって相対的に男性の地位の優位性を確認する (Vescio et al., 2005)。韓国社会で「軍務」とは「強い男」に生まれ変わる経験であり、男の権威が獲得できる重要な手段である。

本研究では、対象を軍隊を経験した男子とまだ経験していない男子に区分し、その2つの集団の間に性役割観とセクシズムにおける差があるのか、軍務経験が性役割観と女性に対する敵対的・温情的セクシズムに影響を及ぼすのかを検討する。

方法

対象者及び調査期間 軍務未経験者は、2010年11月～12月にかけて韓国のソウル市と天安市、慶山市所在の7つの大学に在学中で、2011年前半期に軍入隊を控えている128人の男子学生(平均年齢 19.7歳)を対象にした。軍務経験者210人は2011年11月現在、ソウル市と天安市、論山市所在の4つの大学に在学中で、現役で除隊して1年未満の学生のデータを用いた(平均年齢 23.4歳)。

尺度の構成

性役割観: Kim Hyerae の韓国型性役割尺度 (KSRI, 2006) を用いた。研究3と同様本研究でも性役割観を既存の尺度で使われてきた4個の性格類型で分けず、男性性と女性性の2つの要因だけを用いた。確認的因子分析を通してまとめられた男性性18項目と女性性9項目を最終的に使った (Table 1)。「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」までの7段階で問う回答形式であり、点数が高いほど男性性と女性性の指向が強いと解釈することができる。

セクシズム:セクシズム尺度は韓国型多面性別意識検査(An Sangsu et al., 2007)を使用した。この尺度は敵対的セクシズムと温情的セクシズムそれぞれ12質問項目で構成されており、点数が高いほどセクシズムが強いと判断する。各項目に対して、他の尺度の測定と同じように「全くそうは思わない」「あまりそうは思わない」「まあそう思う」「非常にそう思う」までの4段階で求めた。

結果及び考察

1. 項目の選定

男性性と女性性 2 因子で構成されている性役割観 36 項目に対して、最尤法・Promax 回転による確認的因子分析を行った。男性性と女性性 2 因子を仮定した確認的因子分析である。3 回の回転の中、因子負荷量が 3.5 に満たない 15 項目を除去し、最終的に男性性 13 項目、女性性 8 項目を分析に用いた。因子分析結果は Table 1 に示した。内的整合性を検討するために α 係数を算出したところ、「男性性」13 項目で $\alpha = .89$ 、「女性性」8 項目で $\alpha = .81$ と十分な値が得られた。

セクシズム尺度については、因子分析をせず、24 項目をそのまま用いた。尺度に対する内的整合性は、敵対的性別意識 12 項目 ($\alpha = .91$)、温情的性別意識 12 項目 ($\alpha = .81$) で十分高く、信頼度も確認された。

2. 性役割観とセクシズムにおける軍務経験有無による比較

まず、軍務経験の有無別に性役割観とセクシズムの平均点と標準偏差を求めた。結果は Table 2 に示した。性役割観の男性性では、軍務未経験者の平均値は 81.72、標準偏差は 14.12 であった。

Table 1 性役割観の因子分析結果

尺度内容	男性性	女性性
gr11. 勇敢だ	.85	-.03
gr17. 積極的だ	.75	.09
gr7. 大胆だ	.75	-.13
gr35. 主導的だ	.75	-.01
gr25. 自信がある	.75	.05
gr15. たくましい	.73	-.09
gr23. 意志が強い	.71	-.04
gr19. 迫力がある	.70	.02
gr27. 進取的だ	.68	.09
gr5. 正義感が強い	.61	.03
gr29. 瞬発力がある	.58	.04
gr21. 冒険心がある	.56	.10
gr33. 野望がある	.56	.02
gr9. 義理堅い	.50	.10
gr13. 運動するのが好きだ	.50	-.09
gr3. 愚直だ	.49	-.07
gr6. きれい好きだ	.47	.04
gr12. 計画性がある	.45	-.01
gr4. 感受性が豊かだ	.11	.72
gr32. 感情を重視する	-.12	.67
gr10. 美を追求する	.14	.57
gr20. 涙もろい	-.07	.56
gr28. 愛情への欲求が強い	-.05	.55
gr22. 守られたい意識が強い	-.30	.46
gr26. 他人に共感しやすい	.11	.45
gr18. 愛嬌がある	.04	.44
gr16. 繊細だ	.10	.37
因子間相関	.15	

他方軍務経験者の平均値は88.99、標準偏差は14.99となり、軍務未経験者との有意な違いが認められた($t = -4.41, df = 336, p < .001, d = -.50$)。軍務経験者が未経験者より強い男性性を持っていることが伺える。性役割観の女性性においては、軍務未経験者の平均値が36.65、標準偏差6.36であった。これに対して軍務経験者はそれぞれ36.53、7.03であり、有意差が見られなかった($t = .17, n.s.$)。軍隊は究極的に戦争遂行が可能な組織としての特性と規範・生活方式などを必要とする特殊な集団である(Chang Yongseon, 1991)。男性性は軍人にとって必要な資質であり何より軍隊では強い男に生まれ変わることを求め、また、そのように肉体的・精神的な訓練を受けるので、軍務経験は男性性を強める重要な要因として作用したと考えられる。

次に軍務経験の有無とセクシズムについて検討する。敵対的セクシズムでは、軍務未経験者の平均値が28.33、標準偏差が5.78であった。それに比べ軍務経験者は26.17、6.22と未経験者より低く、その差は有意であった($t = 3.18, df = 336, p < .01, d = .36$)。温情的セクシズムにおいては、軍務未経験者の平均値は30.48、標準偏差が5.14であり、軍務経験者ではそれぞれ31.15、5.24であり、有意な差は見られなかった($t = -1.16, n.s.$)。軍務未経験者の敵対的セクシズムが軍務経験者より高かったということは、入隊に対する心的負担や時間的な損失感からくる被害意識が未経験者に影響を及ぼしたことも考えられる。しかし、軍務経験者の男性性が未経験者より強く、また、男性性が温情的セクシズムにだけ影響を及ぼしたという結果を合わせて考慮してみるならば、未経験者の敵対的セクシズムが経験者より強いというよりは、むしろ経験者の、女性に対する敵対的セクシズムが減少したと解釈する方が妥当である。女性を敵対の対象と見るより、保護の対象として認識することになったと捉えるべきであろう。

Table 2 軍務経験集団と未経験集団の平均値と標準偏差および差

	α	軍務未経験者(N=128)		軍務経験者(N=210)		t	d
		M	SD	M	SD		
男性性	.91	81.72	14.12	88.99	14.99	-4.47***	-0.50
女性性	.71	36.65	6.36	36.53	7.03	.17	
HS	.87	28.33	5.78	26.17	6.22	3.24**	0.36
BS	.80	30.48	5.14	31.15	5.24	-1.16	

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$ HS: 敵対的セクシズム, BS: 温情的セクシズム

3. 軍務経験有無による各尺度間の関連

続いて軍務経験者と未経験者の性役割観とセクシズムとの関係を検討するために、相関分析を行った。結果はTable 3に示した。2つの集団に共通して男性性と温情的セクシズムに弱いながら有意な正の相関が見られた($r = .21, p < .05$; $r = .22, p < .01$)。これは軍務経験の有無と関係なく、男性性の特性、例えば、勇敢で積極的で大胆な男が女に対して温情的な意識を持っているということの意味しており、弱者を庇護しようとする男性性が持っている属性と関連付けて考えなければならぬ。

しかし、敵対的・温情的セクシズムの相関においては2つの集団の差が明確になった($z' = -2.93, p < .001$)。軍務未経験者では敵対的セクシズムと温情的セクシズムに相関がなかったが($r = .05, n.s.$)、経験者では有意な相関があり($r = .36, p < .001$)、敵対的な意識を持つ経験者に温情的な意識が共に作用したことが分かる。

Table 3 性役割観とセクシズムとの相関結果

軍務未経験者	女性性	HS	BS
男性性	.21*	.14	.21*
女性性		-.06	.11
HS			.05
軍務経験者	女性性	HS	BS
男性性	.10	.06	.22**
女性性		-.06	.21**
HS			.36***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

4. 性役割観がセクシズムに及ぼす影響

次に重回帰分析を通じて、男性性と女性性がセクシズムに及ぼす影響を検討した。結果はTable 4に示した。軍務未経験者の男性性は弱いものの、敵対的セクシズムと温情的セクシズムにそれぞれ有意な影響を及ぼした($\beta = .18, p < .05$; $\beta = .17, p < .05$)。それに対し経験者の男性性は温情的セクシズムにだけ影響を及ぼしていた($\beta = .21, p < .01$)。また、経験者の女性性が温情的セクシズムにも有意に影響を及ぼすことがわかった($\beta = .19, p < .01$)。これは軍務が韓国男性としてのアイデンティティを確認させ、「守る者」「保護者」としての役割というものを再認識させる重要な契機となっていることを意味する。

軍隊は、女性とは違う、男性にのみ求められる社会的役割を規定し課すことによって成り立つ特殊な環境である。そこでは辛い軍事訓練を耐え抜くために強い男として全力を傾けなければならず、そのために男性は守護者としての意味を付与され、女性を保護される存在、弱い存在として具現化するのである(Kwon Insuk, 2005)。

本研究では、軍務経験が男性性を強め、女性への温情的セクシズムを高めるメカニズムとして働いているということを確認した。ただし、今回対象者になった未経験者と経験者の間には年齢の差があり、一般には年齢が高くなるほど異性と交流する機会も増え、異性に対する価値観と態度が変わり得るので、この点を明らかにするためには追加的な研究が必要であり、軍務の内的外的変数の影響に対する検討もまた必要だろう。

Table 4 性役割観がセクシズムに及ぼす影響

HS	β		BS	β	
	未経験者	経験者		未経験者	経験者
男性性	.18*	.06	男性性	.17*	.21**
女性性	-.11	.06	女性性	.09	.19*
R ²	.03	.01	R ²	.05*	.08*

* $p < .05$, ** $p < .01$, HS:敵対的セクシズム, BS:温情的セクシズム

<まとめ>

研究4では、軍務経験の有無による違いを明らかにするために、軍隊を経験した男子とまだ経験していない男子に区分し、その2つの集団の間に性役割観とセクシズムにおける違いと、軍務経験が性役割観と女性に対する敵対的・温情的セクシズムに与える影響力について検討した。主な結果は次の5点である。1. 軍務経験者の方が未経験者より強い男性性を持っていた。2. 温情的セクシズムには軍務経験の有無による違いがなかったが、敵対的セクシズムでは、軍務経験者の方が未経験者より有意に低かった。3. 軍務未経験者では敵対的セクシズムと温情的セクシズムに相関がなかったが、経験者は有意な正の相関があった。4. 軍務未経験者の男性性は敵対的セクシズムと温情的セクシズムにそれぞれ有意な影響を及ぼした。それに対し経験者の男性性は温情的セクシズムにだけ影響を及ぼしていた。5. 経験者の女性性が温情的セクシズムにも有意に影響を及ぼすことがわかった。これらの検討結果は、軍務経験が男性性を強め、女性への温情的セクシズムを高めるメカニズムとして働いていることを示唆している。

研究5 韓国大学生の性役割観と軍務に対する態度 及びセクシズム:部隊の特性と勤務形態による比較

目的

兵役は韓国の男性に課せられた義務である。健康な身体を有する男性であれば、18才以上になると徴兵検査を受け、軍隊に入るのが一般的で、最初の約1ヵ月の基礎訓練期間を経て各部隊に配属され、主特技⁵に合わせて訓練を受けることになる。

軍隊生活では、厳しい各種訓練や体力鍛錬・運動競技などを通して身体的に鍛えられるだけでなく、劣悪な環境の中で過酷な作業を行うことで一般の社会生活では得られない忍耐力や自信を身につける。その一方、複雑な人間関係や自由のない組織生活・激しい体罰など、入隊前の生活とは全く違う世界を経験することになる(Yoon Jaeson, 2004)。軍隊という特殊な集団組織において再社会化され、新たな価値観と行動規範が植え付けられる(春木, 2000)。

本研究では、軍務経験者の性役割観とセクシズムに、前方勤務であったのか後方勤務であったのかという環境要因並びに戦闘に直接参加する戦闘員であったのか戦闘を補助する非戦闘員であったのかという訓練要因が作用しているかどうかを検討する。この調査を通じて軍隊の何が「真の男」を作り出すのか、そしてその「真の男」が女性に対するセクシズムにどのような影響を与えるのかを明らかにする。

なお、ここでいう「前方」とは、GOP(General out post), DMZ(Demilitarized Zone, 非武装地帯)など都市部から離れた最前線で敵と対峙している部隊のことであり、「後方」とは、戦線と比較的離れている都市近郊の主要施設を防護し、前方に兵力と物資を補充する部隊のことである。北朝鮮と韓国の現役兵力と装備の約70%以上が、非武装地帯(軍事境界線から南北それぞれ 2Km)を挟んで双方 160Km 以内に展開しているという緊張した現状を理解しておく必要がある。

方法

対象者 ソウル市のS大学に在籍する男子大学生と忠南N市のK大学に在籍する男子大学生275名を対象に調査を行った。分析にあたっては、「除隊後の経過時間が比較的に短いこと」「前方・後方・戦闘員・非戦闘員の4グループに類別する」「分析可能な人数」という3点を勘案して除隊後1年

⁵ 主特技(주특기)は韓国語でのみ使われる言葉で、各自の経歴や素質に合わせて特技を習得するよう訓練を受ける。

未満の学生を対象者に選定し、最終的には169名のデータを用いた(平均年齢 22.83歳, 標準偏差 1.14)。すべての対象者は現役兵⁶で軍務を終えた学生である。対象者についての情報は Table1 に示した。なお、戦闘員と非戦闘員の分析に際し、戦闘員か非戦闘員かが曖昧な運転兵 20名は集計から外し、149名のデータだけを用いた。

調査期間 調査は2012年11月と2013年3月の2回にわたり、大学チャペルや講義の時間を利用して実施した。参加に同意する学生に限り質問紙を配り、食券などの報償が与えられた。

Table 1. 対象者

	戦闘員	非戦闘員	運転員	合
前方	51	45	11	107
後方	23	30	9	62
合	74	75	20	169

調査内容

性役割観 韓国型性役割尺度 (Kim Hyerae, 2006)を個人の性役割パーソナリティを測定するため使った。今回の分析でも男性性(18項目)と女性性(18項目)の2つの要因だけを用いた。(1)「全く当てはまらない」から(7)「非常に当てはまる」までの7段階で問う回答形式であり、点数が高いほど男性性と女性性の特性が強いと解釈することができる。

真の男 軍務に対する態度は、先行研究(沈・遠藤, 2011)で使われた項目の中、軍務に対する肯定的態度 12項目を用いた:「男は軍隊に行ってこそ一人前になる」「軍務経験は自己省察の機会になる」「軍務を通して男としての責任感がさらに強くなる」「軍務経験を通して親と目上の人に対して感謝や尊敬の念が生まれる」「軍務経験を通して忍耐力がつく」「軍務経験を通して組織社会に対する適応力が育つ」「軍務経験を通して人間関係のスキルやリーダーシップを学ぶ」「軍隊での厳しい訓練は社会経験に役に立つ」「軍隊を経験した男同士の厚い人間関係がある」「軍務経験を通して問題解決の能力が育つ」「軍務経験が時間の無駄だとは思わない」「軍務経験を通して真の男になる」。回答者に(1)「全くそうは思わない」から(5)「非常に当てはまる」までの5段階で評定するように求めた。得点が高いほど軍務を通して「真の男」になると強く思っていると判断できるようにした。

⁶ 兵役の種類には、1. 現役 2. 補充役 3. 予備役 4. 第1国民役 5. 第2国民役 からなる(兵役法第5条)。一般的に「軍隊に行く」と言うことに当たる兵役が「現役兵」である。

家父長意識 家父長意識を測定する尺度は、先行研究で使われた次の6項目を用いた(沈・遠藤, 2011b):「結婚した女性が実家の親のお世話をするのは夫に対してもうしわけないことだ」「家族の生計は夫の責任だ」「夫の収入が十分であれば、あえて妻が仕事する必要はない」「女性の本分は子供を育て、夫によく仕え、家事をすることだ」「妻は自分の実家より夫の実家をもっと大事に考えるべきだ」「家庭の平和のためには、妻が夫に従うのが望ましい」。回答は(1)「全くそうは思わないから」(5)「非常に当てはまる」までの5段階で求めた。

セクシズム セクシズム尺度は韓国型多面性別意識検査(An Sangsu et al., 2007)を使った。この尺度は敵対的セクシズムと温情的セクシズムそれぞれ12質問項目で構成されており、点数が高いほどセクシズムが強いと判断する。各項目に対して(1)「全くそうは思わない」(2)「あまりそうは思わない」(3)「まあそう思う」(4)「非常にそう思う」までの4段階で求めた。

結果

1. 項目の選定

性役割観 性役割観36項目に対して、男性性と女性性の2因子構造に仮定し最尤法・Promax 回転による因子分析を行った。回転後に因子負荷量が3.5に満たない項目を除去しながら、3回同一方法で分析を繰り返した結果、男性性18項目と女性性9項目がまとめられた。信頼性を検討するために α 係数を算出したところ、「男性性」では $\alpha = .91$ 、「女性性」では $\alpha = .76$ と十分な値が得られた。

家父長意識 家父長意識6項目に対して最尤法・Promax 回転による因子分析を行った(Table 2)。分析の結果、低い負荷量を示した2項目(s25 結婚した女性が実家の親のお世話をするのは夫に対してもうしわけないことだ, s26 家族の生計は夫の責任だ)を除去し、残り4項目を分析に用いた。4項目に対する信頼性の検討では $\alpha = .70$ を示した。

軍務に対する態度 軍務に対する態度12項目に対して最尤法・Promax 回転による因子分析を行った(Table 3)。すべての項目が1つの因子にまとめられたため、12項目をそのまま用いた。12項目を「真の男」因子と命名した。尺度に対する信頼性は $\alpha = .91$ であった。

セクシズム セクシズム尺度については、研究全体の一貫性のため、因子分析をせず、24項目をそのまま用いた。 α 係数を用いて信頼性を検討したところ、敵対的性別意識12項目($\alpha = .90$)、温情的性別意識12項目($\alpha = .80$)と十分な値と判断できる。

Table 2. 家父長意識の因子分析結果

家父長意識項目		
s28	女性の本分は子供を育て、夫によく仕え、家事をすることだ	.95
s30	家庭の平和のためには、妻が夫に従うのが望ましい	.59
s29	妻は自分の実家より夫の実家をもっと大事に考えるべきだ	.56
s27	夫の収入が十分であれば、あえて妻が仕事する必要はない	.40

Table 3. 「真の男」の因子分析結果

軍務に対する態度(真の男)項目		
m2	軍務経験は自己省察の機会になる	.82
m3	軍務を通して男としての責任感がさらに強くなる	.80
m12	軍務経験を通して真の男になる	.78
m1	男は軍隊に行ってこそ一人前になる	.77
m8	軍隊での厳しい訓練は社会経験に役に立つ	.70
m7	軍務経験を通して人間関係のスキルやleadershipを学ぶ	.67
m10	軍務経験を通して問題解決の能力が育つ	.67
m11	軍務経験が時間の無駄だとは思わない	.66
m5	軍務経験を通して忍耐力がつく	.62
m4	軍務経験を通して親と目上の人に対して感謝や尊敬の念が生まれる	.61
m6	軍務経験を通して組織社会に対する適応力が育つ	.58
m9	軍隊を経験した男同士の厚い人間関係がある	.56

2. 性役割観, 家父長意識, 「真の男」及びセクシズムにおける集団の比較

まず, それぞれの尺度に該当する項目得点を合計することによる集団別の差を検討した。軍務経験者を勤務場所(前方・後方)と勤務形態(戦闘員・非戦闘員)に分類し, 勤務場所と勤務形態を独立変数とした2要因分散分析を行ったが, いずれの得点についても有意な差は見られなかった。Table 4 に各尺度得点の平均値と標準偏差を示した。

Table 4. 各尺度得点の平均値と標準偏差及び信頼性

	前方 (n = 107)		後方 (n = 62)		戦闘員 (n = 74)		非戦闘員 (n = 75)		α
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	
男性性	87.55	15.09	87.58	13.59	87.31	14.45	88.04	14.46	.91
女性性	37.89	6.85	36.56	6.59	37.84	6.50	37.61	6.93	.76
家父長	9.37	2.31	9.42	2.46	9.16	2.43	9.57	2.24	.70
真の男	49.26	8.52	48.21	8.55	49.12	8.27	48.32	8.60	.91
HS	27.03	6.42	26.65	6.88	26.18	6.64	27.16	6.96	.90
BS	34.32	5.53	35.34	4.97	34.81	5.09	34.48	5.39	.80

Table note: *M* = 平均値, *SD* = 標準偏差 をあらわす。HS: 敵対的セクシズム, BS: 温情的セクシズム

3. 性役割観, 家父長意識及び「真の男」がセクシズムに与える影響

性役割観, 家父長意識及び「真の男」がセクシズムに与える影響を検討するために, 前方・後方と戦闘員・非戦闘員に対する共分散構造分析によるパス解析を行った。その結果は Figure 1~4 に示した。

前方と後方の特徴 まず, 男性性が「真の男」を通して温情的セクシズムに影響を及ぼしたのは, 前方と後方に共通する特徴である。前方では男性性が「真の男」($\beta = .33, p < .01$)に, 「真の男」は温情的セクシズム($\beta = .36, p < .01$)に影響を及ぼした。それに対し後方では, 「真の男」が温情的セクシズムだけではなく, 敵対的セクシズムにも影響を及ぼした($\beta = .37, p < .01; \beta = .41, p < .01$)。また「真の男」に家父長意識が影響を及ぼしていた($\beta = .44, p < .001$)。

一方, 家父長意識は前方と後方共に, 温情的セクシズム($\beta = .27, p < .01; \beta = .36, p < .05$)と敵対的セクシズム($\beta = .51, p < .001; \beta = .63, p < .001$)に影響を与えていた。

戦闘員と非戦闘員の特徴 「真の男」が温情的セクシズムに影響を与えるのは戦闘員でも非戦闘員でも見られる特徴であったが, 戦闘員の場合は, 他のグループとは違って「真の男」が男性性を經由しないで, 温情的セクシズムに直接影響を及ぼしていた($\beta = .36, p < .01$)。

それに対し, 非戦闘員の「真の男」は温情的セクシズムと敵対的セクシズムに同時に影響を与えている($\beta = .32, p < .01; \beta = .22, p < .05$)。そして男性性は「真の男」と敵対的セクシズムに影響を与えていた($\beta = .29, p < .01; \beta = .28, p < .01$)。女性性以外のすべての変数が敵対的セクシズムと温情的セクシズムに影響を及ぼしている。

また, 家父長意識においては戦闘員と非戦闘員共通に, 敵対的セクシズムと温情的セクシズムに影響を与えている。「前方と後方」と同じように家父長意識は温情的セクシズムよりは($\beta = .23, p < .05; \beta = .31, p < .01$), 敵対的セクシズムにさらに強く現れた($\beta = .61, p < .001; \beta = .57, p < .001$)。

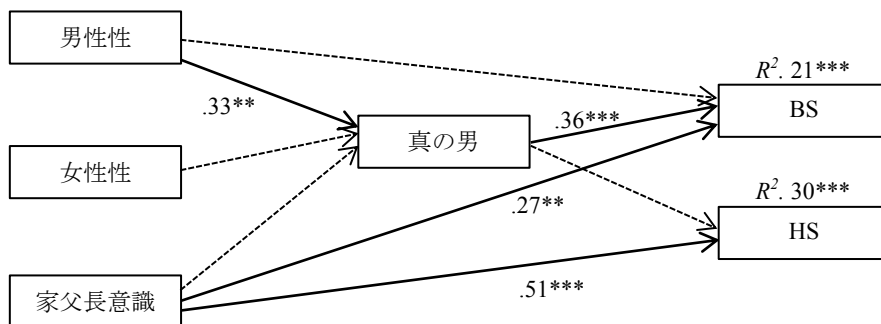


Figure.1 前方の特徴

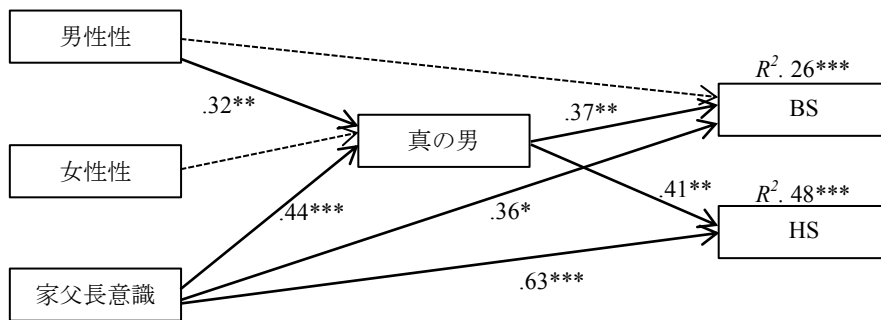


Figure.2 後方の特徴

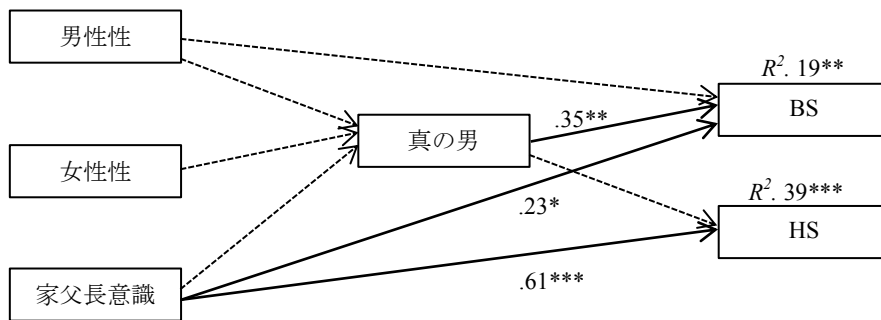


Figure.3 戦闘員の特徴

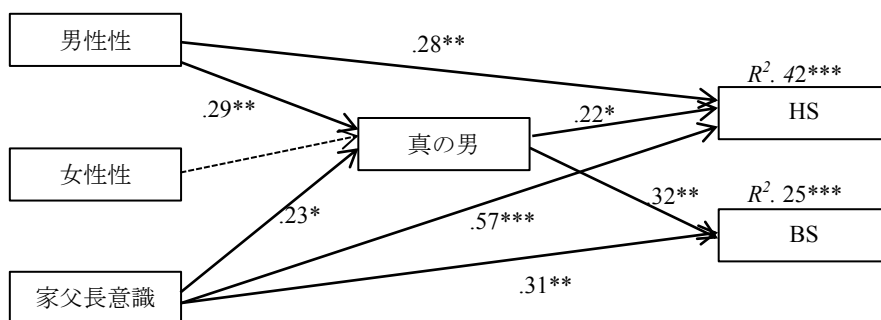


Figure.4 非戦闘員の特徴

考察

この研究5では、軍隊の何が「真の男」を作り出すのかを明らかにするために、軍務の環境要因並び訓練要因の違いに着目して検討した。その結果、前方と後方、あるいは戦闘員と非戦闘員を比較してみて、性役割観と家父長意識そしてセクシズムの得点においてはそれらの群間で相違は見いだせなかった。しかし、各尺度の得点では有意な差異がなくても、相互の関係では違いが見られた。

まず、前方では男性性が「真の男」を経由して温情的セクシズムに影響を及ぼしたのに対し、後方では「真の男」が温情的セクシズムだけではなく、敵対的セクシズムにも影響を及ぼし、また「真の男」に家父長意識が影響を及ぼしていたことである。前方は、韓国と北朝鮮の間の緊張した軍事的状況の下に置かれている場所である。いつでも戦争が起こる可能性があるため、前方で服務する兵士たちは戦争が勃発するとただちに現場に向かい戦闘に入ることが可能な訓練を受ける。当然その訓練はきびしく、心身ともに一層強い男になることが求められる。男性性が「真の男」に影響を及ぼすのは、このような実状を反映している。その「真の男」としての自覚が女性に対する温情的意識に影響を及ぼす。その一方、「真の男」の自覚は、女性を否定的に見る家父長意識を強めるようには働かなかつたと考えられる。

しかし後方グループの場合、軍務経験を通して「真の男」になると考えているのは同じであるが、その一面女性への敵対的セクシズムも保持しており、家父長意識も「真の男」の意識と連動した。

前方と後方のこのような違いは、「前方での変化」という側面で見ると適当であろう。後方に比べ劣悪な環境、厳しい訓練そして、実際に自分たちが犠牲になるかもしれないという場面を体感してきた前方での経験は男としての責任感と同時に国防意識も強くし、女性に対する態度の変化にも影響を与えたと考えられる。

次は、他のグループとは違って戦闘員グループでは、「真の男」が男性性を経由しないで、温情的セクシズムに直接影響を及ぼしていたことである。つまり、戦闘員の場合、家父長意識を別とすると、「真の男」と温情的セクシズムだけが働いているということである。それは軍事行動のための肉体訓練が主な仕事である戦闘員の特性から考えられる。戦闘員には厳しい訓練を乗り越えるよう、「真の男」のイデオロギーを注入されるからである。それに対し非戦闘員は、女性性以外のすべての変数が敵対的セクシズムと温情的セクシズムに影響を及ぼしている。男性性と「真の男」が敵対的セクシズムに影響力を持っていたのは軍務未経験男子学生の傾向と一致する結果である。非戦闘員は軍隊の影響が最も少ないグループだと思われる。ただ戦闘員の場合も、また非戦闘員であっても、前方と後方による違いが予想されるので、グループ分けによるさらなる検討が必要である。

た、前方と後方ではむしろ前者において、あるいは戦闘員と非戦闘員では戦闘員において、「真

の男」が温情的セクシズムに影響を与えていた。一般には、身体を張って厳しい任務に就く場に男性だけが置かれることに怒りの感情を覚えると予測され、したがって前方や戦闘員において女性に対する敵対意識が強まるのではないかと考えられる。しかし、結果はその傾向を示さず、むしろ「真の男」意識が女性への敵対意識とつながるのは、後方や非戦闘員においてではあった。それは肉体的精神的試練が大きいほど、「真の男」は温情的セクシズムを肯定的に受容することを意味し、軍隊とくに前方のような厳しい経験をすることで、「真の男」としての自覚と責任意識が培われ、軍隊に來ない存在すなわち女性と子どもを「俺たちの国のおんな子ども」を守ることが国防意識の一面として意識されるようになったと考えられる。以上のように「真の男」への形成には、軍務の環境要因と訓練要因が作用していることが明らかになった。

一方、家父長意識は4つのグループに共通して、敵対的セクシズムと温情的セクシズムの両方に影響を与えている。“家族内のいっさいの権威は家父長にある”という考え方の持ち主は、伝統的な性役割の基準で女性を判断するため、両方の面でセクシズムの態度を取ると思われる。家父長意識は温情的セクシズムよりは、敵対的セクシズムにさらに強く現れた。

第5章 男子大学生の性役割観と軍務に対する態度 及びセクシズムに関する縦断的検討 —入隊前と除隊後の変化に注目して—

目的

韓国では軍務が子どもが大人になるための通過儀礼と見なされ、男の役割と責任を認識させる肯定的な経験として理解されてきた。韓国人の意識の中には、「男は軍隊に行ってこそ一人前」という考え方があり、軍務生活が自己発展の機会になると考える人も少なくない(Yoon Jaeson, 2004; 春木, 2000)。

一方では、軍務経験はヘゲモニー的男性性を養成して男性中心の権力志向的な社会を作る一因となり、弱い存在として扱われた女性は男性中心の社会から排除され家の中に閉じ込められたという否定的な評価もある。軍務に対して肯定的な評価をするにしても否定的な評価をするにしても、韓国社会のセクシズム問題の背景に軍事文化の影響が深く関与していることは否定できない。

ジェンダーの視点で書かれた研究の多くは、軍務に対する否定的な側面、つまり軍務が韓国男性と女性に及ぼす弊害に焦点を合わせて論究している(Yu Hyejeong, 2006; Cho Seongsuk, 1998; Kwon Insuk, 2009)。

しかし一般的には、軍務経験は男子を「一人前」にする、すなわち成人男子を真の社会の成員に成長させるものとして、肯定する意見が多数である。しかし、男子がそのような意味で一人前になるとは、国防および外敵から婦女子を守るという男性の役割を立派に果たすことを意味し、それはとりもなおさず、女性の役割を守られる者として規定することでもある。守る者—守られる者の関係は大人対子どもの関係と同様に、前者を社会的上位者、後者を社会的下位者として固定化することにもなりセクシズムを肯定・強化することにつながる。

本研究は軍務経験が男子大学生のセクシズムに与える影響について明らかにすることを目的としている。この章では、とくに軍務経験による「個人の変化」に注目する。韓国の大学は軍務を経験した後の男子学生の変化が見える空間である。入隊は人により異なるが、一般的には休学 → 入隊 → 復学というパターンが多い。入隊前と除隊後の縦断的調査を通して、軍務を経験することで、男子大学生の性役割観と軍務に対する態度及びセクシズムがどのように変化したかを検討する。次いで性役割観と軍務に対する態度がセクシズムに及ぼす影響がどう変わったかを検討することで軍務経験とセクシズムの関連について論じる。

Table 1. 対象者

Number	Age	大学・専攻	入隊時期	除隊時期	勤務地・軍務形態*
1	22	C大学・物理学科	201105	201302	前方・運転兵
2	23	C大学・物理学科	201102	201211	前方・戦闘兵
3	22	C大学・物理学科	201102	201301	海兵
4	22	H大学・国防科学技術学科	201103	201212	前方・戦闘兵
5	22	H大学・国防科学技術学科	201102	201211	前方・運転兵
6	23	H大学・国防科学技術学科	201101	201210	前方・戦闘兵
7	21	SK大学・流通情報学科	201102	201302	前方・戦闘兵
8	22	SK大学・流通情報学科	201102	201211	前方・戦闘兵
9	22	SK大学・流通情報学科	201103	201212	前方・戦闘兵
10	22	SK大学・英語学科	201103	201212	前方・運転兵
11	21	SK大学・社会福祉学科	201103	201212	後方・戦闘兵
12	23	SK大学・日本語学科	201106	201303	前方・行政兵
13	22	SK大学・英語学科	201105	201302	前方・戦闘兵
14	22	M大学・社会福祉学科	201101	201210	後方・行政兵
15	24	M大学・社会福祉学科	201106	201303	前方・戦闘兵
16	22	M大学・社会福祉学科	201104	201301	義務警察
17	21	B大学・英語学科	201106	201303	前方・戦闘兵
18	22	B大学・英語学科	201108	201305	前方・戦闘兵
19	22	B大学・英語学科	201106	201303	後方・技術兵
20	22	S大学・中語中文学科	201108	201305	前方・行政兵
21	22	S大学・中語中文学科	201109	201106	後方・行政兵
22	22	S大学・中語中文学科	201108	201305	前方・通信兵
23	22	S大学・中語中文学科	201102	201211	前方・行政兵
24	24	N大学・航空整備学科	201102	201302	後方・技術兵
25	23	S大学・神学科	201101	201210	後方・行政兵
26	22	N大学・パソコン学科	201105	201302	前方・戦闘兵
27	22	N大学・経営学科	201101	201210	前方・戦闘兵
28	21	M大学・警察行政学科	201110	201307	後方・運転兵
29	21	M大学・社会福祉学科	201111	201308	前方・戦闘兵
30	21	M大学・社会福祉学科	201110	201307	後方・通信兵
31	22	M大学・警察行政学科	201101	201210	後方・戦闘兵

表註：入隊時期・除隊時期の数字は西暦年号と月とあらわす。

* 軍務形態は、軍隊内担当役割を示す。

方法

対象者及び調査期間 2010年11月～12月，韓国のソウル市と天安市，慶山市所在の8つの大学に在学中で，2011年前半期に軍入隊を控えている128人の男子学生(平均年齢 19.7歳)を対象にした。そのうち，除隊後大学に戻った学生を2回にわたって追跡し(一回目:2013年3月，二回目:2013年9月)31名(平均年齢 22歳，SD 0.94)のデータを最終分析に用いた。現役で勤務した31名の除隊期間の範囲は2012年10月～2013年08月で，対象者は除隊後6ヶ月未満の時点で調査に応じた。調査に協力した学生には報償が与えられた。対象者に関する情報は Table 1 に示した。

調査内容

性役割観 第4章と同様に，韓国型性役割尺度(KSRI, 2006)の36項目，男性性18項目，女性性18項目の36項目を用いた。各項目に対して「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」までの7段階で求めた。

軍務に対する態度 「軍隊に行かない(行けない)人は，まだ未熟で何かが欠けている」「軍隊での厳しい訓練は社会経験に役に立つ」「軍務がただ時間をつぶす期間だとは思わない」「*2年という時間を軍隊で過ごすのは大きな損失であると思う」の4項目を用いた。このうち，*は逆転項目をしめす。回答は「全くそうは思わない」から「非常に当てはまる」までの5段階で求めた。

真の男 「男は軍隊に行ってこそ真の男になる」の1つ項目だけを用いて，5段階で評定するように求めた。

セクシズム 第3, 4章と同様に，セクシズム尺度はAn Sangsu et al.(2007)の韓国型多面性別意識検査24項目(敵対的セクシズム12項目・温情的セクシズム12項目)を使った。各項目に対して「全くそうは思わない」から「非常にそう思う」までの4段階で求めた。

結果及び考察

1. 項目の選定

項目の選定においては対象者の数が少ないため，因子分析はできず，尺度の項目をそのまま分析に用いた。各尺度について α 係数を用いて信頼性を検討したところ，Table 3 に示されるように，いずれの尺度についても利用に十分な値が得られた。各尺度の信頼性は入隊前と比べ除隊後の方が全体的に高くなった。

2. 入隊前と除隊後の性役割観と軍務に対する態度及びセクシズム

まず，軍務の前後別に性役割観，軍務に対する態度，「真の男」及びセクシズムの平均と標準偏差を求めた(Table 2)。性役割観の男性性では，入隊前の平均値 76.22，標準偏差 11.66 であった。他方除隊後の平均値は 83.23，標準偏差 13.38 であった。対応のある t 検定で軍務前後の変化を

検討したところ、有意な差が認められ、入隊前より除隊後の男性性が高かった ($t = -3.40, df = 30, p < .001, d = -.54$)。性役割観の女性性においては、入隊前の平均値が 77.66、標準偏差 10.47 であった。除隊後ではそれぞれ 85.00、11.90 となり、入隊前に比べて有意に高かった ($t = -4.15, p < .001, d = -.66$)。性役割観においては男性性と女性性共に入隊前より除隊後が高くなっていた。

軍務経験は男子大学生の性役割観を高めることが明らかになったが、その変化は男性性だけでなく、女性性にもあることに注目しなければならない。これまで多くの研究者が軍務経験は男性の男性性(男性性)と強め、女性性(女性性)を弱めると指摘してきた(例えば, Kwon Insuk, 2004; Lee Migyeong, 2003; Kim Hyunok, 2002)。したがって、本研究においても、軍務経験は男の男性性(男性性)を強める一方、女性性(女性性)を弱めると予想していたが、結果は、女性性は減少ではなくかえって増加したことを示した。

軍隊は個人主義 (Individualism) が許される場所ではない。寝食をともにする共同生活を営むだけでなく、まさに戦闘をも想定した厳しい訓練を受ける。場合によってはともに命に関わる極限状況に置かれることもあり得る。自らの命を守るためにも、人と人との関係と相互依存性を重視せざるを得ず、また軍隊はそれが要求される集団主義 (Collectivism) の強調される場所であるのだ (Son So otac, 1998)。それゆえ他者との関係の持ち方に関する特性である女性性が、軍隊での様々な人間関係(仲間・上級者・下級者)を通して発達したのではないかと考えられる。軍務の内容は男性性を、軍務の状況は女性性を増加するのである。

次に軍務に対する態度である。軍務を肯定する態度においては、入隊前の平均値が 14.50、標準偏差 4.21 であった。除隊後ではそれぞれ 18.06、3.87 であった。そこに有意な違いが認められ ($t = -5.02, p < .001, d = -.88$)、入隊前より除隊後が肯定的な態度を示した。つまり、軍務経験者は、軍隊での 2 年という時間は人生の無駄だとは思わず、厳しい訓練は社会経験に役に立つとして肯定的に評価した。

さらに「真の男」にも軍務前後の差が現われ ($t = -2.75, p < .05, d = -.60$)、入隊前(平均値 3.03、標準偏差 1.28)より除隊後(3.78、1.21)の方が男は軍隊に行ってこそ「本物の男」になると考えていた。

最後にセクシズムの差について検討する。敵対的セクシズムでは、入隊前の平均値は 27.16、標準偏差は 5.33 であった。他方除隊後ではそれぞれ 25.78、5.53 であり、その差は認められなかった ($t = 1.11, n.s.$)。温情的セクシズムにおいては、入隊前の平均値は 34.28、標準偏差が 4.77、除隊後ではそれぞれ 34.66、6.08 であり、敵対的セクシズムと同じように有意な差は見られなかった ($t = -.39, n.s.$)。セクシズムにおいては軍務前後の変化がないといえる。

Table 2. 性役割観、軍務に対する態度及びセクシズムにおける軍務前後女別平均値と標準偏差

	入隊前		除隊後		<i>t</i>	<i>d</i>
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>		
男性性	76.22	11.63	83.28	13.38	-3.40***	-0.54
女性性	77.66	10.47	85.00	11.90	-4.15***	-0.66
軍務態度	14.50	4.21	18.06	3.87	-5.02***	-0.88
真の男	3.03	1.28	3.78	1.21	-2.75*	-0.60
HS	27.16	5.33	25.78	5.53	1.11	
BS	34.28	4.77	34.66	6.08	-0.39	

* $p < .05$, *** $p < .001$, HS: 敵対的セクシズム, BS: 温情的セクシズム

3. 入隊前と除隊後による各尺度間の関連

「性役割観、真の男、セクシズムの各因子」の関係を検討するために、軍務前後別の相関分析を行った。結果はTable 3 に示した。まず、入隊前は男性性と「真の男」との間に弱いながら正の相関が見られた($r = .32, p < .05$)。入隊前の男性性と敵対的セクシズムにも有意な正の相関が見られた($r = .37, p < .05$)。それに対して除隊後には男性性と女性性の間($r = .37, p < .05$)、「真の男」と温情的セクシズムの間に有意な正の相関が見られた($r = .31, p < .05$)。この結果から、入隊前は男性性が男の優越性を強調する敵対的セクシズムとの関係に反応したのに対し、除隊後にはこのような関連が減少し「真の男」が弱い女性を守ろうとする温情的セクシズムに関連を示したことがわかる。

Table 3. 軍務前後の相関結果(n = 31)

軍務前	女性性	真の男	HS	BS	α
男性性	.25	.32*	.37*	.13	.81
女性性		-.04	-.01	-.12	.73
真の男			.17	.24	.74
HS				.10	.84
BS					.79
軍務後	女性性	真の男	HS	BS	α
男性性	.37*	.20	.19	.18	.89
女性性		.21	.30	.15	.80
真の男			.17	.31*	.78
HS				.16	.86
BS					.86

* $p < .05$ HS: 敵対的セクシズム, BS: 温情的セクシズム

4. 入隊前と除隊後の性役割観と「真の男」がセクシズムに与える影響

性役割観と「男は軍隊に行ってこそ真の男になる」という考え方がセクシズムに与える影響を検討するために、軍務前後別共分散構造分析によるパス解析を行った。結果はFigure 1, Figure 2に示した。

入隊前の男子学生の男性性は「真の男」($\beta = .49, p < .01$)と敵対的セクシズム($\beta = .40, p < .05$)にそれぞれ有意な影響を及ぼした。それに対し、除隊後の男子学生の男性性は「真の男」と敵対的セクシズムへの影響がなかった。また、入隊前の女性性は「真の男」に対し負の影響を及ぼしたが($\beta = -.40, p < .05$)、除隊後は「真の男」への女性性の影響力がなくなっていた。「真の男」においても、敵対的セクシズムと温情的セクシズム両方に影響を及ぼした入隊前と違って、除隊後には敵対的セクシズムへの影響がなくなり、温情的セクシズムにだけ影響を及ぼしていた($\beta = .42, p < .01$)。

入隊前の男性性が「真の男」と女性への敵対的セクシズムに正の影響を与えたのは、男の優越感や軍務を負担しない女性への批判的視線を示す結果であると思われる。また、入隊前の女性性が「真の男」に負の影響を与えたのは、未経験者の軍務に対する不安や負担感が表れた結果ではないかと考えられる。しかし、除隊後は男性性と女性性の得点が入隊前より増加したにもかかわらず、セクシズムに対する影響が見られなかった。「真の男」だけが温情的セクシズムに影響を及ぼしている。

軍務未経験者は「本物の男」の意味がまだ「わかっていない」と考えられる。これから自分が直面するようになる苦難についてのみ目が向いているが、その苦難の期間を経験した後は、「男としての責任と役割」を認識するようになる。そこに人間としての成長を感じとる人も多いのだろう。

男子大学生が入隊するのは、自我同一性(アイデンティティ)を確立する青年期から初期成年期に移行する時期である。このような発達段階で‘軍の服務’という極めて非日常的な経験は、この経験を肯定的に受け止めるか否定的に受け止めるかは別として、自分の新しい姿を見つけて個人が成長する機会にはなると思われる。

韓国社会では軍務経験を通して得られる「真の男」に「守る者」「保護者」としての意味を付与し、「男らしさ」を磨き上げる経験として考えられてきた。しかし、それは「守る者としての強き男」、「守られる者としての弱き女」というジェンダーとパワーの結びつきを促進し、男女の役割と地位の固定化・強化につながるのではないかと。そして、女性が「守られる者としての弱き女」の役割と地位を乗り越え、自ら自立した女性になろうとすることに妨害要因として働くと考えられる。女性が社会の中で自らの人生を男性に依存せずに生きることを望み「守られる者」としての役割を引き受けなければ、男性の「守る者」としての役割が成立しなくなるからである。他方、軍事分界線の北にはいまだ「戦

争」状態にある国が広がっており、社会は国防の観点から「守る者」としての男性の役割を絶対的に必要とする。それゆえ、韓国社会は命を張って国を守り、そこに暮らす子どもを守ることに大きな価値を置き、軍務に従事する男と女を重なりあうことの程度が少ない異なる存在として性に基づいた役割が肯定され、「真の男」になることは自立した大人(=男性)になる成熟として積極的に評価してきた。国防という側面だけを他の社会生活全般から切り離すことは困難であり、結果として軍務以外の種々の側面でのセクシズムを肯定することになると考えられる。軍務を通して養成される「真の男」としての責任と役割は、社会の重要な意思決定や政策執行などの公的領域から恋愛関係家族関係などの私的領域に至るまでの広範な領域において、女性を男性によって「守られる者」として固定化し二流市民に貶めることにつながっている。

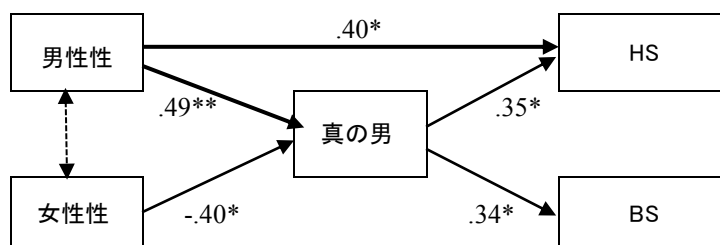


Figure 1. 入隊前の男子学生の性役割観と「真の男」がセクシズムに与える影響

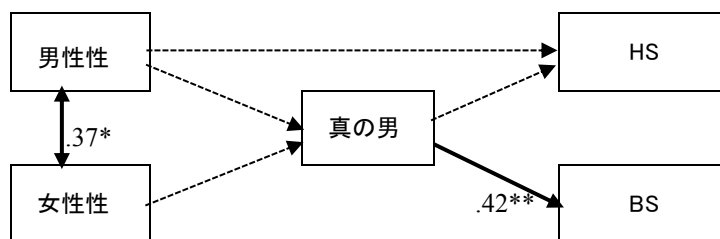


Figure 2. 除隊後の男子学生の性役割観と「真の男」がセクシズムに与える影響

<まとめ>

この章では、軍務経験による「個人の変化」に注目し、入隊前と比べて除隊後における男子学生の性役割観と軍務に対する態度及びセクシズムがどのように変化したかについてを検討した。その

結果は次の通りである。1. 男子学生の性役割観が入隊前より除隊後が高くなり、2. 軍務に対し、「真の男」に対する態度も肯定的になった。3. 入隊前の男子学生の男性性は「真の男」と敵対的セクシズムに有意な影響を及ぼしていたが、除隊後にはその影響力がなくなった。4. 入隊前の女性性は「真の男」に対し負の影響を及ぼしていたが、除隊後はその影響がなくなった。5. 「真の男」は、敵対的セクシズムと温情的セクシズム両方に影響を及ぼしていた入隊前と違って、除隊後には敵対的セクシズムへの影響がなくなり、温情的セクシズムにだけ影響を及ぼしていた。これらの結果は、軍務経験は男子学生の「男らしさ」を高め、それが男女の役割観を強固にし、女性を男性の保護が必要な弱い存在と見なす温情的セクシズムの形成につながることを示唆している。

第Ⅲ部 総括

第6章 研究の全体的考察及び今後の課題

第6章 研究の全体的考察及び今後の課題

セクシズムは抽象的な問題ではなく、差別を受ける側にいるのか差別する側に立っているのかの違いはあれ、実際に多くの女性と男性が直面している現実的な問題である。なぜセクシズムが存在するのか、なぜセクシズムがなかなかなくなるしないのは、社会の主導権を握っている男性の側にジェンダーに基づく偏見が根強いからだともいわれる(伊藤, 2011)。男性が権力を握っている社会では、女性は対等な者と見なされていない。女性を低い地位にある弱者とみなし、パトロン的行動によって女性を守ろうとし、相対的に男性の地位の優位性を確認する(Vescio et al., 2005)。韓国社会にあつて「軍務経験」は「強い男」に生まれ変わるための必須条件であり、男の権威を獲得できる重要な手段である。

韓国は、世界で唯一の分断国家であり、徴兵制を選択している数少ない国の一つである。「北朝鮮との政治的関係」「戦争勃発の可能性」という現実的な状況は、莫大な費用と国民の犠牲が求められるにもかかわらず、今でも徴兵制が批判なく維持されている理由であり、この厳しい状況は韓国人の意識と文化に大きな影響を与えている。

多くの韓国人の意識の中には“男は軍隊に行つてこそ真の男になる”という考え方が一般的で普遍的なイデオロギーとして存在しており、「軍隊に行く」という条件と「真の男になる」という結果が不可分の関係で捉えられている。つまり軍務経験の有無を判断基準とする差別化が存在し、軍務を通して期待されるようになる「真の男」が持つ意味を極めて大きなものにしていくということであり、相対的に女性の地位を低く見なすことにつながっている。

本研究は韓国社会のセクシズムの問題は、軍務を経験する中で作られた価値観や社会意識である軍隊文化の影響を抜きにしては考えられないという前提のもとに、軍務経験が、男子大学生の性役割観と女性に対する敵対的セクシズムと温情的セクシズムに与える影響を検討し、韓国社会のセクシズムの様相と特質について論じた。

まず、研究の結果を要約すると、第3章の研究1では、韓国人の両価的セクシズムと特徴を分析し、韓国人の性役割固定観念と軍務態度や経験がどのような形で関連するのかを検討した。その結果、女性への敵対的セクシズム(敵対的セクシズム)は若年層ほど低い傾向を示しているのに対して、温情的セクシズム(温情的セクシズム)はすべての年代でほぼ同じ水準であることが判明した。また性別や年代や軍務経験の有無に関係なく、男性が軍務経験を通じてよい(韓国男性)社会人となるという期待が高ければ高いほど、女性に対する温情的セクシズムも強くなることが明らかにされた。つまり軍務経験と軍務に対する肯定的態度がセクシズムとくに温情的セクシズムと関係し

ていることが示唆された。

研究2では、徴兵制のない日本と徴兵制のある韓国の男子大学生の性役割観と性役割態度及びセクシズムの様相について検討した。結果は韓国の男子学生は日本の男子学生より、強い性役割観と女性への温情的セクシズムを持っていることが判明した。また韓国の男子学生の性役割態度は、伝統的な性役割に従わない女性への否定的に評価につながっていた。韓国と日本はどちらも女性の地位が低く、儒教などの文化でも共通性があるとの仮定に立ち、性役割観とセクシズムにおいて韓国が日本より高く現れたことに対して、韓国の兵役との関連性の点から考察が加えられた。

第4章の研究3から研究5までは、韓国大学生を対象に調査を実施したものである。研究3では、軍隊を経験していない男女大学生の性役割観と家父長意識、軍務に対する態度、そしてセクシズムの違い、および性役割観と家父長意識、軍務に対する態度がセクシズムに及ぼす影響について検討した。結果は、男子の方が女子より家父長意識と敵対的・温情的セクシズムのいずれにおいても高得点を示した。軍務を肯定する態度においては性差は認められなかったが、軍務否定的態度は男子の方が女子より強かった。つまり「男は軍隊に行ってこそ一人前」「国防の義務を果たしてこそ韓国の男」という意識があり、軍務生活を通じて家族への愛や責任感、自立心など多くのことを体得することができるという軍務を肯定的に捉える態度は性別を超えて見られ、広く浸透している態度であることが示された。しかし男子大学生の場合、軍務は自分が実際に経験しなければならないものであり必要とは考えつつも同時に負担とも感じている。それが軍務を負担しない女性へ、温情的セクシズムよりもまず、あからさまでネガティブな態度である敵対的セクシズムとしてあらわれている可能性が示唆された。

研究4では、軍務経験の有無による違いを明らかにするために、どちらも大学生でありながら既に軍務を経験した男子とこれから入隊する未経験男子に区分し、その2つの集団間の性役割観とセクシズムにおける違いと、軍務経験が性役割観と女性に対する 敵対的セクシズムや温情的セクシズムに与える影響力について検討した。その結果、軍務経験者の方が未経験者より強い男性性を持っていることが明らかになった。しかし軍務経験者の敵対的セクシズムは、未経験者より有意に低かった。軍務経験後、女性を敵対対象と見るより、保護対象として認識するようになった可能性が示唆される。

研究5では、軍隊の何が軍務態度とりわけ「真の男」を養成するという意識を作り出すのかを明らかにするために、軍務の環境要因並び訓練要因の違いに着目して検討した。その結果、「真の男」意識に、軍務の環境要因や訓練要因が関連していることが明らかになった。厳しい環境と訓練という条件に耐えた前方の戦闘兵は、男性性が「真の男」意識を通して温情的セクシズムに影響を与えるが、軍務の条件が比較的緩やかな後方の非戦闘兵の場合は、軍務経験がない男子大学生と大

きな差がなかった。肉体的精神的試練が大きいほど、「真の男」意識は温情的態度を肯定的に受容することを意味し、軍隊とくに前方のような厳しい経験をすることで、「真の男」としての自覚と責任意識が培われ、軍隊に関与しない存在すなわち女性・子どもを守ることを国防意識の一面として意識するようになると考察した。

第5章では、軍務経験による個人内の変化に注目して、入隊前と約2年間経過の除隊後の2度にわたり縦断的調査を実施し、性役割観と軍務に対する態度及びセクシズムがどのように変化したかについて検討した。その結果、男子学生の性役割観は入隊前より除隊後で高くなり、軍務に対する態度も肯定的になっていた。入隊前の男性性は「真の男」意識と敵対的セクシズムに有意な影響を及ぼしていたが、除隊後にはその影響力が消え、入隊前の女性性は「真の男」意識に対し負の影響を及ぼしていたが、除隊後はその影響が消えた。また「真の男」意識は、敵対的セクシズムと温情的セクシズム両方に影響を及ぼしていた入隊前と違って、除隊後には敵対的セクシズムへの影響がなくなり、温情的セクシズムにだけ影響を及ぼしていたことが明らかになった。これらの結果は、軍務経験は男子学生の「男らしさ」を高め、女性を男性の保護対象と見なす温情的セクシズムの形成につながることを示唆している。

これらの6つの研究を通して、韓国のセクシズムが固定化され維持されるメカニズムを徴兵制という社会的観点を切り口とした実証的調査研究によってその一端を明らかにした。その結果、韓国の男性が国防の任を負う強く立派な男と見なされ扱われ、それは軍務に就くことで仕上げられると考えられ、その裏返しとして女性を守られるべき存在とみなす温情的セクシズムがあること、そしてそれは兵役に行かない女への敵対的セクシズムを凌ぐほどであることを示した。

本研究の意義は以下のようである。

これまでのジェンダー研究は個人レベルの問題に焦点を当てたものが多かった。しかし、本研究では、セクシズムが国家や社会の有り様と関係していることを明らかにし、ジェンダー問題を考えるには、より大きなマクロ的視点が必要であることを新たに提起した。すなわち韓国におけるセクシズムには韓国が置かれている政治状況とそれに対応する国の仕組みや政策や社会意識が大きな関わりを持っているという点である。

軍事分界線(休戦ライン)を挟み戦争状態にある2つの国が隣接しているという状況下にあって、韓国は国防を重要な課題としており、男性は「自分たちの国土と女子供」を守ることを使命として担わされ軍務に就く。それを社会的に与えられた役割として意義づけ、その役割を果たすことが「一人前の男」「真の男」になることであるとの自覚を持たされる。その過程で女性を、守ってやらなければならない一段低く弱い存在とする意識が形成され、男女の役割と地位を固定化し強化することに

つながっている。これが韓国においてセクシズムを生む基本的なメカニズムである。

韓国社会では軍務経験を通して得られる「真の男」に「守る者」「保護者」としての意味を付与し、軍務を「男らしさ」を磨き上げる場として考えてきた。しかし、それは「守る者としての強き男」と「守られる者としての弱き女」というジェンダーとパワーの結びつきを促進し、男女の役割と地位の固定化と強化につながり、女性が「守られる者としての弱き女」の役割と地位を乗り越え、自ら自立した女性になろうとした時に妨害要因として働くことになる。女性が社会の中で自らの人生を男性に依存せず生きることを望み「守られる者」としての役割を放棄したなら、男性の「守る者」としての役割も成立せず、その優位性も主張できなくなるからである。

意義の2点目は、セクシズムは一般に言われるような女性に対する敵対視だけでなく、むしろ男性が女性に示す優しさや好意の中に潜んでいることを示した点である。またこの優しさや好意の基底には軍務に対する肯定的な態度に通じる考え方が働いていることを明らかにした。

徴兵制をジェンダーの視点で分析した研究の多くは、軍務の否定的な側面、つまり軍務が韓国男性と女性に及ぼす弊害に焦点を合わせている。しかし一般的には、軍務経験は成人男子を真の社会の成員に成長させるものとして、肯定する意見が多数である。本研究では、軍務に対する肯定的な評価の基底にセクシズムがあり、軍務を通して期待されるようになる「真の男」が持つ意味を極めて大きなものにしていくことを明らかにした。特に、女性への温情的セクシズムは“男は軍隊に行ってこそ真の男になる”という考え方と非常に密接な関係にあった。男性の軍務に対して肯定的な態度を持つ人は温情的セクシズムを差別の概念で認識せず、むしろ、肯定的に見て受け入れるようになる。韓国人が考える「人生の目標が明確」で「誠実」で「信頼に値する」「責任感が強い」「本物の男」という期待の中には男女の役割と地位の差を是認し支持するという意思を含んでいる。

意義の3点目は、軍務経験が男性性だけでなく、女性性の強化にも作用していることを明らかにした点である。軍務経験が男性の男性性(男性性)と強め、女性性(女性性)を弱めることは、これまで多くの研究者が指摘し、常識的なレベルとしても受け入れてきた内容であったが、結果は、女性性は減少ではなくかえって増加したことを示していた。

Kwon Insuk (2005)は、“軍隊は、女性とは違う、男性にのみ求められる社会的役割を規定し課すことによって成り立つ特殊な環境である。そこでは辛い軍事訓練を耐え抜くために強い男として全力を傾けなければならない、そのために男性は守護者としての意味を付与され、女性を保護される存在、弱い存在として具現化する”と指摘している。軍人は「家の女たち」を守るという理由で戦う。男性性は軍人にとって必要な資質であり何より軍隊では強い男に生まれ変わることを求め、また、そのように肉体的・精神的な訓練を受けるので、軍務経験は男性性を強める重要な要因として作

用すると考えられる。

一方、女性性は兵営生活の中で発達する。軍隊は個人主義が許される場所ではない。寝食をともにする共同生活を営むだけでなく、まさに戦闘をも想定した厳しい訓練を受ける。場合によってはともに命に関わる極限状況に置かれることもあり得る。自らの命を守るためにも、人と人との関係と相互依存性を重視せざるを得ず、また軍隊はそれが要求される集団主義の強調される場所である。それゆえ他者との関係の持ち方に関する特性である女性性が、軍隊での様々な人間関係を通して発達したのではないかと考えられる。軍務の内容は男性性を、軍務の状況は女性性を増加したと考えられる。

最後に、「真の男」への形成には、軍務の環境要因と訓練要因が作用していることも見逃してはならない。厳しい環境と訓練という条件に耐えた前方の戦闘兵は、男性性が「真の男」を通して温情的セクシズムに影響を与えるが、軍務の条件が比較的緩やかな後方の非戦闘兵の場合は、軍務経験がない男子大学生と大きな差がなかった。劣悪な環境と厳しい訓練が国防意識と同時に男としての責任感をも強くし、女性に対する態度の変化にも影響を与えたと考えられる。それらは一般社会から孤立した空間での見知らぬ人々との強制的な共同生活・自由の統制・厳しい肉体的訓練という条件の中で生まれたと考えられる。

残念ながら、韓国社会ではセクシズムが深刻な人権問題として認識されていない。セクシズムの根本的な解決が難しいのは、「男とはこういうもの」とか「女だからこうだろう」という性別(ジェンダー)による決めつけがあり、男性が主役で女性はサポート役というジェンダーの構造が社会を支配しているからである。両価的性差別主義の理論によると、男性は、女性は身体的・精神的に劣っているというステレオタイプを信じるほど、男性自身による支配を正当化することができるとする。家父長的思考はその典型である。家父長制の男尊女卑の文化の中で成長した男性たちが、社会の核心的な役割を担当する地位にいる限り、そして性別分業を正当化し維持することになる徴兵制が存在する限り、真の意味の男女平等ははるか遠いと思われる。

“女性が果たして弱者か”との反論を提起したPark Kyungbeom(2005)は、平等を論じるには女性も軍隊に行かなければならないと主張する。韓国は、権力の頂点にある政治家が男女の差別問題を軍隊に行くか行かないかに関連させて取り上げ、女性の出産と男性の軍務を同一視する議論がまかり通っている社会である。男性は義務兵役と産業経済建設を担当し、女性は家事と育児に専念する主婦に分離する近代的性別階級秩序が確立された1970年代の家父長的发展国家のモデルを今も適用している。これが2014年現在、韓国社会の現状である。

このような社会観や価値観が、近年男性たちの女性に対する敵対意識や嫌悪感を増幅している。かつては家事だけをしていた女性が、積極的に社会に進出することで男性の地位が脅かされるの

ではないかという危機意識と、制度的差別が解消され女性に対する差別はもう過去のことであるという“錯覚”が背景にあると考えられる。男性たちの主張は、大統領まで女性になったというのに、なぜセクシズムが論議されるのかということであり、底辺にある女性たちの実態や社会に進出した女性たちの頭上にある“ガラスの天井”は言葉どおり見えず、認識しづらいものであるため男性たちには一層体感し難いのだ。

しかし、その男性たちもセクシズムの被害者であることには変わらない。家父長社会では、男性は女性を扶養して保護しなければならない責任を持たされ、そこに負担を感じているが、無言の圧力として絶えず作用する社会通念に従わざるを得ない。デート費用を男が負担することに対して不当さを感じながらも、‘男らしくない’行動だと考えるので堂々と言葉にできない。インターネット上でしばしば登場する“キムチニョ(キムチ女)”という新造語は、あからさまに不満を表出できない男性たちの感情が反映されたものである。キムチ女は、過度に依存的な女性、お金を目的に男女交際をする女性、過度な整形手術で非現実的な容貌を持つ女性、身分不相応に贅沢な女性、礼儀を知らない女性など節操がない韓国女性を通称する言葉として使われている。キムチ女のような女性を嫌悪する現象は、女性だけでなく男性も家父長社会の被害者になり得ることを示している。

また女性を家庭に押しとどめた代償として男性は一家を背負う存在として非人間的な長時間労働や過密労働も受け入れて当たり前という風潮に飲み込まれている。女性の低賃金を仕方ないと考え非正規労働など劣悪な雇用条件下に置かれることを是認する社会にあっては男性自身の賃金の上昇も望めないし雇用条件の切り下げにも抵抗できない。女性への差別を容認し人権を軽視する社会は男性の人権をも守れない社会である。

男性たちは自分たちが持つ権力に対して不安を感じている。女性に対する敵対的セクシズムは、全面的に権力を掌握できない男性たちの劣等感のためかも知れない。男性は強くて主導的であり積極的であってこそというステレオタイプによって、多くの男性たちが強い女性と共に生活することに困難を感じている。今や、差別を受ける女性だけでなく、差別を感じている男性にも注目しなければならない。

Jung Huijin(2013)が指摘した通り、セクシズムが人権問題として認識されるためには、社会の基本秩序に対する根本的な問題提起が避けられない。国家主義・民族主義・家族主義など男性中心の共同体的秩序が強い韓国社会で女性が権利を獲得する問題は、即ち共同体に対する攻撃であると解釈されるためである。

男女の格差を解消し平等社会を実現するためには、人々が有するセクシズムの考えを解消しなければならないが、男性中心のイデオロギーを具現し、再生産する徴兵制という存在が社会システムの中心を占めている韓国社会ではセクシズムを知覚することすら容易いことではない。徴兵制を

停止し募兵制を選択する方法も、多数の支持を受けた議論であるが、実現するには時がまだ早いと言われている。

セクシズムは、女性自身の意識が問われる問題でもある。女性が男性同等の経済的・社会的な成果を享受している国々では、両価的性差別主義は低い(Glick et al., 2001)。男性の女性に対する怒りは、女性の‘両面的態度’にある。つまり女性は、表は男女平等を唱えているが、裏では男性に依存する受動的な存在として自分たちを認識している傾向が強い。両価的性差別主義はこの面についてはっきり指摘している。女性もまた、男性と良好な関係を維持する手段として温情的セクシズムを受け入れ、自分たちをステレオタイプ的に見ている。多くの韓国の女性は自ら自立した女性になろうと考えず、「守られる者としての弱き女」の役割と地位に満足している。今韓国社会では男性の家父長的な保護意識と女性の男性依存的な思考が葛藤している。真の意味での男女平等はその関係を乗り越えられるかどうかにかかっている。

本研究の限界と今後の研究のための提案は次の通りである。1つは、3つの下位概念で構成されている両価的性差別主義尺度を、本研究では、敵対的セクシズムと温情的セクシズムの2つだけを用いたことである。確認的因子分析の結果が示した下位項目の内容と元の尺度が示す項目の内容が一致しなかったのが一番大きい理由であったが、それぞれの項目を分けることによって意識の変化や違いが見えてくる。例えば、温情的セクシズムでも、保護的父性主義・補完的性役割分化・親密な異性愛の3つの概念があり、どの部分に変化があったのが、どこに差があったのかを検討することで一層詳しい解析ができると思われる。

また、本研究の主な対象者の年齢層は、大学に入学したばかりの男子大学生から除隊し大学に戻ってきたばかりの男子大学生である。異性経験が多いとはいえず、また女性がいない軍隊の中で生活してきた男性は、女性に対する憧れがあり、ロマンチックな関係を頭に描いて女性を見、女性の歓心を買うため積極的なパトロン的行動をすることも考えられる。しかし、年齢が高くなるほど異性と交流する機会も増え、異性に対する価値観と態度が変わる可能性があり、この点を明らかにするためには追加的な研究が必要である。また敵対的・温情的セクシズムの下位概念が変わっていく可能性も考えられる。

2つ目は、本研究では軍務経験と軍務に対する肯定的な認識が韓国人のセクシズムに影響を及ぼす重要な変数であることを明らかにしたが、あくまでも男性の経験と立場を中心に検討した。セクシズムの問題は女性の問題でもあり、女性の立場から見直す必要がある。特に女性の依存性は温情的セクシズムの重要なキーワードになり、敵対的セクシズムとは全く異なる特徴を持っている。

世界の趨勢を見ると、「あからさまな」セクシズムである伝統主義的性役割態度を示すものは減

少しており、女性への敵対的セクシズムは徐々に減少していく傾向にある。それは韓国社会でも例外ではなかった。韓国人は温情的セクシズムを性差別的な概念として認めていないことが明らかで、女性の温情的セクシズムのメカニズムをさらに検討する必要がある。

3つ目は、軍務に対する態度を肯定的で穏健な側面においてだけ評価したが、このような質問項目選定の問題が温情的セクシズムにだけ関係が現れた結果になったことも考えられ、軍務に対する否定的で極端な側面も考慮して敵対的セクシズムとの関係を検討する必要があると思われる点である。

参考文献

- Alonso, H.H. (1993). *Peace As a Women's Issue: A History of the U.S. Movement for World Peace and Women's Rights*. Syracuse University Press.
- An Sangsu, Kim Hyesuk, An Miyoung (2005). A Study on the Development and Validation of Korean Ambivalent Sexism Inventory. *Korean Journal of Social and Personality Psychology*, **19(2)**, 39-66.
안상수, 김혜숙, 안미영 (2005). 한국형 양가적 성차별주의척도(K-ASI) 개발 및 타당화 연구. *한국심리학회지: 사회 및 성격*, 19(2), 39-66.
- An Sangsu, Back Yeongju, Kim Insuk, Kim Hyesuk, Kim Jinsil (2007). 韓国型多面性別意識檢査開發および妥当化研究. 韓国女性政策研究院, 研究報告書(17).
안상수, 백영주, 김인숙, 김혜숙, 김진실 (2007). 한국형다면성별의식조사개발 및 타당화 연구. 한국여성정책연구원, 연구보고서.
- An Sangsu (2007). Issues and Men's Attitude on the Compensation Policy of the Veteran. *フェミニズム研究*, 7(2), 321-349.
안상수 (2007). 군가산점제 부활논쟁과 남성의 의식. *페미니즘연구*, 7(2), 321-349.
- An Sangsu (2008). 性平等意識の過去と現住所 ジェンダーレビュー. 9, 61-71.
안상수 (2008). 성평등의식의 과거와 현주소. *젠더리뷰*, 9, 61-71.
- Arkin, W., & Dobrofsky, L. R. (1978). Military socialization and masculinity. *Journal of Social Issues*, **34(1)**, 151-168.
- Ashmore, R.D., Del Boca, F. K., & Wahlers, A.J. (1986). Gender stereotypes. R.D. Ashmore & Del Boca (Eds.). *The social psychology of female-male relations: a critical analysis of central concepts*, New York, Academic Press.
- Bae Eunkgyoong (2002). 軍加算点論争の様相と争点, 女性と社会, 11, 92-114.
배은경 (2002). 군가산점 논란의 지형과 쟁점. *여성과 사회*, 11, 92-114.
- Barreto, M., Ellemers, N. (2005). The burden of benevolent sexism: How it contributes to the maintenance of gender inequalities. *European Journal of Social Psychology*, **35**, 633-642.
- Beere, C. A., King, D. W., Beere, D. B., & King, L. A. (1984). The Sex-Role Egalitarianism Scale: A measure of attitudes toward equality between the sexes. *Sex Roles*, **10**, 563-576.
- Berscheid, Ellen; Snyder, Mark; Omoto, Allen M. (1989). The Relationship Closeness Inventory: Assessing the closeness of interpersonal relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **57(5)**, 792-807.
- Burt, M. R. (1980). Cultural myt 敵対的セクシズム and supports of rape. *Journal of Personality and Social Psychology*, **38**, 217-230.
- Byun Hwasun (1995). 家父長的軍事文化が女性の人生に及ぼした影響. 女性研究, 48(9).
변화순 (1995). 가부장적 군사문화가 여성의 삶에 끼친 영향. *여성연구*, 48(9).
- Campbell, Bernadette E. Glenn Schellenberg, & Charlene Y. Senn. (1997). Evaluating Measures of Contemporary Sexism. *Psychology of Women Quarterly*, **21**, 89-102.
- Chang Pilhwa, Cho Hyeong (1991). Sexuality in Korea: Sexuality Culture of Korean Men. *Women's Studies Review*, **8**, 127-170.
장필화, 조형 (1991). 한국의 성문화 -남성성문화를 중심으로-. *여성학논집*, 8. 127-170.
- Chang Yongseon (1991). 軍務が青少年に与える影響. 青年研究, 14, 23-67.
장용선 (1991). 군복무가 후기청소년에게 미치는 영향. *청년연구*, 14, 23-67.

- Chen, Zhixia; Fiske, Susan T.; Lee, Tiane L. (2009). Ambivalent Sexism and Power-Related Gender-role Ideology in Marriage. *Sex Roles*, **60** (11–12), 765–778.
- Chisango, T. & Javangwe, G. (2012). Are People Better at Recognizing Ambivalent Sexism on the Basis of the Non-standard Profiles than the Standard ASI Ones? *Sex Roles*, **67**, 69–82.
- Cho Joo Hyun (2003). Veterans' Extra Point System Gender Politics: From the Perspective of Capabilities Approach. *Korean Journal of Women's Studies*, **19**(1), 181-208.
조주현 (2003). 군가산점제 논란과 젠더정치: 가능성 접근법의 관점에서. *한국여성학*, **19**(1), 181-208.
- Cho Seongsuk (1997). 軍隊と男性. 韓国社会学会後期社会学大会発表文, 220-225.
조성숙 (1997). 군대와 남성. *한국사회학회후기학술대회발표집*, 220–225
- Cho Yongbeom (2005). 兵營と韓国男性の心理報告書. ハンギョレ: 探查企画, 2005年11月1日.
조용범 (2005). 병영과 한국남자 심리학보고서. *한겨레:담사기획*, 2005년 11월 1일.
- Cho Hyeja (2001). Gender Stereotype Why not disappear? *Korean Journal of Psychology and Women*, **6**(3), 107-125.
조혜자 (2001). 성고정관념 왜 끈질긴가? *한국심리학회지 여성*, **6**(3), 107–125.
- Cikara, M. & Fiske, S.T. (2007). Cooperation? Consent: How Women React to their Place, based on Social Relations and Ambivalent Sexism. *Social Psychology of Gender (Advances in Group Processes)*, **24**, 99-122.
- Conn, A. B.; Hanges, P. J.; Sipe, W. P.; Salvaggio, A. N. (1999). The Search for Ambivalent Sexism: A Comparison of Two Measures. *Educational and Psychological Measurement*, **59** (6), 898–909.
- Connelly, K.; Heesacker, M. (2012). Why is Benevolent Sexism Appealing? Associations with System Justification and Life Satisfaction. *Psychology of Women Quarterly*, **36** (4), 432–443.
- Crandall, C. S., D'Anello, S., Sakalli, N., Lazarus, E., Nejtardt, W. G., & Feather, N. (2001). An attribution-value model of prejudice: Anti-fat attitudes in six nations. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **27**, 30-37.
- Deaux, K. & Lewis, L. (1984). Structure of gender-stereotypes: Interrelationships among components and gender label. *Journal of Personality and Social Psychology*, **46**, 991-1004.
- Deaux, K. (1993). Reconstructing social identity. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **19**(1), 4-12.
- Deaux, K., & Snyder, M. (2012). *Handbook of Personality and Social Psychology*. New York: Oxford University Press.
- Dreyer N., Woods N., James S.A. (1981). ISRO: A Valid Scale for Measuring Sex Role Orientation: Sex Roles. *A Journal for Research*, **7**, 173-182.
- Dumont, M., Sarlet, M. & B., Dardenne (2010). Be kind to a woman, she'll feel incompetent: benevolent sexism shifts self-construal and autobiographical memories towards incompetence. *Sex Roles*, **62**, 545-553.
- Eagly, A. H. (1983). Gender and social influence: A social psychological analysis. *American Psychologist*, **38**, 971-981.
- Eagle, A. H., & Steffen, V. J. (1984). Gender stereotypes stem from the distribution of women and men into social roles. *Journal of Personality and Social Psychology*, **46**, 735-754.
- Eagly, A. H. (1995). The science and politics of comparing women and men. *American Psychologist*, **50**, 145–158.
- Eagly, A. H., & Wood, W. (1999). The origins of sex difference in human behavior: Evolved dispositions versus social roles. *American Psychologist*, **54**(6), 408-423.
- Eastwick, Paul; Eagly, Alice; Glick, Peter; Johannesen-Schmidt, Mary; Fiske, Susan; Blum, Ashley; Eckes, Thomas; Freiburger, Patricia; Huang, Li-li; Fernández, Maria; Manganelli, Anna; Pek, Jolynn; Castro, Yolanda; Sakalli-Ugur, Nuray; Six-Materna, Iris; Volpato, Chiara (2006). Is Traditional Gender Ideology Associated with Sex-Typed Mate Preferences? A Test in Nine Nations. *Sex Roles*,

- 54(9-10), 603-614.
- Enloe, Cynthia (1988). *Does Khaki Become You? The Militarization of Women's Lives*, London, Pandora Press.
- Enloe, Cynthia (1993). *The Morning After: Sexual Politics at the End of the Cold War*. Berkeley: University of California Press.
- Enloe, Cynthia (2000). *Bananas, Beaches and Bases: Making Feminist Sense of International Politics*. Berkeley: University of California Press.
- Fischer, Ann R. (2006). Women's Benevolent Sexism As Reaction to Hostility. *Psychology of Women Quarterly*, **30** (4), 410–416.
- Fiske, S. T., & Stevens, L. E. (1993). What's so special about sex? Gender stereotyping and discrimination. In S. Oskamp & M. Costanzo (Eds.), *Gender issues in contemporary society: Applied social psychology annual*, 173–196.
- Fiske, S. T., Xu, J., Cuddy, A. M., & Glick, P. (1999). (Dis)respecting versus (dis)liking: Status and interdependence predict ambivalent stereotypes of competence and warmth. *Journal of Social Issues*, **55**, 473-489.
- Fiske, S.T., Cuddy, A.J.C., Glick, P. & Xu, J. (2002). A model of (often mixed) stereotype content: Competence and warmth respectively follow from perceived status and competition. *Journal of Personality and Social Psychology*, **82**(6), 878-902.
- Fiske, S. T. (2012). Warmth and competence: Stereotype content issues for clinicians and researchers. *Canadian Psychology*, **53**(1), 14-20.
- Ford, T. E. (2000). Effects of sexist humor on tolerance of sexist events. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **26**, 1094-1107.
- Galtung, J. (1990). "Cultural Violence", *Journal of Peace Research*, **27**(3), 291-305.
- Glick, P., & Fiske, S.T. (1996). The ambivalent sexism inventory : Differentiating hostile and benevolent sexism. *Journal of Personality and Social Psychology*, **70**, 491-512.
- Glick, P., & Fiske, S.T. (1997). Hostile and Benevolent sexism: Measuring ambivalent sexist attitudes toward women. *Psychology of Women Quarterly*, **21**, 119-135.
- Glick, P., Diebold, J., Bailey-Werner, B., & Zhu, L. (1997). The two faces of Adam: Ambivalent sexism and polarized attitudes toward women. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **23**, 1323–1334.
- Glick, Peter; Fiske, Susan T.; Mladinic, Antonio; Saiz, José L.; Abrams, Dominic; Masser, Barbara; Adetoun, Bolanle; Osagie, Johnstone E.; Akande, Adebawale; Alao, Amos; Brunner, Barbara; Willemsen, Tineke M.; Chipeta, Kettie; Dardenne, Benoit; Dijksterhuis, Ap; Wigboldus, Daniel; Eckes, Thomas; Six-Materna, Iris; Expósito, Francisca; Moya, Miguel; Foddy, Margaret; Kim, Hyun-Jeong; Lameiras, Maria; Sotelo, Maria José; Mucchi-Faina, Angelica; Romani, Myrna; Sakalli, Nuray; Udegbe, Bola; Yamamoto, Mariko; Ui, Miyoko (2000). Beyond prejudice as simple antipathy: Hostile and benevolent sexism across cultures. *Journal of Personality and Social Psychology* **79**(5): 763–75.
- Glick, P., & Fiske, S.T. (2001a). "Benevolent Sexism", *Advances in Experimental Social Psychology*, **33**, 115-188.
- Glick, P., & Fiske, S. T. (2001b). An Ambivalent Alliance -Hostile and Benevolent Sexism as Complementary Justifications for Gender Inequality-. *American Psychologist*, **56**(2), 109-118.
- Glick, Peter; Sakalli-Ugurlu, Nuray; Ferreira, Maria Cristina; Aguiar De Souza, Marcos (2002). Ambivalent Sexism and Attitudes toward Wife Abuse in Turkey and Brazil. *Psychology of Women Quarterly*, **26** (4), 292–297.
- Glick, Peter; Lameiras, Maria; Fiske, Susan T.; Eckes, Thomas; Masser, Barbara; Volpato, Chiara; Manganelli, Anna Maria; Pek, Jolynn C. X.; Huang, Li-li; Sakalli-Ugurlu, Nuray; Rodriguez Castro, Yolanda Rodriguez; Pereira, Maria Luiza; Willemsen, Tineke M.; Brunner, Annetje; Six-Materna,

- Iris; Wells, Robin; Glick, P (2004). Bad but Bold: Ambivalent Attitudes Toward Men Predict Gender Inequality in 16 Nations. *Journal of Personality and Social Psychology*, **86**(5): 713–28
- Glick, P., Fiske, S. T. (2011). Ambivalent Sexism Revisited. *Psychology of Women Quarterly*, **35**(3): 530–535.
- Goodwin, S. A., Gubin, A., Fiske, S. T., & Yzerbyt, V. Y. (2000). Power can bias impression formation: Stereotyping subordinates by default and by design. *Group Processes and Intergroup Relations*, **3**, 227–256.
- Goodwin, S.A., & Fiske, S.T. (2004). Power and Gender: The Double-Edged Sword of Ambivalence. Unger, R.K. (Ed). *Handbook of the Psychology of Women and Gender*. New York: Jone Wiley & Sons. 日本心理学会ジェンダー研究会(訳). *ジェンダーの心理学ハンドブック*. 北大路書房. 第24章, 権力とジェンダー:アンビバレンスという両刃の剣. 宇井美代子(訳), 422-459.
- Greenwood, D., & Isbell, L. M. (2002). Ambivalent sexism and the dumb blonde: Men's and women's reactions to sexist jokes. *Psychology of Women Quarterly*, **26**, 341-350.
- Gutek, B. A., Searle, S., & Klepa, L. (1991). Rational versus gender role explanations for work family conflict. *Journal of Applied Psychology*, **76**, 560-568.
- Gutek, B. A., & O'Connor, M. O. (1995). The empirical basis for the reasonable woman standard. *Journal of Social Issues*, **51**, 151-166.
- Han Yunhyeong (2013). なぜ韓国の男は, 韓国の女たちに怒るのか. *文化科学*, **76**, 185-201.
한윤형 (2013). 왜 한국 남성은 한국 여성들에게 분노하는가. *문화과학*, **76**, 185–201.
- Harris, M. (1991). *Cultural anthropology* (3rd ed.). New York: HarperCollins.
- Herzog, Sergio; Oreg, Shaul (2008). Chivalry and the Moderating Effect of Ambivalent Sexism: Individual Differences in Crime Seriousness Judgments. *Law & Society Review* **42**, 45–73.
- Hong Duseoung (1996). *韓国軍隊の社会学*. ナナム出版社.
홍두승 (1996). *한국군대의 사회학*. 나남출판사.
- Isaac Kwaku Acheampong, Siddhartha Sarkar (2010). *Gender, Poverty and Sustainable Livelihood*. Arise Publishers & Distributors.
- Im Taehun (2013). *軍人權實態調査研究報告書*. 聖公会大学 NGO 大学院 修士学位請求論文.
임태훈 (2013). *군 인권실태조사 연구 보고서*. 성공회대학교 NGO 대학원 석사학위논문.
- Jackman, Mary R. (1994). *The Velvet Glove: Paternalism and Conflict in Gender, Class, and Race Relations*. Berkeley: University of California Press.
- Jeon Huikyong (2006). 離脱者の視線で見直した 80 年代, 軍事主義の男性性. *アジア女性研究*. **45**(1), 337-344.
전희경 (2006). 이탈자의 시선으로 다시 보는 80 년대, 군사주의 남성성. *아시아여성 연구*, **45**(1), 337–344.
- Joshua B. Grub 温情的セクシズム, Julie J. Exline, Jean M. Twenge (2014). Psychological Entitlement and Ambivalent Sexism: Understanding the Role of Entitlement in Predicting Two Forms of Sexism. *Sex Roles*, **70**(5-6), 209-220.
- Jost, J. T., & Banaji, M. R. (1994). The role of stereotyping in system-justification and the production of false consciousness. *British Journal of Social Psychology*, **33**, 1–27.
- Jost, J.T., Blount, S., Pfeffer, J., & Hunyady, G. (2003). Fair market ideology: Its cognitive-motivational underpinnings. *Research in Organizational Behavior*, **25**, 53-91.
- Jost, J.T., & Kay, A.C. (2005). Exposure to benevolent sexism and complementary gender stereotypes: Consequences for specific and diffuse forms of system justification. *Journal of Personality and Social Psychology*, **88**, 498-509.
- Jung Huijin (2013). *フェミニズムの挑戦:韓国社会の日常の性の政治学*, 第 3 部 軍事主義と男性性.

- 教養人出版社.
- 정희진 (2013). 페미니즘의 도전: 한국사회 일상의 성정치학. 제 3 부 군사주의와 남성성. 서울: 교양인.
- Jung Jinkyong (1990). Korean Sex Role Inventory (KSRI). *The Korean Journal of Social Psychology*, 5(1), 82-92.
- 정진경 (1998). 한국성역할검사(KSRI). 한국심리학회지: 사회, 5(1), 82-92.
- Kay, A.C., Gaucher, D., Napier, J.L., & Laurin, K. (2008). God and the government: Testing a compensatory control mechanisms for the support of external systems. *Journal of Personality and Social Psychology*, 95, 18-35.
- Kim Dongchun (1998). 90年代 学生運動の現況と展望. 黄海文化, 19(6).
- 김동춘 (1998). 90년대 학생운동의 현황과 전망. 황해문화, 19(6).
- Kim Elri (2002). 韓国の軍事主義と性: 儒教の伝統, 反共主義, 經濟發展主義を中心に. 女性と平和, 2, 132-161.
- 김엘리 (2002). 한국의 군사주의와 성: 유교전통, 반공주의, 경제발전주의를 중심으로.
- Kim Elri (2004). Militarization and Gender. 民主法学, 25, 104-125.
- 김엘리 (2004). 군사화와 성의 정치. 민주법학, 25, 104-125.
- Kim Ensil (1994). 民族談論と女性: 文化權力, 主体に関する批判的読み取りのために. 韓国女性学, 10.
- 김은실 (1994). 민족 담론과 여성: 문화 권력, 주체에 관한 비판적 읽기를 위하여. 한국여성학, 10.
- Kim Ensil (1999). 韓国近代化プロジェクトの文化論理と家父長性. 当代批評, 8.
- 김은실 (1999). 한국 근대화 프로젝트의 문화논리와 가부장성. 당대비평, 8.
- Kim Hyerae (2006). 青少年のジェンダー・アイデンティティ尺度開発に関する研究. 社会研究, 7(2), 135-152.
- 김혜래 (2006). 청소년의 성역할정체성 척도 개발에 관한 연구. 사회연구, 7(2), 135-152.
- Kim Hyesuk, An Sangsu, An Miyoung, Ko Jaehong, Lee seonhui, Choi Incheol (2005). The Effect of Hostile and Benevolent Sexism on the Attitudes Toward Female Subgroups. *The Korean Journal of Social and Personality Psychology*, 19(3), 117-133.
- 김혜숙, 안상수, 안미영, 고재홍, 이선희, 최인철 (2005). 적대적 성차별주의와 온정적성차별주의가 여성 하위 집단에 대한 태도에 미치는 영향. 한국심리학회지: 사회 및 성격, 19(3), 117-133.
- Kim, H. S., & Ahn, S. S. (2007). Attitudes toward hostile- and benevolent-sexist men. Paper presented at the European Congress of Psychology.
- Kim Hyunyoung (2000). 軍加算点騒動とサイバーテロ. 女性と社会, 11, 133-145.
- 김현영 (2000). 군가산점 소동과 사이버테러. 여성과 사회, 11, 133-145.
- Kim Hyunyoung (2002). (The) Compulsory Military Service and the Gender Politics of Korean National Identity. 梨花女性大学大学院 女性学科 修士学位請求論文.
- 김현영 (2002). 병역 의무와 근대적 국민 정체성의 성별정치학. 이화여자대학교 여성학과 석사논문.
- Kim Hyunok (2002). Gender-Specific Experiences and the Reproduction of Militarism in Everyday Life: the Relationship between Militaristic Consciousness, Experiences, and Behavior. *Korean Journal of Women's Studies*, 18(1), 71-107.
- 김현옥 (2002). 일상생활 속의 군사주의 재생산과 성별 경험: 의식, 경험, 행위 간 관계를 중심으로. 한국여성학, 18(1), 71-107.

- Kim Jeongpil (2010). 軍隊生活のマニュアル. 未来の窓.
김정필 (2010). 군대생활 매뉴얼. 미래의 창.
- Kim Jiyoung, Kim Gibeom (2005). A Preliminary Study of Psychological Function and Development of Social Norms for Women in Korean Society. *Korean Journal of Psychology and Women*, 10(2), 157-171.
김지영, 김기범 (2005). 한국여성에게 적용되는 사회문화적 규범의 형성과 심미적 기능에 관한 연구. *한국심리학회지: 여성*, 10(2), 157-171.
- Kim Kwangun (1997). Sex-role Identity of cadets their attitudes towards women in the early phase of sex-integration. *Korean Journal of Psychology and Women*, 2(1), 669-681.
김광은 (1997). 성통합 초기 단계에서 생도들의 성역할정체감 및 여성의 역할에 대한 태도. *한국심리학회, 여성* 2(1), 669-681.
- Kim Myeonghye (2003). 現代家族と性役割の変化. *社会研究*, 5, 41-68.
김명혜 (2003). 현대가족과 성역할변화. *사회연구*, 5, 41-68.
- Kim Seungkyung (1997). *Class Struggle or Family Struggle? The Lives of Women Factory Workers in South Korea*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Kim Sinhyun (2010). 軍入隊前後の性意識および態度. 尚志大学 平和安保大学院 修士学位請求論文.
김신현 (2010). 군입대 전후의 성의식 및 태도. 상지대학교 평화안보대학원 석사논문.
- Kim Sohui (2005). “国民 49.4%, 女も軍隊に行こう” <ハンギョレ 21> 第 572 号, 8 月 12 日.
김소희 (2005). “국민 49.4%, 여자도 군대가자”. <한겨레 21> 제 572 호, 8 월 12 일.
- Kim Yonghwa (2006). 性認知的観点から見た性平等実現に関する研究, 淑明女子大学校大学院 博士学位請求論文.
김용화 (2006). 성인지적 관점에서 바라본 성평등 실현에 관한 연구, 숙명여자대학교 대학원 박사학위논문
- Kim Yonghwa (2009). 憲法的側面から見た軍隊と两性平等. 軍隊と性平等. 第 1 部 1 章, 京仁文化社.
김용화 (2009). 헌법적 측면에서 본 군대와 양성평등. 군대와 성평등. 제 1 부 1 장, 경인문화사.
- Kite, M. E., Deaux, K., & Haines, E. (2008). Gender stereotypes. In F. L. Denmark & M. A. Paludi (Eds.), *Psychology of Women: A handbook of issues and theories*. Westport, CT: Greenwood Press.
- Klein, E. (1984). *Gender Police*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Ko Dongjin (2014). 軍内将兵の自殺原因の分析および予防対策に対する研究:将兵の身上管理を中心に. 漢城大学 国防科学大学院 修士学位請求論文.
고동진 (2014). 군내 장병의 자살원인 분석 및 예방대책에 대한 연구: 장병 신상관리를 중심으로. 한성대학교 국방과학대학원 석사학위논문.
- Kong Byeongho (2013). 軍隊に行った息子へ. フルム.
공병호 (2013). 군대 간 아들에게. 흐름.
- Koo Ensuk (2009). Women and War: Gendered Violence and Militarized Culture. *Journal of American studies*, 41(3), 5-33.
구은숙 (2009). 전쟁과 여성: 젠더화된 폭력과 군사주의. *미국학논집*, 41(3), 5-33.
- Kristine M Chapleau, Debra L Oswald, Brenda L Russell (2007). How Ambivalent Sexism toward Women and Men Support Rape Myth Acceptance. *Sex Roles*. 57(1-2), 131-136.
- KwonKim Hyunyoung (2007). 民族主義理念論争と後期男性性:解放戦後史の認識と再認識を取り巻く論争を中心に. *文化科学*, 49, 39-54.
권김현영 (2007). 민족주의 이념논쟁과 후기 남성성: 해방전후사의 인식과 재인식을

- 둘러싼 논쟁을 중심으로. 문화과학, 49, 39-54.
- KwonKim Hyunyoung (2011). 男性性とジェンダー なぜ男性性の研究はジェンダー研究であるべきなのか. ソウル:子音と母音.
- 권김현영 (2011). 남성성과 젠더 -왜 남성성연구는 젠더 연구여야 하는가-. 서울: 자음과 모음.
- Kwon Hyeokbeom (2003). 予備役男性, 彼らは誰か? -韓国軍必男性たちの被害意識の根源を求めて- 季刊女性雑誌<IF>特集‘女性, 軍隊を語る’.
- 권혁범 (2003). 권혁범 (2003). 예비역남성, 그들은 누구인가? -한국 군필 남성들의 피해의식의 근원을 찾아서- 계간 여성잡지 <IF> 특집 ‘여자 군대를 말한다’.
- Kwon Hyeokbeom (2010). 女性主義, 男を生かす. もう一つの文化.
- 권혁범 (2010). 여성주의, 남자를 살린다. 또 하나의 문화.
- Kwon Insuk (2000). 私たち人生の中の軍事主義:女性の軍事主義との関係を中心に. 女性平和アカデミー(1), 春講座.
- 권인숙 (2000). 우리 삶 속의 군사주의: 여성과 군사주의의 관계를 중심으로, 여성과 평화(1), 봄강좌.
- Kwon Insuk (2001). 軍事主義と女性: 徴兵制度に対する分析を中心に. 人權學術大會發表論文.
- 권인숙 (2001). 군사주의와 여성-징병제분석을 중심으로- 인권학술대회발표논문.
- Kwon Insuk (2004). Articles: Gendered Matters and Tasks of Militarized Culture. *The Study of Woman and Family Life*, 8, 17-35.
- 권인숙 (2004). 군사주의 문화의 성별화된 실제와 과제, 여성가족생활연구, 8, 17-35.
- Kwon Insuk (2005). 韓国の軍事文化とジェンダー. 山下英愛(訳). 御茶の水書房.
- 권인숙 (2005). 대한민국은 군대다. 청년사.
- Kwon Insuk (2009). Examining Military Culture while Focusing on its Human Rights Violating Aspects Under Conscription. 民主主義と人權, 9(2), 185-219.
- 권인숙 (2009). 징병제하 인권침해적 관점에서 군대문화 고찰. 민주주의와 인권, 9(2), 185-219.
- Kwon Insuk, Na Yungyeong, Moon Hyuna (2010). Comparison between South Korean and Taiwanese college culture: Focusing on the Hierarchical Sexist Influence of Military Culture. *Women's Studies Review*, 27(1), 145-183.
- 권인숙, 나윤경, 문현아 (2010). 한국과 대만의 대학문화 비교: 위계와 성차별, 폭력의 군대적 징후를 중심으로. 여성학논집, 27(1).145-183.
- Kwon Ohbun (2000). 軍隊経験の意味と過程を通じて見た軍事主義性別政治学. 女性学論集, 17(1).
- 권오분 (2000). 군대경험의 의미화 과정을 통해 본 군사주의 성별정치학. 여성학논집, 17(1).
- Lee Bokju (2011). (The) Japanese ruling the type and actual situation of forced mobilization. 建国大学教育大学院, 修士学位請求論文.
- 이복주 (2011). 일제말기 강제동원의 유형과 실태. 건국대학교교육대학원 석사학위논문.
- Lee Donghoon (1995). A Study of the Korean Military Culture. *Korean Journal of Sociology*, 29(1), 171-198.
- 이동훈 (1995). 한국 군대문화 연구. 한국사회학, 29(1), 171-198.
- Lee Migyeong (2003). 朝鮮半島分断構造の中の女性:家父長的軍事文化支配下の韓国・北朝鮮の女性. 国際地域研究, 7(2), 229-253.
- 이미경 (2003). 한반도 분단구조 속의 여성: 가부장적 군사문화지배하의 남북한 여성.

- 국제지역연구, 7(2), 229-253.
- Lee Minju (1995). 軍隊經驗が權威主義と性役割典型化に及ぼす影響に対する実証研究-大邱地域大学生を中心に-. 啓明大学大学院, 女性学科修士学位請求論文.
이민주 (1995). 군대경험이 권위주의와 성 역할 전형화에 미치는 영향에 대한 실증 연구-대구지역 대학생을 중심으로-. 계명대학교 여성학과 석사논문.
- Lee Myeongsil (2005). Focusing on the Militarization of School Education since 1945 in South Korea = Gendered Educational Policy. *Journal of Asian Women*, **44(1)**, 157-189.
이명실 (2005). 젠더화된 교육정책: 해방 이후 학교 교육의 군사화를 중심으로. 아시아여성연구, 44(1), 157-189.
- Lee Sangdo (2007). 軍隊に行ったら損をする7つのこと. 韓国学術情報.
이상도 (2007). 군대가면 손해 보는 7 가지. 한국학술정보.
- Lee Sanghyun (2001). The Analysis of Relationship between Military Culture and It's Combat Power. 全南大学 行政大学院, 修士学位請求論文.
이상현 (2001). 군대문화와 전투력관계의 분석연구. 전남대학교대학원 석사학위논문.
- Lee Youngja (2005). The Military Experience and the Formation of the Male Subject in Korea. 現象と認識, 29(3), 81-108.
이영자 (2005). 한국의 군대생활과 남성주체 형성. 현상과 인식, 29(3), 81-108.
- Lee Youngran, im Kyungmi, Choi Soeun (2013). Awareness Levels and Influencing Factors of Sexual Harassment and Gender Egalitarianism among College Students. *Korean Journal of Community Health Nursing*, **24(1)**, 45-45.
이영란, 김경미, 최소은 (2013). 대학생의 성희롱 및 성평등 인식 수준 및 영향 요인. 지역사회간호학회지, 24(1), 40-50.
- Mann, M. (1988). *States, War & Capitalism*. Studies in Political Sociology, Oxford; Basil Blackwell.
- Masser, B., & Abrahams, D. (1999). CONTEMPORARY SEXISM: The Relationships Among Hostility, Benevolence, and Neosexism. *Psychology of Women Quarterly*, **23(3)**, 503-517.
- McHugh, Maureen C., & Frieze, Irene Hanson (1997). The Measurement of Gender-Role Attitudes A Review and Commentary. *Psychology of Women Quarterly*. 21: 1-16.
- McHugh, M.C. & Cosgrove, L. (2004). Feminist research methods: Studying women and gender. In M. Paludi (Ed.), *The Praeger guide to the psychology of gender*, 155-182. NY: Praeger.
- McHugh, M. C. (2006). What women want: Challenging the medicalization of women's sexual problems. *Sex Roles*, 54(5-6), 361-369.
- Moon Seungsuk (2007). 軍事主義に封じ込められた近代. ソウル: もう一つの文化.
문승숙 (2007). 군사주의에 갇힌 근대. 또 하나의 문화
- Nah Yoonkyeung (2005a). Militarism represented, reinforced, and learned on Korean co-ed campus. 生涯教育学研究, 11(4), 1-32.
나윤경 (2005a). 군사주의가 재현되고 실천되는 공간으로서의 남녀공학대학교-평생교육학적 개입 장. 평생교육학연구, 11(4), 1-32.
- Nah Yoonkyeung (2005b). Is Co-ed College a Place for Both Genders? *Korean Journal of Women's Studies*, 21(2), 181-222.
나윤경 (2005b). 여학생들의 '목소리'를 통해 드러난 남녀공학대학교의 남성중심성: 여자대학교와 남녀공학대학교를 경험한 여학생들의 사례를 중심으로. 한국여성학, 21(2), 181-222.
- Nah Yoonkyeung (2007). Military Culture in Co-ed Colleges: Focusing on Vocalists in Music Department. *Korean Journal of Women's Studies*, 23(1), 69-102.

- 나윤경 (2007). 남녀공학대학교의 군사문화와 여학생 ‘시민권’ 구성과정; 음악대학 성악과를 중심으로. *한국여성학*, 23(1), 69-102.
- Nah Yoonkyeung, Choi Yoonjin (2011). Gender Sensitivity Comparison between Korean and Japanese College Students. *Journal of Lifelong Education*, 17(4), 121-146.
- 나윤경, 최윤진 (2011). 한일대학생의 성평등의식 비교. *평생교육연구*, 17(4), 121-146.
- Nam Insuk (2009). *なぜ女性学なのか? 第4章 韓国・北朝鮮の女性的接近*. ソウル: 学問社.
- 남인숙 (2009). 왜 여성학인가? 제 4 장 남북한의 여성적 접근. 서울: 학문사.
- No Seunghui (1999). フェミニズム理論の实践的地平 ジェンダーと性政治. 批評と理論, 4(2).
- 노승희 (1999). 페미니즘 이론의 실천적 지평 젠더와 성정치. *비평과 이론*, 4(2).
- O'Brien, M. & Huston, A. C. (1985). Development of sex-typed play behavior in toddlers. *Developmental Psychology*, 21, 866-871.
- Oh Miyoung (2002). 軍事主義とジェンダー化された位階秩序. 女性研究論集, 13, 91-111.
- 오미영 (2002). 군사주의와 젠더화된 사회질서, 여성연구논집, 13, 91-111.
- Oh Miyoung (2003). 軍事主義と女性のセクシュアリティ. 女性研究論集, 14, 99-126.
- 오미영 (2003). 군사주의와 여성의 섹슈얼리티. 여성연구논집, 14, 99-126.
- Park Noya (2000). 人間性を破壊する韓国の軍事主義. 私たちの中のフェミニズム. サミン.
- 박노자 (2000). 인간성을 파괴하는 한국의 군사주의. 우리 안의 파시즘, 삼인.
- Park Hongju (2000). 労働市場の観点から見た軍加算点制度. 女性と社会, 11, 115-132.
- 박홍주 (2000). 노동시장의 관점에서 본 군가산점제. 여성과 사회, 11, 115-132.
- Park Hongju (2005). 性別化された労働市場と女性の日. 黄海文化, 46, 65-81.
- 박홍주 (2005). 성별화된 노동시장과 여성의 일. 황해문화, 46, 65-81.
- Park Jinhwan (2006). 韓国の大学生における軍隊の再生産—懲役制度‘談話’日常的実践. Asia Culture Forum, 5-19.
- Park Kyungbeom (2005). ブレーキのない女性. 韓国論壇. 187, 128-137.
- 박경범 (2005). 브레이크 없는 여성. 한국논단, 187, 128-137.
- Park Suae, Jo Eunkyung (2002). Male Gender Role and Adjustment of Korean Men. *Korean Journal of Psychology and Social Issues*, 8(2), 77-103.
- 박수애, 조은경 (2002). 남성성역할이 우리나라 남성들의 적응에 미치는 영향. 한국심리학회지 사회문제, 8(2), 77-103.
- Park Suwang, Jung Ukjin, Choi Jaemin (2010). 私は世の中の全てのことを軍隊で習った. *ダサンブックス*.
- 박수왕, 정욱진, 최재만 (2010). 나는 세상의 모든 것을 군대에서 배웠다. 다산북스.
- Park Yanggeun (2014). 眞の男は笑って軍隊へ行く:あなたの成功と未来は軍隊での2年にかかっている. 幸福エネルギー.
- 박양근 (2014). 진짜 사나이는 웃으면서 군대 간다: 당신의 성공과 미래, 군대에서의 2년에 달려있다. 행복에너지.
- Pratto, Felicia; Sidanius, Jim; Stallworth, Lisa M.; Malle, Bertram F. (1994). Social dominance orientation: A personality variable predicting social and political attitudes. *Journal of Personality and Social Psychology* 67 (4): 741-63.
- Pratto, F., Stallworth, L. M., Sidanius, J., & Siers, B. (1997). The gender gap in occupational role attainment: A social dominance approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 72, 37-53.
- Ross, A. L. (1987). Dimensions of Militarization in the Third World. *Armed Force & Society*, 13(4). 561-578.
- Rudman, L. A., & Kilianski, S. E. (2000). Implicit and explicit attitudes toward female authority. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 26, 1315-1328.

- Rudman L. A., & Heppen. J. B. (2003). Implicit Romantic Fantasies and Women's Interest in Personal Power: A Glass Slipper Effect? *Personality and Social Psychology Bulletin*, **29**, 1357-1370.
- Russell, B. L. & Trigg, K. Y. (2004). Tolerance of Sexual Harassment: An Examination of Gender Differences, Ambivalent Sexism, Social Dominance, and Gender Roles. *Sex Roles*, *50*(7-8), 565-573.
- Sakalli-Uğurlu, Nuray & Beydogan, Basak (2002). Turkish College Students' Attitudes toward Women Managers: The Effects of Patriarchy, Sexism, and Gender Differences. *The Journal of Psychology* **136** (6): 647-656.
- Sakalli-Uğurlu, N., & Glick, P. (2003). Ambivalent sexism and attitudes toward women who engage in premarital sex in Turkey. *The Journal of Sex Research*, *40*(3), 296-302.
- Secord, P. F. (1983). Imbalanced sex ratios: The social consequences. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *9*, 525-543.
- Sidanius, Jim; Pratto, Felicia; Bobo, Lawrence (1994). Social dominance orientation and the political psychology of gender: A case of invariance? *Journal of Personality and Social Psychology*, **67** (6), 998-1011.
- Sidanius, J. Pratto, F. & Bobo, L. (1996). Racism, Conservatism, Affirmative Action and Intellectual Sophistication: A Matter of Principled Conservatism or Group Dominance? *Journal of Personality and Social Psychology*, *70*, 476-490.
- Smuts, B. (1996). Male aggression against women: An evolutionary perspective. In D. M. Buss & N.M. Malamuth (Eds.), *Sex, power, conflict*. 231-268. New York: Oxford University Press.
- Son Sutaе (1998). Military subculture and society culture. *行政論集*, **26**, 87-115.
손수태 (1998). 군대문화와 사회문화. *행정논집*, *26*, 87-115.
- Spence, J. T., & Helmreich, R. (1972). The Attitudes toward Women Scale: An objective instrument to measure the attitudes toward the rights and roles of women in contemporary society. *JSAS Catalog of Selected Documents in Psychology*, *2*(66/67), 153.
- Spence, J. T., Helmreich, R. L., & Stapp, J. (1974). The Personal Attributes Questionnaire: a measure of sex role stereotypes and masculinity-femininity. *JSAS: Catalog of Selected Documents in Psychology*, *4*, 43-44 (Ms. No. 617).
- Spence, J. T., Helmreich, R., and Stapp, J. (1975). Ratings of self and peers on sex role attributes and their relation to self-esteem and conceptions of masculinity and femininity. *Journal of Personal Social Psychology*. *32*, 29-39.
- Spence, J. T. & Hahn, E. D. (1997). The attitudes toward women scale and attitude change in college students. *Psychology of Women Quarterly*, **21**, 17-34.
- Spence, J. T., & Buckner, C. E. (2000). Instrumental and expressive traits, trait stereotypes, and sexist attitudes: What do they signify? *Psychology of Women Quarterly*, *24*, 44-62.
- Spencer A. Rathus, Jeffrey S. Nevid & Leis Fichner-Rathus (2005). *Human Sexuality in a World of Diversity*, 6th ed.
- Swim, J. K., Aikin, K. J., Hall, W. S., & Hunter, B. A. (1995). Sexism and racism: Old-fashioned and modern prejudices. *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**, 199-214.
- Swim, J.K., & Campbell, B. (2000). Sexism: Attitudes, beliefs, and behavior. In R. Brown & S. Gaertner (Eds.), *Handbooks of Social Psychology: Intergroup relation* (Vol. 4). Cambridge, MA: Blackwell.
- Swim, J.K., Mallett, R.K., Stangor, C., Russo-Devosa, Y. (2005). Judgments of sexism: A comparison of the subtlety of sexism measures and sources of variability in judgments of sexism. *Psychology of Women Quarterly*, **29**(4), 406-411.
- Tougas, F., Brown, R., Beaton, A. M., & Joly, S. (1995). Neo-sexism: Plus ça change, plus c'est pareil. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *21*, 842-849.
- Ui, M., & Matsui, Y. (2008). Japanese Adults' Sex Role Attitudes and Judgment Criteria Concerning Gender Equality: The Diversity of Gender Egalitarianism. *Sex Roles*. **58**. 412-422.

- Um Honggil, Kim Hongsin, Moon Taejun, Son Jinyeong (2013). 私の夢は軍隊から始まった. ソウル: 泉.
 엄홍길, 김홍신, 문태준, 손진영 (2013). 내 꿈은 군대에서 시작되었다. 서울: 샘터
- Vescio, Theresa K., Sarah J. Gervais, and Mark Snyder (2005). Power and the Creation of Patronizing Environments: The Stereotype-Based Behaviors of the Powerful and Their Effects on Female Performance in Masculine Domains. *Journal of Personality and Social Psychology*, 88, 658-672.
- Viki, G. T., & Abrams, D. (2002). But she was unfaithful: Benevolent sexism and reactions to rape victims who violate traditional gender role expectations. *Sex Roles*, 47, 289-293.
- Viki, G.T., Abrams, D. & Hutchison, P. (2003). The “True” Romantic: Benevolent Sexism and Paternalistic Chivalry. *Sex Roles*, 49, 533-537.
- Williams, J. E., & Best, D. L. (1982). Measuring sex stereotypes: A thirty nation study. Newbury Park, CA: Sage Publications.
- Williams, J. E., & Best, D. L. (1990). Sex and psyche: Gender and self-concepts viewed cross-culturally. Newbury Park, CA: Sage Publications.
- Yang Haeyoung, Kim Kyungmi (2005). Gender Stereotypes and Gender Typing in College Students, *Korean Journal of Psychology*, 24(2), 85-104.
 양혜정, 김경미 (2005). 대학생의 성역할고정관념과 성역할고정화. 한국심리학회지: 일반, 24(2), 85-104.
- Yang Jeonga (2009). (公益と人権 15) 軍隊と性平等. 京仁文化史.
 양정아 (2009). (공익과 인권 15) 군대와 성평등. 경인문화사.
- Yeo Intaek (2013). 軍隊心理学. ソウル:本がある風景.
 여인택 (2013). 군대 심리학. 서울: 책이 있는 풍경.
- Yoon Jeason (2004). 韓国の軍隊－徴兵制は社会に何をもたらしているか－中公新書1762.
- Yoon Minjae (2008). Sociological Analysis of Military Culture and Suicide Accidents in Korea. *Discourse* 201, 11(1), 165-193.
 윤민재 (2008). 한국사회의 군대문화와 군자살 사고에 대한 사회학적 고찰. 담론 201, 11(1), 165-193.
- Yu Hyejeong (2006). A study on the male sexuality and sexual politics in the military group: with a focus on privaters' sexuality. 上智大学大学院 女性学科 修士学位請求論文.
 유혜정 (2006). 남성 섹슈얼리티의 사회화 기제로서 군대 성문화 연구: 병사들의 성의식과 성경험을 중심으로. 상지대학교대학원 여성학과 석사학위논문.
- 青野篤子編 (2009). ジェンダーの心理学ハンドブック, 第2章. 性差別主義. ナカニシヤ出版.
- 有泉優里 (2007). ジェンダー・ステレオタイプにおける知識と個人の考えおよび偏見の関係. 日本語とジェンダー, 1 - 8.
- 池上知子 (2013). 格差と序列の心理学, 第1章. 格差と序列を生み出す心理. ミネルヴァ書房.
- 宇井美代子・山本真理子(2001). Ambivalent Sexism Inventory (ASI) 日本語版の信頼性と妥当性の検討, 日本社会心理学会第 42 回大会発表論文集, 300-301.
- 潮村公弘・小林知博 (2004). 第4章・潜在的認知. 大島尚・北村英哉(編著). 社会心理学ニューセンチュリーシリーズ第3巻「認知の社会心理学」. 北樹出版.
- 伊藤公雄・樹村みのり・國信潤子共編 (2011). 女性学・男性学－ジェンダー論入門. 有斐閣.
- 伊藤裕子 (1978). 性役割観の評価に関する研究. 教育心理学研究, 26, 1-11.
- 江原由美子 (1989). ジェンダーの社会学－女性たち・男性たちの世界, 新曜社.
- 柏木恵子・高橋恵子(2008). 日本の男性心理学－もう一つのジェンダー問題－, 有斐閣.
- 金井淑子 (1997). 女性学の挑戦: 家父長制・ジェンダー・身体性へ. 明石書店.

- 阪井俊文 (2007). セクシズムと恋愛特性の関連性の検. 心理学研究, 78(4), 390-397.
- 坂本佳鶴恵 (2011). 女性・男性雑誌とジェンダー規範, ファッション意識: 首都圏男女への質問紙調査の分析. お茶の水女子大学人文科学研究, 7, 139 -152.
- 沈美恵・遠藤由美 (2011a). 韓国大学生の性役割観とセクシズム及び軍隊に対する態度に関する研究. 韓国心理学会誌(社会問題), 17(1), 1-17.
- 沈美恵・遠藤由美 (2011b). 家父長主義, 男性性, 兵役態度が性差別意識に及ぼす影響—未必男子大学生を対象に—. 韓日次世代学術フォーラム第8回国際学術大会発表論文集.
- ジェンダー・学び・プロジェクト編 (2006). ジェンダーの視点から社会を見る: 出会い気づきつながりへ. 解放出版社.
- 鈴木淳子・柏木恵子 (2006). ジェンダーの心理学: 心と行動への新しい視座, 第2章ジェンダー役割の態度変化と文化社会変動.
- 高橋久美子 (2002). 自己への脅威が女性に対する偏見に及ぼす効果—両面価値的性差別理論からの検討—. 社会心理学研究, 23, 119-129.
- 田中有理・福富真 (2007). 男女平等の判断基準と個人領域の関連性の検討. 東京が学芸大学紀要, 総合教育科学系, 101 - 110.
- 永瀬伸子 (2012). 第1子出産をはさんだ就業継続, 出産タイミングと夫婦の家事分担—北京・ソウルと日本の比較—. 人口問題研究, 68(3), 66~84.
- 春木育美 (2000). 軍隊と韓国男性—兵役が韓国男性に与える影響—同志社社会学研究 4. 53-63.
- 春木育美 (2006). 現代韓国と女性. 新幹社.
- 東 清和 (1990). 心理的両性具有 I—温情的セクシズムRIによる心理的両性具有の測定. 早稲田大学教育学部学術研究(教育・社会教育・教育心理・体育学編). 35, 45—58.
- 東 清和 (1991). 心理的両性具有 II—温情的セクシズムRIによる心理的両性具有の測定. 早稲田大学教育学部学術研究(教育・社会教育・教育心理・体育学編). 40, 61—71.
- 儘田徹・中山和弘 (2006). 異なる性役割態度の併存とその関連要因に関する検討. 国立女性教育会館研究ジャーナル, 10.
- 山下英愛 (2007). 公開シンポジウム: ジェンダーの視点で読み解く現在. 韓国における女性運動の現状と課題. 和光大学総合文化研究所年報『東西南北』.
- 山本真理子 (2001). 心理測定尺度集 I, 人間の内面を探る <自己・個人内過程>. サイエンス社.
- 力武由美 (2007). 「軍事主義／軍事化」—韓国フェミニズムが提起するもう一つの分析枠— 16 ジェンダーと政治(ポリティクス)

付録

研究1 韓国人の性役割固定観念とセクシズム及び軍務に対する態度 -----	99
研究2 日韓男子大学生の性役割観と家父長意識及びセクシズムに関する比較 -----	103
研究3 韓国大学生の性役割観と軍務に対する態度及びセクシズム :性別による比較 -----	109
研究5 韓国男子大学生の性役割観と軍務に対する態度及びセクシズム :部隊の特性と勤務形態による比較 -----	115
研究4, 第5章 男子大学生の性役割観と軍務に対する態度及びセクシズムに関する縦断 的検討 -----	121

본 설문지는 한국성인남녀의 성역할태도에 관한 연구 자료를 수집하기 위해 작성되었습니다.
응답해 주신 모든 내용은 본 연구의 목적으로만 사용하겠습니다.
설문에 응해 주셔서 감사합니다.

“남자다운 남자”란 어떤 사람이라고 생각하십니까? 세 가지만 선택해 주십시오(✓).

***** 3개 선택 *****

- 1.책임감이 강하다 2.남을 배려할 줄 안다 3.성실하다 4.헌신적이다
- 5.신체적으로 건강하다 6.리더쉽이 있다 7.순종적이다 8.정직하다 9.의지가 강하다
- 10.용모가 아름답다 11.인내심이 강하다 12.의리가 있다 13.따뜻하다
- 14.마음이 넓다 15.믿음직스럽다 16.애교가 많다 17.인생의 목표가 있다
- 18.결단력이 있다 19.착하다 20. 홀로 설 수 있다 21.기타 ()

“여자다운 여자”란 어떤 사람이라고 생각하십니까? 세 가지만 선택해 주십시오(✓).

***** 3개 선택 *****

- 1.책임감이 강하다 2.남을 배려할 줄 안다 3.성실하다 4.헌신적이다
- 5.신체적으로 건강하다 6.리더쉽이 있다 7.순종적이다 8.정직하다 9.의지가 강하다
- 10.용모가 아름답다 11.인내심이 강하다 12.의리가 있다 13.따뜻하다
- 14.마음이 넓다 15.믿음직스럽다 16.애교가 많다 17.인생의 목표가 있다
- 18.결단력이 있다 19.착하다 20. 홀로 설 수 있다 21.기타 ()

“전혀 그렇지 않다”, “그렇지 않다”, “그렇다”, “매우 그렇다” 중, 선택해 주십시오.

	전 혀 그 렇 지 않 다	그 렇 지 않 다	그 렇 다	매 우 그 렇 다
* 다음은 우리 사회에서 나타나는 일반적인 남녀관계에 대해 어떻게 생각하는지 알아보려는 질문입니다.				
** 자신의 생각에 대해 답변해 주십시오 **				
1. 여성은 자신의 미모를 이용해서 남자들을 부러먹는다	1	2	3	4
2. 신체상의 위험 부담이 큰일은 여성보다 남성이 감당해야 한다.	1	2	3	4
3. 남성에 비해 여성들은 기분이 쉽게 상하는 편이어서 업무처리가 합리적이지 못하다	1	2	3	4
4. 남자가 세상을 이끌어 가는 것이 마땅함에도 여성들은 항상 불평을 늘어놓는다	1	2	3	4
5. 여학생보다는 책임질 줄 아는 남학생이 학급반장이 되어야 학급운영이 더 잘된다.	1	2	3	4
6. 여성들은 감정적으로 불안하여 큰일을 맡기기 어렵다	1	2	3	4
7. 여성들은 곤란하거나 부탁할 일이 있을 때만 남자를 찾는다	1	2	3	4
8. 좁은 길에서 남녀가 마주치면 남성이 먼저 길을 양보해야 한다.	1	2	3	4
9. 여성은 남자에 비해 가정을 잘 돌보는 세심함을 지니고 있다.	1	2	3	4
10. 남성은 여성과의 사랑이 없다면 결코 행복해 질 수 없다	1	2	3	4
11. 여자는 자녀를 기르고 집안일을 돌보는 능력이 있다.	1	2	3	4
12. 사랑하는 여성이 있을 때 남성은 온전한 삶을 살 수 있다.	1	2	3	4
13. 사랑하는 여성이 없다면 남성의 삶은 무의미할 것이다.	1	2	3	4
14. 여성들은 남녀 간의 차이를 인정하지 않고 무조건 평등만을 주장한다.	1	2	3	4
15. 여성들은 데이트 비용은 모두 남성에게 떠맡기면서 비싼 명품들을 선호한다.	1	2	3	4
16. 추운 날씨에는 남자가 여자에게 옷을 벗어주는 것이 바람직하다.	1	2	3	4
17. 방과 후 반겨 줄 엄마가 집에 있어야 아이들의 정서 교육에 좋다.	1	2	3	4
18. 여성의 사랑을 얻은 남자가 진정한 남자라고 할 수 있다	1	2	3	4

	전혀 아니 다	그렇 지 않다	그 렇 다	정말 그렇 다
19. 우리 사회를 위해 해야 할 일이 많은 만큼 여자보다 남자에게 더 많은 결정권을 주어야 한다.	1	2	3	4
20. 여성은 남성에 비해 결단력이 부족해서 중요한 직책을 잘 수행하지 못한다.	1	2	3	4
21. 여자가 먼저 성적으로 유혹하고서는 마음에 들지 않으면 성희롱이라고 주장한다.	1	2	3	4
22. 가벼운 짐일 지라도 여성에게 들리기보다는 남성이 들어주어야 한다.	1	2	3	4
23. 남자는 이지적이고 여자는 감성적이므로 그에 맞는 일을 할 때 남녀가 조화를 이룬다.	1	2	3	4
24. 여성들은 국방의 의무 등 책임은 다하지 않으면서 자신들의 권리만을 내세운다.	1	2	3	4

군복무에 대해 어떻게 생각하십니까?	전 혀 아 니 다	아 니 다	보 통 이 다	그 렇 다	매 우 그 렇 다
1. 남자는 군대에 갔다 와야 철이 든다.	1	2	3	4	5
2. 젊었을 때 2년이라고 하는 시간을 군대에서 보내는 것은 개인적으로 큰 손해라고 생각한다.	1	2	3	4	5
3. 군대의 경험은 사회생활에 큰 도움이 된다.	1	2	3	4	5
4. 군대에 갔다 와야 진짜 남자가 된다.	1	2	3	4	5
5. 여자도 군대를 가야 한다고 생각한다.	1	2	3	4	5

감사합니다. 한 문항이라도 빠지면 애써 답변해 주신 질문지를 사용할 수 없습니다. 혹시 빠진 곳이 없는지 다시 한 번 확인을 부탁드립니다.

응답해 주신 모든 내용은 본 연구의 목적으로만 사용하겠습니다.

마지막으로, 다음 질문에 답해주시오. ✓

성별: 남 여

연령: 10대 20대 30대 40대 50대 60대 이상

학력: 중졸이하 고졸 대졸 대학원이상

병역유무: 유 무

병역형태: ()

참여 해 주셔서 감사합니다.

좋은 하루 되세요.

간사이대학 심리학과 박사과정 심미혜
(forgrace99@hotmail.com)

日韓大学生の意識調査

本日は調査にご協力いただき、ありがとうございます。

この調査は、日本と韓国の大学生が男女の性役割に対してどのように考えているのかを調べるために行うものです。正しい答えや、間違った答えというものはありません。思ったとおりに教えてください。

この調査は大きく3つのパートで構成されています。また、表紙を合わせて6枚からなっています。答えは全て厳密な管理のもとで、直ちに記号化され、コンピュータにより統計的に分析されます。ご協力いただいた方にご迷惑をお掛けすることは決してありませんので、日頃お感じになっていることを率直にお答えください。またこの調査は、コンピュータにデータを入力後、シュレッダーにて処分するなど、個人情報の保護に最大限の配慮をいたします。

それぞれの質問をよく読み、全ての質問のついて教えてください。回答もれの内容をお願いします。

※以下の欄を記入してください。

- ・学部() ・学科()
- ・学年()年 ・年齢()歳
- ・性別(男・女)

関西大学心理学研究科

沈 美恵 (forgrace99@hotmail.com)

※次の各項目は人の性格を表すものです。あなたにどの程度当てはまりますか。「全く当てはまらない(1点)」から「非常に当てはまる(7点)」までのうち、最も当てはまると思う数字に○をつけてください。

私は,

	全く当てはまらない	当てはまらない	やや当てはまらない	どちらでもいえない	やや当てはまる	当てはまる	非常に当てはまる
1. 自分の判断や能力を信じている -----	1	2	3	4	5	6	7
2. 従順な -----	1	2	3	4	5	6	7
3. 自分の信念を曲げない -----	1	2	3	4	5	6	7
4. 明るい -----	1	2	3	4	5	6	7
5. 独立心がある -----	1	2	3	4	5	6	7
6. はにかみ屋の -----	1	2	3	4	5	6	7
7. スポーツマンタイプの -----	1	2	3	4	5	6	7
8. 情愛細やかな -----	1	2	3	4	5	6	7
9. 自己主張的な -----	1	2	3	4	5	6	7
10. 女性的な -----	1	2	3	4	5	6	7
11. 個性が強い -----	1	2	3	4	5	6	7
12. しとやかな -----	1	2	3	4	5	6	7
13. 自分の意思を押し通す力がある -----	1	2	3	4	5	6	7
14. 困っている人への思いやりがある -----	1	2	3	4	5	6	7
15. 分析的な -----	1	2	3	4	5	6	7
16. 人の気持ちを汲んで理解する -----	1	2	3	4	5	6	7
17. リーダーとしての能力を備えている -----	1	2	3	4	5	6	7
18. あわれみ深い -----	1	2	3	4	5	6	7
19. 危険を犯すことをいとわない -----	1	2	3	4	5	6	7
20. 人が落ち込んでいると慰める -----	1	2	3	4	5	6	7
21. 意思決定が速やかにできる -----	1	2	3	4	5	6	7
22. 話し方がやさしくて穏やかな -----	1	2	3	4	5	6	7
23. 人に頼らないで生きて行けると思っている -----	1	2	3	4	5	6	7
24. 心が暖かい -----	1	2	3	4	5	6	7

	全く当 てはま らない							非常に 当ては まる
25. 支配的な -----	1	2	3	4	5	6	7	
26. やさしい -----	1	2	3	4	5	6	7	
27. 男性的な -----	1	2	3	4	5	6	7	
28. 子供のように純真な -----	1	2	3	4	5	6	7	
29. はっきりした態度が取れる -----	1	2	3	4	5	6	7	
30. 涙が多い -----	1	2	3	4	5	6	7	
31. 積極的な -----	1	2	3	4	5	6	7	
32. 愛嬌がある -----	1	2	3	4	5	6	7	
33. リーダーとして行動する -----	1	2	3	4	5	6	7	
34. 感情的な -----	1	2	3	4	5	6	7	
35. 個人主義的な -----	1	2	3	4	5	6	7	
36. 子供が好き -----	1	2	3	4	5	6	7	
37. 負けず嫌い -----	1	2	3	4	5	6	7	
38. 温和な -----	1	2	3	4	5	6	7	
39. 野心的な -----	1	2	3	4	5	6	7	

※ ここで全くの質問に回答したかを確認し、次のページに進んでください。

※ 次は「男女の役割」に関する質問です。あなたはどのように思いますか。

	全くそうは思わない	あまりそうは思わない	どちらでも言えない	まあそう思う	非常にそう思う
1. 男社員が女の上司を望まないのは仕方がない -----	1	2	3	4	5
2. 仕事中心の女は、失うものが多すぎる -----	1	2	3	4	5
3. 結婚している女が仕事を持つ場合は、常勤よりパートが望ましい	1	2	3	4	5
4. 政治家や経営者といった権限の大きな仕事は、どちらがと言えば男の ほうが向いている	1	2	3	4	5
5. 女は男に比べて、仕事における責任感が弱い場合が多い -----	1	2	3	4	5
6. 共働きの夫婦は、妻が専業主婦の夫婦に比べて、夫婦仲が悪くなりやす いと思う	1	2	3	4	5
7. 経済力がない男性は、男として魅力がない -----	1	2	3	4	5
8. 子供が小さいうちは、母親は育児に専念しなければならない -----	1	2	3	4	5
9. 子どもは母親が育てるべきだ-----	1	2	3	4	5
10. 女の子は女らしく、男の子は男らしくする育てる方がよい-----	1	2	3	4	5
11. 夫の収入が十分であれば、あえて妻が仕事する必要はない -----	1	2	3	4	5
12. 家族の生計は夫の責任だ -----	1	2	3	4	5
13. 男は外で働き、女は家庭を守るの方がよい -----	1	2	3	4	5
14. わが家では、母は父の前では何でも言いなりになるほど父の権威が強い	1	2	3	4	5
15. わが家では、何事によらず女より男の方が優先される -----	1	2	3	4	5
16. わが家では、何かを決める時、母より父の方がより大きい決定権を 持っている	1	2	3	4	5

※ 「男と女」について普段あなたが思うことを聞かせてください。

	全くそうは思わない	あまりそうは思わない	まあそう思う	非常にそう思う
1. 女は自分の魅力で惑わせて男を利用する -----	1	2	3	4
2. 危険が大きい仕事は女より男がすべきだ -----	1	2	3	4
3. 女は理屈よりも気分で仕事をする -----	1	2	3	4
4. 男が世の中をリードして行くのはあたりまえだ -----	1	2	3	4
5. 女学生より責任感の強い男学生の方が学級のリーダーになれば学級運営がうまく行くはずだ -----	1	2	3	4
6. 女は感情的だから重大な事を任せるのが難しい -----	1	2	3	4
7. 女は困った時、または頼みがある時だけ男を求める -----	1	2	3	4
8. 狭い道で男と女が出会ったら男の方が先に道を譲るべきだ -----	1	2	3	4
9. 女は男に比べて家庭の世話をよくする細やかさを持っている -----	1	2	3	4
10. 「愛する女」を持たない男は、自分の人生を幸せだとは思わない -----	1	2	3	4
11. 女は子どもを育て、世話をする能力がある -----	1	2	3	4
12. 女から愛されないような男は、本当に完璧な人とは言えない -----	1	2	3	4
13. 愛する女がいなければ男の生は無意味であろう -----	1	2	3	4
14. 男と女は違うのに、女はただ平等だけを主張する -----	1	2	3	4
15. 女はデートの費用は全て男に払わせながら、自分は高価なブランド品を選び好みする -----	1	2	3	4
16. 寒い日には男が自分の服を1枚ぬいで、女にかけてあげるのが理想的だ -----	1	2	3	4

最後のページが残ってます。

- | | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 17. 放課後、喜んで迎えるお母さんが家にいた方が子どもたちの情緒教育によい | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 18. 男は女なしでは完全とは言えない ----- | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 19. 私たちの社会をよくするためにすべきことが多いほど、女より男の方により沢山の決定権を与えるべきだ | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 20. 女は男に比べて決断力が足りないので重要な職責をうまく遂行することができない | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 21. 女が先に男を性的に誘惑して、気が向かないとセクハラだと主張する ----- | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 22. 軽い荷であっても女に持たせずに男が持ってあげるべきだ ----- | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 23. 男は理性的で女は感情的であるので、それにふさわしい仕事をする時に男女の調和がとれる | 1 | 2 | 3 | 4 |

一項目で無回答の項目があると、質問紙を資料として使用できないので、無回答の項目がないかもう一度確認をよろしく
 お願いします。

大切な時間割いて下さってありがとうございます。

아래는 사람의 성격적 특성을 표현하는 말들입니다. 각각의 특성이나 행동 표현에 자신을 얼마나 잘 표현하는지를 생각해보고, 자신을 가장 적절하게 표현해주는 칸에 ○ 표나 V 표를 하십시오.

나는,	전혀 아니 다	대 체 로 그 렇 지 않 다	그 렇 지 않 은 편 이 다	보 통 이 다	그 런 편 이 다	대 체 로 그 렇 다	매 우 그 렇 다
1. 뒤끝이 없다	1	2	3	4	5	6	7
2. 꼼꼼하다	1	2	3	4	5	6	7
3. 활발하다	1	2	3	4	5	6	7
4. 우직하다	1	2	3	4	5	6	7
5. 감성이 풍부하다	1	2	3	4	5	6	7
6. 불안정하다	1	2	3	4	5	6	7
7. 정의롭다	1	2	3	4	5	6	7
8. 깔끔하다	1	2	3	4	5	6	7
9. 진지하다	1	2	3	4	5	6	7
10. 대담하다	1	2	3	4	5	6	7
11. 암전하다	1	2	3	4	5	6	7
12. 비관적이다	1	2	3	4	5	6	7
13. 의리가 있다	1	2	3	4	5	6	7
14. 아름다움을 추구한다	1	2	3	4	5	6	7
15. 참을성이 강하다	1	2	3	4	5	6	7
16. 용감하다	1	2	3	4	5	6	7
17. 계획성이 있다	1	2	3	4	5	6	7
18. 불건전하다	1	2	3	4	5	6	7
19. 운동하는 것을 좋아한다	1	2	3	4	5	6	7
20. 알뜰하다	1	2	3	4	5	6	7
21. 생각이 깊다	1	2	3	4	5	6	7
22. 강인하다	1	2	3	4	5	6	7

23. 섬세하다	1	2	3	4	5	6	7
24. 이기적이다	1	2	3	4	5	6	7
25. 의욕적이다	1	2	3	4	5	6	7
26. 애교가 있다	1	2	3	4	5	6	7
27. 양심적이다	1	2	3	4	5	6	7
28. 박력이 있다	1	2	3	4	5	6	7
29. 눈물이 많다	1	2	3	4	5	6	7
30. 고집이 세다	1	2	3	4	5	6	7
31. 모험적이다	1	2	3	4	5	6	7
32. 보호받고 싶어한다	1	2	3	4	5	6	7
33. 의지가 강하다	1	2	3	4	5	6	7
34. 수줍어한다	1	2	3	4	5	6	7
35. 자신감이 있다	1	2	3	4	5	6	7
36. 동정적이다	1	2	3	4	5	6	7
37. 진취적이다	1	2	3	4	5	6	7
38. 사랑받고 싶어한다	1	2	3	4	5	6	7
39. 순발력이 있다	1	2	3	4	5	6	7
40. 도도하다	1	2	3	4	5	6	7
41. 친절하다	1	2	3	4	5	6	7
42. 보호받고 싶어하지 않는다	1	2	3	4	5	6	7
43. 감정을 중시한다	1	2	3	4	5	6	7
44. 둔하다	1	2	3	4	5	6	7
45. 야망이 있다	1	2	3	4	5	6	7
46. 예민하다	1	2	3	4	5	6	7
47. 충실하다	1	2	3	4	5	6	7
48. 주도적이다	1	2	3	4	5	6	7
49. 남을 돕는 것을 좋아한다	1	2	3	4	5	6	7
50. 성숙하지 못하다	1	2	3	4	5	6	7

* 다음은 우리 사회에서 나타나는 일반적인 남녀관계에 대해 어떻게 생각하는지 알아보려는 질문입니다.

전
혀
그
렇
지
않
다

매
우
그
렇
다

자신의 생각에 대해 답변해 주십시오.

1. 여성은 자신의 미모를 이용해서 남성들을 부러먹는다	1	2	3	4	5	6	7
2. 신체상의 위험 부담이 큰일은 여성보다 남성이 감당해야 한다.	1	2	3	4	5	6	7
3. 남성에 비해 여성들은 기분이 쉽게 상하는 편이어서 업무처리가 합리적이지 못하다	1	2	3	4	5	6	7
4. 남자가 세상을 이끌어 가는 것이 마땅함에도 여성들은 항상 불평을 늘어놓는다	1	2	3	4	5	6	7
5. 여학생보다는 책임질 줄 아는 남학생이 학급반장이 되어야 학급운영이 더 잘된다.	1	2	3	4	5	6	7
6. 여성들은 감정적으로 불안하여 큰일을 맡기기 어렵다	1	2	3	4	5	6	7
7. 여성들은 곤란하거나 부탁할 일이 있을 때만 남자를 찾는다	1	2	3	4	5	6	7
8. 좁은 길에서 남녀가 마주치면 남성이 먼저 길을 양보해야 한다.	1	2	3	4	5	6	7
9. 여성은 남자에 비해 가정을 잘 돌보는 세심함을 지니고 있다.	1	2	3	4	5	6	7
10. 남자아이는 남자답게, 여자아이는 여자답게 키우는 것이 중요하다.	1	2	3	4	5	6	7
11. 여자는 자녀를 기르고 집안일을 돌보는 능력이 있다.	1	2	3	4	5	6	7
12. 가족을 부양하는 것은 남자가 책임질 일이다	1	2	3	4	5	6	7
13. 어떤 조직이든 최고 책임자는 남자가 낫다.	1	2	3	4	5	6	7
14. 여성들은 남녀 간의 차이를 인정하지 않고 무조건 평등만을 주장한다.	1	2	3	4	5	6	7
15. 여성들은 데이트 비용은 모두 남성에게 떠맡기면서 비싼 명품들을 선호한다.	1	2	3	4	5	6	7
16. 추운 날씨에는 남자가 여자에게 옷을 벗어주는 것이 바람직하다.	1	2	3	4	5	6	7

17. 방과 후 반겨 줄 엄마가 집에 있어야 아이들의 정서 교육에 좋다.	1	2	3	4	5	6	7
18. 모든 일에서 남편이 아내를 리드하는 것이 좋다.	1	2	3	4	5	6	7
19. 우리 사회를 위해 해야 할 일이 많은 만큼 여자보다 남자에게 더 많은 결정권을 주어야 한다.	1	2	3	4	5	6	7
20. 여성은 남성에 비해 결단력이 부족해서 중요한 직책을 잘 수행하지 못한다.	1	2	3	4	5	6	7
21. 여자가 먼저 성적으로 유혹하고서는 마음에 들지 않으면 성희롱이라고 주장한다.	1	2	3	4	5	6	7
22. 가벼운 짐일 지라도 여성에게 들리기보다는 남성이 들어주어야 한다.	1	2	3	4	5	6	7
23. 남자는 이지적이고 여자는 감성적이므로 그에 맞는 일을 할 때 남녀가 조화를 이룬다.	1	2	3	4	5	6	7
24. 여성들은 국방의 의무 등 책임은 다하지 않으면서 자신들의 권리만을 내세운다.	1	2	3	4	5	6	7
25. 경제적 여유가 있다면, 아내는 직장에 나가지 않는 편이 좋다.	1	2	3	4	5	6	7
26. 아내에게 생활의 어려움을 겪지 않게 하는 것이 남편의 의무다.	1	2	3	4	5	6	7
27. 남편에게 사랑 받는 것이 아내의 가장 큰 행복이다.	1	2	3	4	5	6	7
28. 가정의 중요한 일은 남편이 책임을 지고 결정하는 것이 좋다.	1	2	3	4	5	6	7
29. 아내는 친정보다 시택을 더 중요하게 생각해야 한다.	1	2	3	4	5	6	7
30. 어떤 일이든 같은 일을 하는 남녀의 임금은 같아야 한다.	1	2	3	4	5	6	7

군복무에 대해 어떻게 생각하십니까?

	전혀 아니 다	대 체 로 그 렇 지 않 다	그 렇 지 않 은 편 이 다	보 통 이 다	그 런 편 이 다	대 체 로 그 렇 다	매 우 그 렇 다
1. 군대에 갔다 오면 철이든다.	1	2	3	4	5	6	7
2. 군대에 가지 않은 사람은 아직 미숙하고 뭔가 부족하다.	1	2	3	4	5	6	7
3. 군대에 가지 않아도 된다면 가고 싶지 않다.	1	2	3	4	5	6	7
4. 젊었을 때 2년이라고 하는 시간을 군대에서 보내는 것은 개인적으로 큰 손해다.	1	2	3	4	5	6	7
5. 군대 갔다 오면 바보가 된다.	1	2	3	4	5	6	7
6. 군대에서 보내는 시간이 아깝다.	1	2	3	4	5	6	7
7. 군대에서 본인의 노력에 의해 여러가지 기술을 배울 수 있다.	1	2	3	4	5	6	7
8. 한국인으로서의 책임감이 생긴다.	1	2	3	4	5	6	7
9. 힘든 군대훈련은 앞으로의 삶에 도움이 된다.	1	2	3	4	5	6	7
10. 자기 자신을 성찰하는 기회가 된다.	1	2	3	4	5	6	7
11. 장래에 대해 깊이 생각하게 된다.	1	2	3	4	5	6	7
12. 인내심과 생활력이 강해진다.	1	2	3	4	5	6	7
13. 자신감이 생긴다.	1	2	3	4	5	6	7
14. 가족이나 애인과 떨어져 있는 경험을 통해 성숙해진다.	1	2	3	4	5	6	7
15. 이성에 대한 가치관이 바람직하게 바뀐다.	1	2	3	4	5	6	7
16. 몸과 마음이 강건한 남자가 된다.	1	2	3	4	5	6	7
17. 부모님이나 친구의 소중함을 알게 된다.	1	2	3	4	5	6	7
18. 건강의 중요성을 알게 된다.	1	2	3	4	5	6	7
19. 다양한 사람들과의 만남을 통해 생각의 폭이 넓어진다.	1	2	3	4	5	6	7
20. 군대에 갔다와야 진짜 남자가 된다.	1	2	3	4	5	6	7

수고하셨습니다. 빠진 한 문항이라도 빠지면 애써 답변해 주신 질문지를 사용할 수 없습니다. 혹시 빠진 곳이 없는지 다시 한 번 확인해 주시면 감사하겠습니다

마지막으로, 아래의 질문에 답해주시오.

1. 성별 : 남 · 여

2. 학년 : 1학년 · 2학년 · 3학년 · 4학년

3. 전공 :

4. 나이 : (만) 세

5. 군대경험 : 있다 · 없다

있을 경우, 군복무 형태는 : 현역 · 공익근무 · 병역면제

6. 해외거주경험 : 있다 · 없다

있을 경우, 기간은 : 1년미만 · 1년이상 · 3년이상

7. 여성학 관련수업 수강경험 : 있다 · 없다

8. 형제 중에 군대 갔다온 사람이 : 있다 · 없다

연구의 결과가 궁금하신 분은 아래의 주소로 연락해 주십시오. 연구 종료 후 결과를 보내 드리겠습니다.

참여해 주셔서 감사합니다.

2009년 11월

소 속 : 일본 간사이대학 심리학연구과 박사과정
연 구 자 : 심 미 혜 (forgrace99@hanmail.net)

귀중한 시간 조사에 협력해 주셔서 감사합니다.

질문지는 **전체 6페이지(앞뒤)**로 구성되어 있습니다. 소요시간은 약 10분 정도 예상하고 있습니다. 한 문항이라도 빠지면 애써 답변해 주신 질문지를 사용할 수 없게 되니 빠짐 없이 기입해 주시길 부탁드립니다.

연 령 : 만 세

군복무지 : 전방 _____ 후방 _____ (해당되는 곳에 표시해 주십시오√)

주특기 : 전투병 _____ 행정병 _____ 기술병 _____ (구체적으로)

제대시기 : 20 년 월

아래는 사람의 성격적 특성을 표현하는 말들입니다. 각각의 특성이나 행동 표현에 자신을 얼마나 잘 표현하는지를 생각해보고, 자신을 가장 적절하게 표현해 주는 칸에 O 표나 \checkmark 표를 하십시오.

내 성격은,	전혀 아니다	대체로 그렇지 않다	그렇지 않은 편이다	보통 이다	그런 편이다	대체로 그렇다	매우 그렇다
1. 뒤끝이 없다	1	2	3	4	5	6	7
2. 꼼꼼하다	1	2	3	4	5	6	7
3. 우직하다	1	2	3	4	5	6	7
4. 감성이 풍부하다	1	2	3	4	5	6	7
5. 정의롭다	1	2	3	4	5	6	7
6. 깔끔하다	1	2	3	4	5	6	7
7. 대담하다	1	2	3	4	5	6	7
8. 얌전하다	1	2	3	4	5	6	7
9. 의리가 있다	1	2	3	4	5	6	7
10. 아름다움을 추구한다	1	2	3	4	5	6	7
11. 용감하다	1	2	3	4	5	6	7
12. 계획성이 있다	1	2	3	4	5	6	7
13. 운동하는 것을 좋아한다	1	2	3	4	5	6	7
14. 알뜰하다	1	2	3	4	5	6	7
15. 강인하다	1	2	3	4	5	6	7
16. 섬세하다	1	2	3	4	5	6	7

	전혀 아니다						매우 그렇다
17. 의욕적이다	1	2	3	4	5	6	7
18. 애교가 있다	1	2	3	4	5	6	7
19. 박력이 있다	1	2	3	4	5	6	7
20. 눈물이 많다	1	2	3	4	5	6	7
21. 모험적이다	1	2	3	4	5	6	7
22. 보호받고 싶어한다	1	2	3	4	5	6	7
23. 의지가 강하다	1	2	3	4	5	6	7
24. 수줍어한다	1	2	3	4	5	6	7
25. 자신감이 있다	1	2	3	4	5	6	7
26. 동정적이다	1	2	3	4	5	6	7
27. 진취적이다	1	2	3	4	5	6	7
28. 사랑받고 싶어한다	1	2	3	4	5	6	7
29. 순발력이 있다	1	2	3	4	5	6	7
30. 도도하다	1	2	3	4	5	6	7
31. 보호받고 싶어하지 않는다	1	2	3	4	5	6	7
32. 감정을 중시한다	1	2	3	4	5	6	7
33. 야망이 있다	1	2	3	4	5	6	7
34. 예민하다	1	2	3	4	5	6	7
35. 주도적이다	1	2	3	4	5	6	7
36. 남을 돕는 것을 좋아한다	1	2	3	4	5	6	7

군복무에 대해 어떻게 생각하십니까?	전 혀 아 니 다	아 니 다	보 통 이 다	그 렇 다	매 우 그 렇 다
1. 남자는 군대에 갔다 와야 철이 든다.	1	2	3	4	5
2. 군복무 경험은 자기 성찰의 기회가 된다.	1	2	3	4	5
3. 군복무 경험을 통해 남자로서의 책임감이 더욱 강해진다.	1	2	3	4	5
4. 군복무 경험을 통해 부모와 가족에 대한 소중함을 알게 된다.	1	2	3	4	5
5. 군대를 경험하게 되면 인내심이 생기게 된다.	1	2	3	4	5
6. 군복무 경험은 조직사회에 대한 적응력을 기르게 한다	1	2	3	4	5
7. 군복무 경험을 통해 인간 관계의 기술이나 리더십을 배운다	1	2	3	4	5
8. 군대에서의 여러 가지 경험은 사회생활에 큰 도움이 된다.	1	2	3	4	5
9. 군대를 경험한 남자들만의 끈끈한 의리가 있다.	1	2	3	4	5
10. 군복무 경험을 통해 문제 해결 능력을 기른다	1	2	3	4	5
11. 군복무가 단지 세월을 낭비하는 시간이라고는 생각하지 않는다.	1	2	3	4	5
12. 군대에 갔다 와야 진짜 남자가 된다.	1	2	3	4	5

혹시 빠진 곳이 없는지 확인을 부탁드립니다

다음은 우리 사회에서 나타나는 일반적인 남녀관계에 대해 어떻게 생각하는지 알아보려는 질문입니다. 자신의 생각에 대해 답변해 주십시오	전혀 그렇지 않다	그렇지 않다	그렇다	매우 그렇다
내 생각에,				
1. 여성은 자신의 미모를 이용해서 남자들을 부러먹는다	1	2	3	4
2. 신체상의 위험 부담이 큰일은 여성보다 남성이 감당해야 한다.	1	2	3	4
3. 남성에 비해 여성들은 기분이 쉽게 상하는 편이어서 업무처리가 합리적이지 못하다	1	2	3	4
4. 남자가 세상을 이끌어 가는 것이 마땅함에도 여성들은 항상 불평을 늘어놓는다	1	2	3	4
5. 여학생보다는 책임질 줄 아는 남학생이 학급반장이 되어야 학급운영이 더 잘된다.	1	2	3	4
6. 여성들은 감정적으로 불안하여 큰일을 맡기기 어렵다	1	2	3	4
7. 여성들은 곤란하거나 부탁할 일이 있을 때만 남자를 찾는다	1	2	3	4
8. 좁은 길에서 남녀가 마주치면 남성이 먼저 길을 양보해야 한다.	1	2	3	4
9. 여성은 남자에 비해 가정을 잘 돌보는 세심함을 지니고 있다.	1	2	3	4
10. 남성은 여성과의 사랑이 없다면 결코 행복해 질 수 없다.	1	2	3	4
11. 여자는 자녀를 기르고 집안 일을 돌보는 능력이 있다.	1	2	3	4
12. 사랑하는 여성이 있을 때 남성은 온전한 삶을 살 수 있다.	1	2	3	4
13. 사랑하는 여성이 없다면 남성의 삶은 무의미할 것이다.	1	2	3	4
14. 여성들은 남녀 간의 차이를 인정하지 않고 무조건 평등만을 주장한다.	1	2	3	4
15. 여성들은 데이트 비용은 모두 남성에게 떠맡기면서 비싼 명품들을 선호한다.	1	2	3	4
16. 추운 날씨에는 남자가 여자에게 옷을 벗어주는 것이 바람직하다.	1	2	3	4
17. 방과 후 반겨 줄 엄마가 집에 있어야 아이들의 정서 교육에 좋다.	1	2	3	4
18. 여성의 사랑을 얻은 남자가 진정한 남자라고 할 수 있다	1	2	3	4
19. 우리 사회를 위해 해야 할 일이 많은 만큼 여자보다 남자에게 더 많은 결정권을 주어야 한다.	1	2	3	4
20. 여성은 남성에 비해 결단력이 부족해서 중요한 직책을 잘 수행하지 못한다.	1	2	3	4

마지막 페이지가 남아 있습니다.

	전 혀 아 니 다	아 니 다	그 렇 다	매 우 그 렇 다
21. 여자가 먼저 성적으로 유혹하고서는 마음에 들지 않으면 성희롱이라고 주장한다.	1	2	3	4
22. 가벼운 짐일 지라도 여성에게 들리기보다는 남성이 들어주어야 한다.	1	2	3	4
23. 남자는 이지적이고 여자는 감성적이므로 그에 맞는 일을 할 때 남녀가 조화를 이룬다.	1	2	3	4
24. 여성들은 국방의 의무 등 책임은 다하지 않으면서 자신들의 권리만을 내세운다.	1	2	3	4
25. 결혼한 여성이 친정 부모를 모시는 일은 남편에게 미안한 일이다.	1	2	3	4
26. 가족의 생계는 남편이 책임져야 한다.	1	2	3	4
27. 남편의 수입이 충분하다면 굳이 아내가 일할 필요는 없다.	1	2	3	4
28. 아내의 본분은 자녀를 키우고 집안 일을 돌보는 것이다.	1	2	3	4
29. 결혼한 여성은 친정보다 시댁을 우선 생각해야 한다.	1	2	3	4
30. 집안의 평화를 위해서는 아내가 남편에게 순종하는 것이 바람직하다.	1	2	3	4

감사합니다. 한 문항이라도 빠지면 애써 답변해 주신 질문지를 사용할 수 없습니다.
혹시 빠진 곳이 없는지 다시 한 번 확인을 부탁드립니다.

수고 하셨습니다. 귀중한 시간 감사 드립니다.
응답해 주신 모든 내용은 본 연구의 목적으로만 사용하겠습니다.

간사이대학 심리학연구과 심미혜
forgrace99@hotmail.com

(2년 전 대상자)

귀중한 시간 조사에 협력해 주셔서 감사합니다.

질문지는 **전체 6페이지**로 구성되어 있으며 소요시간은 약 10~15분 정도 예상하고 있습니다. 한 문항이라도 빠지면 애써 답변해 주신 질문지를 사용할 수 없게 되니 빠짐없이 기입해 주시길 **꼭** 부탁드립니다.

※ 가장 중요한 데이터입니다. 모든 정보를 정확히 기입해 주시길 부탁드립니다

연 령 : 만 세

군필유무 : 미필 _____ 군필 _____ (해당되는 곳에 표시해 주십시오v)

(군필자에만 해당)

군복무지 : 전방 _____ 후방 _____ (해당되는 곳에 표시해 주십시오v)

주특기 : 전투병 _____ 행정병 _____ 기술병 _____ (표시 후 구체적으로)

입대, 제대 시기 : 20 년 월 ~ 20 년 월

연락처 : (e-mail)

※아래는 사람의 성격적 특성을 표현하는 말들입니다. 각각의 특성이나 행동 표현에 자신을 얼마나 잘 표현하는지를 생각해보고, **자신을 가장 적절하게 표현**해 주는 칸에 ○ 표나 √ 표를 하십시오.

내 성격은?	전혀 아 니 다	대	그	보	그	대	매
		체	렇			편	
		로	지	통	린	로	그
		그	않	이	편	그	렇
		렇	은	다	이	렇	다
		지	편		다	다	
		않	이				
		다	다				
1. 뒤끝이 없다 -----	1	2	3	4	5	6	7
2. 꼼꼼하다 -----	1	2	3	4	5	6	7
3. 우직하다 -----	1	2	3	4	5	6	7
4. 감성이 풍부하다 -----	1	2	3	4	5	6	7
5. 정의롭다 -----	1	2	3	4	5	6	7
6. 깔끔하다 -----	1	2	3	4	5	6	7
7. 대담하다 -----	1	2	3	4	5	6	7
8. 얌전하다 -----	1	2	3	4	5	6	7
9. 의리가 있다 -----	1	2	3	4	5	6	7
10. 아름다움을 추구한다 -----	1	2	3	4	5	6	7
11. 용감하다 -----	1	2	3	4	5	6	7
12. 계획성이 있다 -----	1	2	3	4	5	6	7
13. 운동하는 것을 좋아한다 -----	1	2	3	4	5	6	7
14. 알뜰하다 -----	1	2	3	4	5	6	7
15. 강인하다 -----	1	2	3	4	5	6	7
16. 섬세하다 -----	1	2	3	4	5	6	7
17. 의욕적이다 -----	1	2	3	4	5	6	7
18. 애교가 있다 -----	1	2	3	4	5	6	7
19. 박력이 있다 -----	1	2	3	4	5	6	7
20. 눈물이 많다 -----	1	2	3	4	5	6	7

21. 모험적이다 -----	1	2	3	4	5	6	7
22. 보호받고 싶어한다 -----	1	2	3	4	5	6	7
23. 의지가 강하다 -----	1	2	3	4	5	6	7
24. 수줍어한다 -----	1	2	3	4	5	6	7
	전혀 아니다						매우 그렇다
25. 자신감이 있다 -----	1	2	3	4	5	6	7
26. 동정적이다 -----	1	2	3	4	5	6	7
27. 진취적이다 -----	1	2	3	4	5	6	7
28. 사랑 받고 싶어한다 -----	1	2	3	4	5	6	7
29. 순발력이 있다 -----	1	2	3	4	5	6	7
30. 도도하다 -----	1	2	3	4	5	6	7
31. 보호받고 싶어하지 않는다 -----	1	2	3	4	5	6	7
32. 감정을 중시한다 -----	1	2	3	4	5	6	7
33. 야망이 있다 -----	1	2	3	4	5	6	7
34. 예민하다 -----	1	2	3	4	5	6	7
35. 주도적이다 -----	1	2	3	4	5	6	7
36. 남을 돕는 것을 좋아한다 -----	1	2	3	4	5	6	7

혹시 빠진 곳이 없는지 확인을 부탁드립니다

※다음은 우리 사회에서 나타나는 일반적인 남녀관계에 대해 어떻게 생각하는지 알아보려는 질문입니다.
자신의 생각에 답변해 주십시오.

내 생각에,

	전혀 그렇지 않다	그 렇지 않 다	그 렇 다	매 우 그 렇 다
1. 여성은 자신의 미모를 이용해서 남성들을 부러먹는다 -----	1	2	3	4
2. 신체상의 위험 부담이 큰일은 여성보다 남성이 감당해야 한다. -----	1	2	3	4
3. 남성에 비해 여성들은 기분이 쉽게 상하는 편이어서 업무처리가 합리적이지 못하다	1	2	3	4
4. 남자가 세상을 이끌어 가는 것이 마땅함에도 여성들은 항상 불평을 늘어놓는다	1	2	3	4
5. 여학생보다는 책임질 줄 아는 남학생이 학급반장이 되어야 학급운영이 더 잘된다.	1	2	3	4
6. 여성들은 감정적으로 불안하여 큰일을 맡기기 어렵다 -----	1	2	3	4
7. 여성들은 곤란하거나 부탁할 일이 있을 때만 남자를 찾는다 -----	1	2	3	4
8. 좁은 길에서 남녀가 마주치면 남성이 먼저 길을 양보해야 한다. -----	1	2	3	4
9. 여성은 남자에 비해 가정을 잘 돌보는 세심함을 지니고 있다. -----	1	2	3	4
10. 남성은 여성과의 사랑이 없다면 결코 행복해 질 수 없다. -----	1	2	3	4
11. 여자는 자녀를 기르고 집안 일을 돌보는 능력이 있다. -----	1	2	3	4
12. 사랑하는 여성이 있을 때 남성은 온전한 삶을 살 수 있다. -----	1	2	3	4
13. 사랑하는 여성이 없다면 남성의 삶은 무의미할 것이다. -----	1	2	3	4
14. 여성들은 남녀 간의 차이를 인정하지 않고 무조건 평등만을 주장한다. -----	1	2	3	4
15. 여성들은 데이트 비용은 모두 남성에게 떠맡기면서 비싼 명품들을 선호한다.	1	2	3	4
16. 추운 날씨에는 남자가 여자에게 옷을 벗어주는 것이 바람직하다. -----	1	2	3	4
17. 방과 후 반겨 줄 엄마가 집에 있어야 아이들의 정서 교육에 좋다. -----	1	2	3	4
18. 여성의 사랑을 얻은 남자가 진정한 남자라고 할 수 있다 -----	1	2	3	4
19. 우리 사회를 위해 해야 할 일이 많은 만큼 여자보다 남자에게 더 많은 결정권을 주어야 한다.	1	2	3	4
20. 여성은 남성에 비해 결단력이 부족해서 중요한 직책을 잘 수행하지 못한다. -----	1	2	3	4
21. 여자가 먼저 성적으로 유혹하고서는 마음에 들지 않으면 성희롱이라고 주장한다.	1	2	3	4
22. 가벼운 짐일 지라도 여성에게 들리기보다는 남성이 들어주어야 한다. -----	1	2	3	4
23. 남자는 이지적이고 여자는 감성적이므로 그에 맞는 일을 할 때 남녀가 조화를 이룬다.	1	2	3	4

- | | | | | |
|--|---|---|---|---|
| 24. 여성들은 국방의 의무 등 책임은 다하지 않으면서 자신들의 권리만을 내세운다. | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 25. 결혼한 여성이 친정 부모를 모시는 일은 남편에게 미안한 일이다. ----- | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 26. 가족의 생계는 남편이 책임져야 한다. ----- | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 27. 남편의 수입이 충분하다면 굳이 아내가 일할 필요는 없다 ----- | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 28. 아내의 본분은 자녀를 키우고 집안 일을 돌보는 것이다. ----- | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 29. 결혼한 여성은 친정보다 시댁을 우선 생각해야 한다 ----- | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 30. 집안의 평화를 위해서는 아내가 남편에게 순종하는 것이 바람직하다. ----- | 1 | 2 | 3 | 4 |

마지막 페이지가 남아 있습니다.

군복무에 대해 어떻게 생각하십니까?

	전혀 아니 다	그 렇 지 는 않 다	보 통 이 다	그 런 편 이 다	매 우 그 렇 다
1. 남자는 군대에 갔다 와야 철이 들고 진짜 남자가 된다 -----	1	2	3	4	5
2. 군대에 가지 않는 사람은 아직 미숙하고 부족한 것이 있다 -----	1	2	3	4	5
3. 군복무경험을 통해 남자로서의 책임감이 더욱 강해진다 -----	1	2	3	4	5
4. 젊었을 때 2년이라는 시간을 군대에서 보내는 것은 개인적으로 큰 손해 라고 생각한다	1	2	3	4	5
5. 군복무가 단지 세월을 낭비하는 시간이라고는 생각하지 않는다 -----	1	2	3	4	5
6. 군대 갔다 오면 바보가 된다 -----	1	2	3	4	5
7. 군대에서 보낸 시간들이 너무 아깝다 -----	1	2	3	4	5
8. 군복무경험은 사회 생활에 큰 도움이 된다 -----	1	2	3	4	5
9. 군복무 경험을 통해 부모와 가족에 대한 소중함을 알게 된다. -----	1	2	3	4	5
10. 군대를 경험하게 되면 인내심이 생기게 된다. -----	1	2	3	4	5
11. 군복무 경험은 조직사회에 대한 적응력을 기르게 한다 -----	1	2	3	4	5
12. 군복무 경험을 통해 인간 관계의 기술이나 리더십을 배운다 -----	1	2	3	4	5
13. 군복무경험은 자신을 되돌아보고 성찰하는 계기가 되었다 -----	1	2	3	4	5
14. 군대에서 상사들과의 관계가 원만했다 -----	1	2	3	4	5
15. 힘들 때 내 얘기를 들어주는 상대가 있었다 -----	1	2	3	4	5
16. 군대 분위기가 전반적으로 좋았다 -----	1	2	3	4	5
17. 내가 남자로 태어난 것을 자랑스럽게 여긴다 -----	1	2	3	4	5

수고 하셨습니다. 귀중한 시간 감사 드립니다.

응답해 주신 모든 내용은 본 연구의 목적으로만 사용하겠습니다.

연구의 분석 결과를 알고 싶으신 분은 아래의 주소로 연락 주십시오. 결과를 보내드리겠습니다.

간사이대학 심리학연구과 심미혜 (forgrace99@hotmail.com)